

[授業科目名] 哲学へのいざない		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけると いうことを授業の到達目標とする。			
授業の概要 古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生に にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第1回から第5回までは、哲学への導入と学習・思考など の諸問題を基本的考察とし、第6回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回 以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。 なお、初回授業時にこの科目に対する要望などを調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する 場合がある。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 哲学とは何か ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように 関わってくるのかということを考える。 「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。 第2回 考えるとはどういうことか 「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問いかけ は、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわか ったと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。 第3回 自己疎外 私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在するこ とを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面につい ても考える。 第4回 ことばの働き 私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによっ て大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまにつ いて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。 第5回 隠されたカリキュラム 学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものでもあると、イリイチ は気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾 けてほしい。 第6回 存在と価値 価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につ き動かされている私たち自身の生き方に注目する。			

第7回 実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を2つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問いに立ち向かう。

第8回 日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第9回 中国の哲学(1)

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回 中国の哲学(2)

老荘の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回 イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回 これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回 現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これからの自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回 公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。ある人類学者がかつて論じたことだが、日本人は、単独の個人としては、公共性が薄いという。本当だろうか。私たちはどう考えるだろうか。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回 試験

受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問いを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

[授業科目名] 宗教と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解できるようになることを、授業の目標とする。			
授業の概要 日常経験によって証明できない秩序に関心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。			
学生に対する評価の方法 毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本人は本当に無宗教か 宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。 なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。 第2回 古代神話のヒーローたち 古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。 第3回 イエス・キリストの7つの秘密 イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。 第4回 コーランの響き キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。 第5回 曼荼羅の神秘 仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。 第6回 一休さんの悟り方 頓知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粹な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。 第7回 浄土への祈り 浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。			

第8回 千と千尋の宗教学

宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第9回 豆腐小僧のかわいい悪戯

民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第10回 「道」の世界

剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第11回 枯山水の宇宙

わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第12回 謎の微笑

仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第13回 残照の聖ミカエル

ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第14回 花子さんはなぜ学校に現れるか。

宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第15回 現代社会と宗教

現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 倫理上に生じるアンビバレント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。			
授業の概要 倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。 問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。詳しくは第1回授業時に、また、レポートについては必要に応じて説明する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 倫理学とは何か 「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。 「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。 第2回 黄金のルール 多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。 第3回 男らしさと女らしさ さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。 第4回 総合的学習(1) 小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。 第5回 「男と女」再考 討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エートス」（この語については、第1回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。 第6回 孤独について 「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。 第7回 「いじめ」の構造 なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、そして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。			

第8回 総合的学習(2)

小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第9回 環境問題はどこが難しいか

環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。

第10回 環境問題の現状と倫理

「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が叫ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。

第11回 生命と倫理(1)

身体性に注目し、私という存在を身体のみから考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。

第12回 生命と倫理(2)

生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、1頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。

第13回 産業社会と倫理(1)

さまざまな産業にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。

第14回 産業社会と倫理(2)

前回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。

第15回 まとめ

これまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問いを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 真田 郷史																																													
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」 現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。																																																
授業の概要 20世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった3つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。																																																
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全15回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。授業への出席・講義内容の理解(60%)・課題への積極的取り組み(40%)が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。																																																
授業計画(回数ごとの内容等) 「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の3つの領域から、それぞれ4つないし5つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は10分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。																																																
<table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>ガイダンス</td> <td>「応用倫理学」について</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>生命倫理(1)</td> <td>脳死をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>生命倫理(2)</td> <td>臓器移植をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>生命倫理(3)</td> <td>生殖医療をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>生命倫理(4)</td> <td>遺伝病をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>環境倫理(1)</td> <td>人間と自然をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>環境倫理(2)</td> <td>自然の権利をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>環境倫理(3)</td> <td>世代間倫理をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>環境倫理(4)</td> <td>地球全体主義をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>環境倫理(5)</td> <td>人口爆発をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>情報倫理(1)</td> <td>匿名性をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>情報倫理(2)</td> <td>プライバシーをめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>情報倫理(3)</td> <td>著作権をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>情報倫理(4)</td> <td>ネット社会と現実社会をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>情報倫理(5)</td> <td>言語グローバリズムをめぐる問題</td> </tr> </table>				第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について	第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題	第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題	第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題	第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題	第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題	第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題	第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題	第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題	第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題	第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題	第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題	第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題	第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題	第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題
第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について																																														
第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題																																														
第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題																																														
第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題																																														
第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題																																														
第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題																																														
第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題																																														
第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題																																														
第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題																																														
第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題																																														
第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題																																														
第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題																																														
第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題																																														
第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題																																														
第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題																																														
使用教科書 なし(必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。)																																																
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、TVのニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起きているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。																																																

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 科学的心理学の視点から、社会や人間について考察することを目標とする。また、これまでの自分の視点や世間の常識的な視点をとらえなおすことで、大学教育にふさわしい新たな枠組みを構築していく。			
授業の概要 知覚、記憶、学習、対人行動といった心理学の入門的内容を扱う。基本的な心理学の研究を紹介しながら、現実世界で遭遇する問題について考えていく。授業中簡単な実験や調査を体験することで、多様な心理学の世界を考えてみる。			
学生に対する評価の方法 再評価は行わない。授業中の小レポートと終盤に行う筆記試験で総合的に評価する。なお出席状況や授業態度が悪い場合は、減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理学と心の科学 第2回 科学的に考えるとは 第3回 無意識の世界1 無意識の世界とは 第4回 無意識の世界2 見えるものと見えないもの 第5回 無意識の世界3 記憶に残るものと残らないもの 第6回 無意識の世界4 好きになるときならないとき 第7回 マインドコントロール1 条件づけと行動変容 第8回 マインドコントロール2 説得による態度変容 第9回 マインドコントロール3 集団と権威の力 第10回 暴力的なところ1 暴力的な人の特徴 第11回 暴力的なところ2 暴力が起きやすい条件 第12回 暴力的なところ3 攻撃に関する理論 第13回 暴力的なところ4 身近な暴力・虐待 第14回 評価 第15回 調査研究の報告			
使用教科書 下野孝一著 「こころの解体新書 心理学概論への招待」ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと理解しやすい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の見点から青年期をとらえる視点をもち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。			
授業の概要 本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割として自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。			
学生に対する評価の方法 再評価はしない。期間中課す4回のレポート(20%)と終盤に行う筆記試験(80%)から総合的に評価する。ただし出席状況や授業態度が悪いときには減点する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「青年期」の成立 第2回 成長する身体と性役割意識1-身体の成長と成熟する性 第3回 成長する身体と性役割意識2-性別と性役割意識 第4回 認知能力の発達1-抽象的な認知能力 第5回 認知能力の発達2-他者視点の取得と道徳性の発達 第6回 成長する私1-自己と自我 第7回 成長する私2-アイデンティティの確立 第8回 成長する私3-社会的比較理論と友人関係の発達 第9回 彷徨する親子関係-親子間のコミュニケーション 第10回 恋愛と性行動1-恋愛に関する理論 第11回 恋愛と性行動2-恋に落ちるとき 第12回 恋愛と性行動3-恋愛の進展 第13回 恋愛と性行動4-セクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 「青年心理学への誘い-漂流する若者たち-」 和田実・諸井克英著 ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻のみ (認定心理士資格取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の視点から青年心理学の基礎を学ぶとともに、青年期教育に関連する問題への心理学的アプローチについて理解することを目標とする。			
授業の概要 認定心理士取得を前提とする。青年心理学の基本的な問題について解説し、さらに心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究といった雑誌の関連論文の内容をしながら、最近の研究動向についても概観していく。			
学生に対する評価の方法 再評価をしない。指定論文の要約をも含めたレポートと、終盤における筆記試験によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「青年期」の成立と青年心理学の誕生 第2回 文化的規定と生物学的規定 第3回 身体の成長と瘦身願望 第4回 性の分化 第5回 性役割と現代社会 第6回 認知発達と学校教育 第7回 他者視点、共感性 第8回 アイデンティティの確立 第9回 自己の分化と自尊感情 第10回 友人とのつきあいかたと孤独感 第11回 親子のコミュニケーション 第12回 恋愛に関する理論：成人期アタッチメント 第13回 恋愛至上主義とセクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 関連する内容について、他の授業とあわせて考えると理解しやすい。また心理学の研究雑誌も目を通すようにしておくことがのぞましい。			

[授業科目名] 日本の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代日本の歴史、ことにアジア・太平洋戦争にいたる過程を、テキストに沿ってじっくり学ぶ。場合によっては当時の新聞・雑誌類を参照しながら、時代のリアリティを感じるのが大切である。諸君が時々耳にされるであろう「平成の開国」とはなにであるのか、「開国」は日本になにをもたらししてきたのかを、順を追って観ていく。			
授業の概要 松本健一の『日本の失敗』をテキストに、その内容を各章ごとに区切って講義し、時には教室で学生諸君に音読を求める。日本はなぜ戦争をし、それに負けたのかがテキストのテーマである。授業では一歩進んで、敗戦と現代の生活はどのようにつながっているのか、いま、日本はなにをしなればいけないかを考えて行こう。			
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に沿った小テストをする。出席も大切だが、各回の答案に表れる、問題をどうとらえたか、いかに真剣に答えようとしたかを重視する。毎期末、出席が足りないがどうかしてほしいという学生が出現するが、もはや取り返しのつかない事態であることを理解するべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本の歴史を学ぶ意味とは 第2回 日米の仮想敵国 第3回 発端としての「対支二十一カ条」 第4回 アジアの帝国主義 第5回 「日米衝突」のシナリオ 第6回 満州事変というファシズム 第7回 世界戦争のプロローグ 第8回 「侵略」という認識 第9回 統帥権干犯の思想 第10回 軍部の独裁化をめぐる 第11回 精神的鎖国としての国体イデオロギー 第12回 日本の「世界史」 第13回 大東亜戦争の「開戦の詔勅」をめぐる 第14回 時代思潮としての「死の哲学」 第15回 外の力 テキストは決して平易ではない。が、平易ではない書物に出会う場が、大学である。とはいえ、本には読み方がある。難しいものは、易くして理解する方法がある。だから心配することはない。いままでの自分がどうであったかは問わない。ただ、この科目を履修するには、毎回、きちんと出席することが大切である。学ぶことについて、近道の遠回りもありえる。しかし単位に関する限り、抜け道はない。各回の講義の時間内に、頭を使って課題を解決していくことが、案外、これからも、生きていく上で大切な能力だと理解されると思う。			
使用教科書 『日本の失敗』松本健一著、岩波現代文庫			
自己学習の内容等アドバイス 講義が終わったら、わからない用語を調べておくこと。前もって読んでおくつもりが出てきたら、それは大変な進歩である。松本氏の他の著作も読んでみることをすすめる。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早坂 泰行
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではドイツを中心に、ヨーロッパの近代史を取り上げる。現在私たちが自明のもののみなしている社会のしくみや制度、生活様式のうち、多くのものは近代に入ってから始めてつくり出されたものである。また近代の歴史は、現在の私たちにとってもなお重大な、多くの問題をも突きつけている。近代世界の形成過程を学ぶことをつうじて、現在の私たちの社会や生活のかたちを、複眼的に捉える姿勢を養うことを目指す。			
授業の概要 近代ヨーロッパ全体の動向を広く視野におさめながら、近現代(17世紀半ば～20世紀半ば)のドイツについて、その政治・経済・社会的な側面を取り扱う。講義においてはPowerPoint やDVDなどの視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な生活や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージを容易に捉えられるよう配慮する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 近代ヨーロッパとドイツ史に関するイントロダクション 第2回 ウェストファリア体制 第3回 啓蒙思想と近世の文化 第4回 フランス革命とナポレオンの時代 第5回 ドイツの自由主義とナショナリズム 第6回 「ドイツ」帝国の成立 第7回 第二次産業革命～大陸ヨーロッパとドイツの工業化 第8回 帝国主義の時代 第9回 世紀転換期ドイツの社会と文化 第10回 第一次世界大戦～総力戦の時代 第11回 ワイマル共和国 第12回 ナチズムと第二次世界大戦(1) 第13回 ナチズムと第二次世界大戦(2) 第14回 戦後冷戦と再統一の間のドイツ 第15回 期末試験			
使用教科書 特になし。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会や文化を捉えなおしながら、考えや論点をまとめること。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 京極 俊明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドイツの近代史を学び、基礎的な知識を身につけると同時に、ナショナリズム、帝国主義、総力戦といった近代史上の重要な概念について、理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 啓蒙専制君主の時代から、第一次世界大戦終結までのドイツの近代史について、ヨーロッパ全体の動向と結びつけて講義を行う。授業ではプリントとパワーポイントを使用する。またDVD教材「映像の世紀」を視聴する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から総合して判定する。この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 はじめに 第2回 啓蒙専制君主の時代（1） 第3回 啓蒙専制君主の時代（2） 第4回 ナポレオン戦争 第5回 ウィーン体制 第6回 1848年革命 第7回 ドイツ統一（1） 第8回 ドイツ統一（2） 第9回 ドイツ帝国の成立 第10回 ビスマルク体制 第11回 ヴィルヘルム2世の時代 第12回 第一次世界大戦（1） 第13回 第一次世界大戦（2） 第14回 まとめ 第15回 試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 参考図書として、坂井栄八朗「ドイツ史十講」（岩波書店）を挙げておく。			

[授業科目名] アジアの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鵜飼 尚代
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 最近「東アジア共同体」などという語を耳にするようになった。結束の目的は何であれ、ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われるので、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。			
授業の概要 世界史的観点からアジア史、とくに東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史の一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。			
学生に対する評価の方法 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価はa. b. c. を総合して判断することになる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業は以下の通り進める予定である。 第1回 授業についてのオリエンテーション 授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。 第2回 中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱） 第3回 中国の近代化②（日清戦争前後） 第4回 中国の近代化③（義和団事変前後） 第5回 中国の近代化④（中華民国成立前後） 第6回 中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後） 第7回 中国の近代化⑥（現代中国への道） 第8回 朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後） 第9回 朝鮮半島の近代化②（日清戦争前後） 第10回 朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後） 第11回 朝鮮半島の近代化④（南北分離前後） 第12回 朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道） 第13回 ベトナムの近代化①（独立前後） 第14回 ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道） 第15回 試験 但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。 【参考図書】 ：布目潮風、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）			
自己学習の内容等アドバイス 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がります。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1・3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校3年から6年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をNIE方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。			
授業の概要 社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方、国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料の活用することができる柔軟な探求力を養うことをねらいとしている。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(30%)、小テスト・レポート(30%)、テスト(40%)などを総合的に評価する。特に授業欠席や遅刻は減点の対象となる。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 社会科の目標及び授業全体の紹介 第2回 社会科教育の教科内容 第3回 小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)・小テスト 第4回 小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故) 第5回 小学校第4学年社会科(ごみ、水道)・レポート 第6回 小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県) 第7回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業) 第8回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)・小テスト 第9回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第10回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第11回 小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解) 第12回 具体的な人物学習の事例①近世の人物・レポート 第13回 具体的な人物学習の事例②明治維新の人物 第14回 各種統計資料の利用方法 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 東京学芸大学社会科教育学研究室編「小学校社会科教師の専門性の育成 改訂版」教育出版			
自己学習の内容等アドバイス 社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をNIEとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意しておくこと。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会科学を学習するとき、つねに歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観をつくっていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いかと思われるので、さまざまな史料等も提示して、学生が興味を持つように授業を構成する。			
授業の概要 日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から150年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(20%)、レポート(20%)、テスト(60%)などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について 第2回 近代教育制度の成立と展開 第3回 小学校の普及と子どもの生活の変化 第4回 天皇制教育体制の確立 第5回 明治期小学校教育の実態 レポート 第6回 中等教育の拡充、高等教育の拡大 第7回 大正デモクラシー期における社会と教育の再編 第8回 都市新中間層と農村・都市下層の教育 第9回 大正自由教育の高揚 第10回 貧窮する農村、変化する社会 レポート 第11回 戦時体制下の学校と子ども 第12回 敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革 第13回 新学制の展開、戦後教育の新段階 第14回 高度経済成長後の社会と教育 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 片桐芳雄・木村元編著「教育から見る日本の社会と歴史」八千代出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。特にテキストは次回の範囲を指定するので、事前によく読んで、授業に臨むこと。			

[授業科目名] 日本の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期レポート
授業の到達目標及びテーマ 智恵子抄の世界 詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、思考力と想像力を涵養する。			
授業の概要 詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ） 第2回 文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して） 第3回 『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで） 第4回 『智恵子抄』前詩「あをい雨」について 第5回 第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のころ」、詩「おそれ」とその背景 第6回 詩「或る宵」とその背景 第7回 詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景 第8回 愛の統合的定義の『智恵子抄』について 第9回 詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景 第10回 詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晚餐」とその背景 第11回 9年間の詩空白の意味と生活 第12回 第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景 第13回 第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景 第14回 テスト 第15回 『智恵子抄』その後			
使用教科書 大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社			
自己学習の内容等アドバイス 本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時に扱った詩とその背景について感想文を書く。			

[授業科目名] 英米の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河口 和子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～3年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～4年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本講座では、歴史的社会的背景を踏まえつつ、英語で書かれた文学、特にイギリス、アメリカ、アイルランド文学について概観することを到達目標とする。			
授業の概要 代表的な作家の優れた作品を選び、視聴覚機器を用いながら鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 定期試験（50%）、平常の授業態度、発言、レポート（50%）で総合的に評価を行う。 なお、授業開始から30分以上遅れてきた場合は欠席とする。遅刻3回で1回の欠席とする。 開講期間中、数回のレポート提出を課す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入（講義内容の説明、英国について） 第2回 英文学：英文学の導入 第3回 英文学：演劇と劇場 第4回 英文学：シェイクスピア1 第5回 英文学：シェイクスピア2 第6回 英文学：18世紀の小説 第7回 英文学：ジェイン・オースティン1 第8回 英文学：ジェイン・オースティン2 第9回 英文学：まとめ 第10回 アイルランド文学：アイルランド文化 第11回 アイルランド文学：神話、民話 第12回 アイルランド文学：W.B.イェイツ 第13回 米文学：演劇1 第14回 米文学：演劇2 第15回 試験日			
使用教科書 随時、資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げた作品を読んでおく。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。			
授業の概要 国の最高法規であり、国の基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 憲法とは何か 第3回 憲法とは何か（続） 第4回 社会契約説について 第5回 社会契約説について（続） 第6回 憲法の歴史 世界 第7回 憲法の歴史 世界（続） 第8回 憲法の歴史 日本 第9回 憲法の歴史 日本（続） 第10回 天皇制と戦争の放棄 第11回 三権分立について 第12回 自由と平等について 第13回 論文の書き方 第14回 社会権について 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
日本の憲法		講義	早川 秋子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前・後期	選択	前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を3本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにしたい。			
授業の概要 憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下での平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。 必要に応じてプリント配布、DVDやパワーポイントを使用する。			
学生に対する評価の方法 積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や他ごとをする学生を許さない。 ①受講態度 ②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうこともある）③最終評価（筆記テスト）（①20パーセント+②20パーセント+③60パーセント） 追試・再試はレポートで行う			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 憲法の制定・概念 憲法とは何か、どのような内容であるかを理解する 第2回 国家について考えてみよう 個人の尊重、国民主権、平和主義 第3回 人としての基本的な権利1 人権とは何か、幸福追求権 第4回 人としての基本的な権利2 新しい人権・自己決定権（尊厳死法の必要性について考える） 第5回 人としての基本的な権利3 法の下での平等（女性の再婚禁止期間・親殺し重罰規定違憲訴訟） 第6回 人としての基本的な権利4 信教の自由（靖国神社参拝問題を考える） 第7回 人としての基本的な権利5 表現の自由（報道の自由とプライバシー保護のバランスを考える） 第8回 人としての基本的な権利6 生存権（朝日訴訟と社会保障制度） 第9回 平和主義1 戦争放棄（歴史的視点から考える） 第10回 平和主義2 自衛隊（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟） 第11回 天皇 象徴天皇制（国事行為と女性天皇） 第12回 民主主義の政治制度 権力分立・裁判員制度 第13回 地方自治と 条例の制定（住民による直接請求） 第14回 憲法の改正 改憲の可能性・問題点 第15回 総まとめ・評価			
使用教科書 初宿正典他『いちばんやさしい憲法入門』（第4版）有斐閣 1600円			
自己学習の内容等アドバイス 講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのか、という日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。ただ、聞き流すのではなく、書き留めて改めて考え直す習慣をつけてみて下さい。			

[授業科目名] 法と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。			
授業の概要 民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 法のかたち 第3回 国家法と非国家法 第4回 法と道徳 第5回 法と道徳（続） 第6回 法のちから 第7回 法による制裁 第8回 刑罰について 第9回 裁判とはいかなるものか 第10回 司法の制度 第11回 民法とはいかなる法か 第12回 損害賠償の法 第13回 財産所有の法 第14回 契約の法 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者ほどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。法や裁判に関する読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 政治と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 島田 弦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この講義は、政治と社会に関する現代の問題について民主主義という視点から考えてみることにする。「民主主義」というのは、多くの人にとってもっとも身近な政治用語でしょうし、大切なことだと思うでしょう。しかし、民主主義の内容は時代や地域により多種多様です。この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かを考えます。			
授業の概要 この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かについて多くの事例をもとにビデオ素材などをもとに考えます。講義で取り扱ったビデオの内容について、400-600字のレポートを書いてもらいます（おおむね5回から6回）。また、授業開始15分以上の入室を認めないので注意すること。			
学生に対する評価の方法 ビデオに関するレポートの評価及び期末試験（論述式）の評価を合計して算出する。したがって、一定以上の成績を取るためには、各レポートの提出が重要であることを理解して下さい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1. オリエンテーション：民主主義のイメージ 2. 民主主義のための戦争 3. 民主主義のための戦争（対テロ戦争に関するビデオ） 4. 民主主義と表現の自由 5. 民主主義と表現の自由（デンマークの事例に関するビデオ） 6. 民主主義とマスメディア 7. 民主主義とマスメディア（ベトナム戦争とマスメディアに関するビデオ） 8. 民主主義と選挙 9. 民主主義と選挙（日本の選挙に関するビデオ） 10. 民主的社会における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ前半） 11. 民主的社会における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ後半） 12. 民主主義の実験 13. 民主主義の実験（中国の学校での試みに関するビデオ） 14. 講義のまとめ 15. 期末試験 受講者数、受講者の構成によって若干変更する場合があります。 また、時事問題を取り扱うために、順番や内容を変更する場合があります。			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 各回のレポートを提出しないと、成績評価が大幅に下がり、単位認定が困難になります。短いレポートなので、欠かさずに提出するようにしてください。			

[授業科目名] 経済と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。 本講の目標は、学生諸君に、①一見、疎遠に感じられる新聞の経済欄に親しくなってもらうこと、「経済記事が読める」または経済欄の記事に「ついていける」ようになってもらうこと、②現代経済社会の諸問題について理解を深めてもらうこと、ここにある。			
授業の概要 上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道VTR）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートI）。そして、わが国の経済発展のありようについて、特にその光と影の部分について考えてみる（パートII）。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参画態度（評価ウエート20%） ②産業・経済記事のレポート……具体的に産業・経済に関する新聞記事の一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を展開したりする。）（評価ウエート40%） ③最終レポート……授業内容からのテーマについてレポートを作成提出。（評価ウエート40%） 以上3点から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（経済学の役割） 第2回 序・市場経済とは何か？ われわれが生きる経済社会の基本メカニズムを考える。 ≪パートI 経済記事を読む上で知っておきたい経済知識≫ 第3回 円高・円安と経済生活① 外国為替の基本的メカニズムを学ぶ。 第4回 円高・円安と経済生活② 円高・円安に関する記事を読むときに必要な知識を学ぶ。 第5回 GDPとは何か？① 日本経済を大づかみに捉える（巨視的にみる）手法=GDPについて学ぶ。 第6回 GDPとは何か？② そもそも「豊かさ」とは何か？ その指標としてのGDPの問題点を考える。 第7回 景気とは何か？① 景気循環はなぜ起るか、その原理と景気予測の手法について学ぶ。 第8回 景気とは何か？② 日本の景気循環のありようを歴史的に振り返る。 第9回 政府・財政の役割とは？① 現代経済における政府の役割について学ぶ。 第10回 政府・財政の役割とは？② 日本の財政の現状と問題点を考える。 ≪パートII 経済社会の諸問題を考える ～経済発展の光と影≫ 第11回 日本の経済社会はどのように発展してきたか、VTRを見ながらその発展の経緯をサーベイする。 第12回 われわれは経済発展で何を、何を失ってきたか？ 経済成長の影の部分（自然破壊やさまざまな社会病理現象）について考える。 第13回 世界経済の諸問題① グローバル化とは何か？ アジア地域の経済の発展の経緯を考察しつつ、その意味を考える。 第14回 世界経済の諸問題② 資源・エネルギー、環境問題など、現代世界が抱える問題について考える。 第15回 まとめと発展的学習のための主要文献解説。			
使用教科書 テーマ関連の資料・記事などを毎回配布し、それに従って授業を行う。準拠する文献は、釜賀雅史著『日本経済を読む－新聞記事で学ぶ経済学－』学文社（参考書≒教科書）。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。 ≪より深く学ぶために≫ 授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみる。			

[授業科目名] 企業と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解できること、乃至、就職活動や社会人へのパスポートとしての企業経営の知識を身につけることが目標である。			
授業の概要 企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内で網羅することは到底不可能なので、下記の4つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①会社の方向性を決める「戦略論」、②顧客のニーズを探り、売れる仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70%）、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識（15%）、受講態度・欠席回数（15%）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要と心得. 企業と社会および環境変化との関係. 経済学と経営学との違いについて. 第2回 株式会社など企業形態の諸特質について. 第3回 企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について. 第4回 企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境） 第5回 基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など） 第6回 マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて） 第7回 市場細分化およびその基準、標的市場の選定 第8回 マーケティングの基本戦略 ①製品戦略 第9回 マーケティングの基本戦略 ②価格戦略 第10回 マーケティングの基本戦略 ③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略 第11回 組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など） 第12回 会計 ①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書 第13回 会計 ②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益） 第14回 会計 ③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など） 第15回 学期末試験			
使用教科書 教科書は使用しない。随時、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復讐および専門用語の意味調べ等が必須である。			

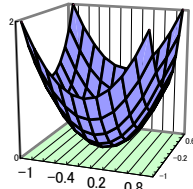
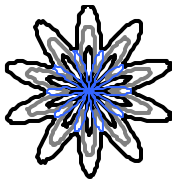
[授業科目名] 情報と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会、特に便利で効率的で合理化が叫ばれるような情報社会といわれる現代、そのメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）を認識することも重要である。さまざまな社会の病理現象を認識し、その中で如何に生きるべきかを問い直すことが目標でありテーマである。			
授業の概要 IT（情報技術）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。			
学生に対する評価の方法 学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数、欠席回数などのも考慮に入れて総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明 第2回 ①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど） 第3回 ②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、eコマース、光ファイバーケーブルなど） 第4回 情報という言葉の由来と歴史的な展開 第5回 情報の性質と種類 第6回 現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質） 第7回 情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して 第8回 ①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影） 第9回 ②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影） 第10回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について） 第11回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、eビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み） 第12回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活） 第13回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象） 第14回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題） 第15回 学期末試験			
使用教科書 『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）			
自己学習の内容等アドバイス 回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。			

[授業科目名] 社会学／家族の社会学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会学の対象と方法についての基礎知識を得ること。グローバル化という現代社会の現象が、私たちの日常生活をどのように変容させているかを知ること。毎回、小テストを実施する。インプットと同時に、アウトプットを学ぶこと。すこしでも文章を書くことが大切。			
授業の概要 指定テキストに沿って、各項目について講義する。テキストのテーマは、グローバル化時代の日常生活であり、私たちの学校生活、家庭生活、将来の職業生活がいま、どのような変化に直面しているかを学ぶ。事柄にはすべて歴史という側面がある。現在の大変さを知って、過去の教訓に学ぶのもまた重要だ。生きることに希望をもっていこう。そのための道案内が、社会学に課せられた課題でもある。			
学生に対する評価の方法 ほぼ毎回、講義内容に沿った小テストもしくはレポートを求める。これは出席と試験が一体になったもので、当然、出席は重視するが、小テストの答案が、出席していた内容を物語ることになることに注意すべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。 第1回 社会学入門、社会的相互行為、グローバル化 第2回 社会学理論と社会調査 第3回 身体社会学（健康・病気・障害） 第4回 社会成層と階級 第5回 貧困・社会的排除・福祉 第6回 人間の安全保障 第7回 人種とエスニシティ 第8回 組織社会学 第9回 戦争と現代 第10回 ライフストーリーの社会学 第11回 家族論 第12回 戦後日本の家族1 第13回 戦後日本の家族2 第14回 高度成長期の日本社会 第15回 現代をどうとらえるか テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、社会的な見方を学んでみよう。			
使用教科書 『入門 グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社			
自己学習の内容等アドバイス 予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。それも一般的な語義で十分なのか、『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る必要があるのか、それを判断するのもいい訓練になる。			

[授業科目名] アメリカの社会と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河井 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人種、階級、ジェンダーの視点から、もうひとつのアメリカをみる。マイノリティの視点から、アメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 自由の国としてのイメージをもつアメリカ。しかし、アメリカの自由は固定されたものではなく、21世紀になった今もたえず議論されているし、また変えられていくべきである。アメリカ合衆国が軍事的、経済的、文化的に世界で傑出した国でありながら、今なお戦争をしているためにその国際的影響力は弱まっている時であるからこそ、アメリカの歴史と価値を学ぶことは重要である。 本授業では、映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、「自由」の意味、その社会的条件、その境界（自由を享受する資格）という3つの視角から、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する20世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる20世紀後半をみていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度及び授業内で行うレポートによる授業の理解度（40%）、最終に実施する試験（60%）で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義の概要説明 「アメリカの世紀」 第2回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第3回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第4回 アメリカの文化の成立—その光と影（南北戦争後～1890年代） 第5回 20世紀前後のアメリカ—1890年代 第6回 革新主義の時代—1900年代～1910年代 第7回 大衆消費社会の展開—1920年代 第8回 「現代アメリカ」の危機—1930年代 第9回 アメリカの世紀へ—1940年代前半 第10回 冷戦下の「黄金時代」—1940年代後半～1950年代 第11回 激動の時代—1960年代 第12回 激動の時代—1960年代 第13回 保守の時代—1970年代～1980年代 第14回 文化戦争の世紀末—1990年代以降 第15回 試験日			
使用教科書 有賀夏紀『アメリカの20世紀』（上・下）（中公新書） 参考史料は適宜配布する。 【参考図書】 エリック・フォナー『アメリカ 自由の物語』（上・下）（岩波書店、2008年）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。			

[授業科目名] 民族と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。			
授業の概要 民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50％）に、受講態度（出席、遅刻、早退、出席カードへの記入など）を加味（50％）しながら、総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。 第2回 アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。 第3回 文化人類学と民族1。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。 第4回 文化人類学と民族2。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。 第5回 自然人類学と民族1。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。 第6回 自然人類学と民族2。人種と形質、民族との関係について述べる。 第7回 自然人類学と民族3。血液型と民族の関係について述べる。 第8回 スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。 第9回 世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。 第10回 衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。 第11回 食と民族、その1。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。 第12回 食と民族、その2。食材と食に関する禁忌。 第13回 食と民族、その3。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。 第14回 住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。 第15回 評価試験。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。			

[授業科目名] 国際社会の動き		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらによって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。			
授業の概要 まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族・文化（言語・宗教）・国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、わが国と対照しつつ考察する。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 国際社会とは 第3回 アジアの国々 第4回 ヨーロッパの国々と諸民族 第5回 地理と歴史の重要性 第6回 地理と歴史の重要性（続） 第7回 民族とは何か 第8回 言語と世界 第9回 宗教と世界 第10回 宗教と世界（続） 第11回 国家と世界 第12回 アメリカと世界 第13回 アメリカと世界（続） 第14回 日本と世界 第15回 筆記試験			
使用教科書 『なるほど知図帳 2011 世界』昭文社 『世界史年表・地図』吉川弘文館			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につければ、国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫	
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部	
授業の到達目標及びテーマ 数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つのか、数式を図形化するとこんな面白い図形になるのか、ということ、パソコンを利用しつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようになることを到達目標とする。				
授業概要 高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。				
学生に対する評価の方法 出席と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、図形の自由作成と期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。				
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系 第2回 関数関係（1）：1次関数、多次関数（線、面積、体積） 第3回 パソコンによる1次、2次関数の図形化 第4回 関数関係（2）：弧度法と三角関数 第5回 直角座標と極座標 円、楕円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標 第6回 三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる図形化 第7回 図形の自由作成 第8回 関数関係（3）指数関数、対数関数 第9回 パソコンによる指数関数、対数関数等の図形化 第10回 微分概念とパソコンによる近似計算。 第11回 積分概念とパソコンによる近似計算 第12回 関数関係（4）特殊な関数、パソコンによる図形化 減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リサージュ、バラ曲線等。 第13回 ベクトル：ベクトル概念を理解し、演習を行う 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ				 <p>半径の異なる円の等高面</p>
				 <p>三角関数と極座標を用いた花模様</p>
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 石原 繁 編 「大学数学の基礎」 裳華房				
自己学習の内容等アドバイス パソコンを使って数式・数学の新しい理解に活用するため、欠席はパソコンの新しい操作の仕方を学ぶ機会を逸するため極めて好ましくない。				

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 数学に関する興味・関心を持つことと数学的素養を養うことを目的とする。数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理生を理解し、日常生活に活かし、考えることの楽しさや数学的な美しさや良さを理解することを到達目標とする。また、初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置く。			
授業の概要 この講座では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気付くとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。また、「算数的活動」、「見通し」をもち、筋道を立てて考え、表現する能力の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・レポート（約20%）、試験の結果（60%）などで総合的に評価を行う。 特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・算数を学ぶことの意義・数学的背景) 第2回 数の表し方と記数法の歴史の概観（零の発見と位取り・記数法） 第3回 数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九） 第4回 数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除） 第5回 数と計算の意味とその活用（四則演算の性質・問題作成） 第6回 日常における数学的な事象の考察 第7回 数と計算領域のまとめ及びテスト 第8回 小学校における図形の指導目標と内容 第9回 「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円） 第10回 「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形） 第11回 「図形」：対称・合同な図形がつくる美しい模様(敷き詰め) 第12回 「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図） 第13回 「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐） 第14回 図形領域のまとめ及びテスト 第15回 小学校学習指導要領の目標及び授業のまとめ （数と形についての関係及びその算数的考察）			
使用教科書 必要に応じて、そのつどレジュメを配付する。(参考書 小学校学習指導要領解説 算数編 文部科学省 東洋館出版社)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。			
授業の概要 ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。 具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。			
学生に対する評価の方法 毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（40％） 講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。（20％） 講義内容の理解度の程度を評価するテストを第8回と第14回に行う。（40％）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 集合と数（ピタゴラスの実験、幼児の数の認識） 第2回 数の表し方と記数法の歴史（4大文明の記数法） 第3回 零の発見と位取り記数法 第4回 n進数（2進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法） 第5回 数の拡張と演算 その1 第6回 数の拡張と演算 その2 第7回 数の拡張と演算 その3 第8回 四則演算の意味（加法、減法、乗法、除法）・小テスト 第9回 数と計算の意味の活用（指数計算、複利計算、対数計算、方程式解法） 第10回 数と計算の意味の活用（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数） 第11回 図形の形と大きさ 第12回 小学校における図形の指導目標と内容 第13回 中学校における図形の指導目標と内容 第14回 三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト 第15回 日常の事象の数学的な手法での観察			
使用教科書 「入門 算数学」 日本評論社 黒木哲徳 著 ≪参考書≫：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書 文部科学省			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 本日の授業範囲を教科書で復習しておく。 関連する内容を図書・インターネット等で調べる。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者] 森 千鶴夫																								
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部																								
授業の到達目標及びテーマ 私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。 確率と統計の初歩的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。																											
授業概要 確率について身の回りの出来事を例にとりて説明し、次に確率の延長としての確率分布（2項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。																											
学生に対する評価の方法 出席状況と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。																											
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ 第2回 確率、2項分布 第3回 パソコンによる計算と表示 第4回 データ：データの収集、整理、平均値、広がり、標準偏差 第5回 パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示 第6回 ポアソン分布、正規分布、 第7回 偏差値 第8回 パソコンによるポアソン分布、正規分布に関する計算とグラフ表現 第9回 最小2乗法：回帰直線、近似曲線 第10回 共分散、相関、相関係数 第11回 パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現 第12回 推定と検定 第13回 生活と統計 物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ																											
		<table border="1"> <caption>Graph Data: Probability of receiving a certain number of envelopes</caption> <thead> <tr> <th>当りの枚数 (枚)</th> <th>確率 (割合)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>0</td><td>0.05</td></tr> <tr><td>1</td><td>0.15</td></tr> <tr><td>2</td><td>0.23</td></tr> <tr><td>3</td><td>0.22</td></tr> <tr><td>4</td><td>0.17</td></tr> <tr><td>5</td><td>0.10</td></tr> <tr><td>6</td><td>0.05</td></tr> <tr><td>7</td><td>0.02</td></tr> <tr><td>8</td><td>0.01</td></tr> <tr><td>9</td><td>0.005</td></tr> <tr><td>10</td><td>0.002</td></tr> </tbody> </table>	当りの枚数 (枚)	確率 (割合)	0	0.05	1	0.15	2	0.23	3	0.22	4	0.17	5	0.10	6	0.05	7	0.02	8	0.01	9	0.005	10	0.002	この図はお年玉つき年賀はがきが100枚ある場合に4等が1枚も当たらない確率は0.05（5%）であり、たとえば3枚当たる確率は0.23（23%）であることを意味する。この分布は2項分布と呼ばれる。このような計算をして図に示すことはEXCELを使えば簡単にできる。
当りの枚数 (枚)	確率 (割合)																										
0	0.05																										
1	0.15																										
2	0.23																										
3	0.22																										
4	0.17																										
5	0.10																										
6	0.05																										
7	0.02																										
8	0.01																										
9	0.005																										
10	0.002																										
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 室 淳子・石村貞夫著 「Excel でやさしく学ぶ統計解析」 東京図書																											
自己学習の内容等アドバイス 上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めて欲しい。そのためには、アンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。																											

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようなる。 ・多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。 ・統計学独特の専門用語を身につける。 			
授業の概要 <p>私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多くある。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析し、グラフ表現を行う手法を体得する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。(40%) 講義内容の理解を評価するテストを第8回と第14回に行う。(40%) 自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。(20%)</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等) <p>第1回 統計学の考え方の基礎・分析概念 第2回 確率と確率分布の特徴 第3回 母集団と標本・標本抽出 第4回 階級分けと資料の作成 第5回 標本分布の特性値 ・ 中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均) 第6回 標本分布の特性値 ・ 変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数) (テスト) 第7回 確率とは・確率を表す方法と記号 第8回 確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト 第9回 二項分布 (離散型確率分布) 第10回 ポアソン分布 (離散型確率分布) 第11回 一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布) 第12回 正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値 第13回 統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布 第14回 母平均μの推定平均・第3章と第4章のテスト (テスト) 第15回 t分布</p>			
使用教科書 <p>「はじめての統計学」 日本経済新聞社 鳥居泰彦 著</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
自然のしくみ		講義	井谷 雅治
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1・3年次前期	選択 (教職必修)	幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容、観察・実験を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解・技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説(理科編)、			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習 			

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解、技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、			
自己学習の内容等アドバイス <input type="radio"/> 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 <input type="radio"/> シラバスについての予習 <input type="radio"/> 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマ：「生命の科学」では、生体の基本構造である細胞を学ぶ。 到達目標：生体の基本知識の習得			
授業の概要 細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみを考える基盤を作っていきます。			
学生に対する評価の方法 筆記試験を行う。評価は以下の配分で行う。 出席点：全出席で10点 試験点：中間試験（40点）・期末試験（50点）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命科学とは 第2回 細胞：細胞の構成 第3回 細胞内小器官の機能 第4回 組織：上皮組織・結合組織・神経組織・筋組織 第5回 生体の構成：生命の物質的基盤 第6回 生命の設計図1 第7回 生命の設計図2 第8回 中間試験 第9回 生体内恒常性 第10回 代謝 第11回 エネルギー産生 第12回 情報伝達 第13回 食と健康 第14回 記憶 第15回 期末試験			
使用教科書 生命科学 羊土社 東京大学生命科学教科書編集委員会			
自己学習の内容等アドバイス 講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください			

[授業科目名] 人間と地球環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大矢 芳彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるためには何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。			
授業の概要 授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。			
学生に対する評価の方法 基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業計画は、第1回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。 第1回 ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など） 第2回 宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け） 第3回 星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識） 第4回 太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴） 第5回 地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る） 第6回 生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか） 第7回 生命の誕生（地球上で生命がいつに誕生したのかを探る） 第8回 生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る） 第9回 地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る） 第10回 東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握） 第11回 地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識） 第12回 エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察） 第13回 地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測） 第14回 生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較） 第15回 定期試験			
使用教科書 「はるかなる地球」 大矢芳彦著 荘人社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 科学の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松浦 俊輔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然科学や、それと密接に関係する技術が、現代の私たちの社会生活や精神活動にとってどんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。			
授業の概要 自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総合的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）は自然の統一的理解のためのアイデアや実験という面からの話題を取り上げます。			
学生に対する評価の方法 ①日常の出席状況と、毎回提出してもらった授業の感想 ②期末試験（基礎知識の確認と論述。論述はあらかじめ課題を出しておき、原稿を用意して試験に臨んでもらいます）を総合評価（①50%+②50%）しますが、出席点が6割に達していない場合は、再評価なしの不合格とします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。 第2回 科学を論じることのイメージをつかむための資料を見てもらいます。 第3回 A自然哲学の誕生 B自然哲学の誕生 第4回 A中世からルネサンスへ Bアリストテレス 第5回 A望遠鏡と顕微鏡 Bギリシアの先駆的成果 第6回 A光の速さ Bアルキメデス 第7回 A光の正体とニュートン Bギリシアからイスラムへ 第8回 A電磁波としての光 Bルネサンス 第9回 A光、時間、空間 B天体の動き 第10回 A光の二重性 Bコペルニクスの展開 第11回 A科学と芸術（色彩と空間） Bチコ・ブラーエとケプラー 第12回 A科学と芸術（抽象化への道） Bガリレオ 第13回 A予備 Bニュートンのりんご 第14回 Aまとめ B様々な統一とまとめ 第15回 試験 なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。			
使用教科書 教科書はとくに指定しません。授業時に資料を配付します。また、参考書については、授業時に提示します。			
自己学習の内容等アドバイス だんだん見えてくる(?)「科学的な扱い方」とはということかの理解をふまえて、自分の身のまわりにある素材について、科学的に考えてみることを繰り返してください。			

[授業科目名] 美術の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。			
授業の概要 主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介してゆく			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 フィクションとしての絵画 第3回 凶像とは何か 第4回 絵の中の空間 第5回 絵の中の空間 第6回 絵の中の言葉 第7回 模倣と見立て 第8回 怪物の造形 第9回 変身のイメージ 第10回 腐乱死体の美術 第11回 絵画における描かないことと見えないこと 第12回 異界へのまなざし 第13回 試験 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄木 千寿子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 西洋芸術音楽を聴く為にコンサート会場へと足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋芸術音楽はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在でもある。この授業では、こうした西洋芸術音楽の流れを歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（14%）、小テスト（26%）、最終筆記試験（60%）で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（西洋芸術音楽とは何か、講義内容の概要、参考書の紹介など） 第2回 中世音楽（グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派） 第3回 中世～ルネサンス（アルス・ノヴァ、フランドル楽派） 第4回 ルネサンス（16世紀、ジョスカン・デ・プレ他） 第5回 バロック①（マドリガーレ、オペラの誕生） 第6回 バロック②（協奏曲、バッハ、ヘンデル他） 第7回 ウィーン古典派①（前古典派、古典派の作曲技法） 第8回 ウィーン古典派②（ソナタ形式、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン） 第9回 ロマン派①（ロマン派の作曲技法、ショパン、シューマン他） 第10回 ロマン派②（ロマン派オペラ、ワーグナー、ブラームス他） 第11回 ロマン派③（民族主義の音楽） 第12回 世紀転換期から第1次世界大戦へ 第13回 20世紀①（ストラヴィンスキー、シェーンベルク他） 第14回 20世紀②（1945年以降） 第15回 最終筆記試験			
使用教科書 岡田暁生著『西洋音楽史』中公新書1816（中央公論新社）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習することが望ましい。授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。 ・「西洋音楽とは何か」「邦楽とは何か」を理解、探求する。 ・教養としての「音楽」を習得する。 			
授業の概要 「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。			
学生に対する評価の方法 「授業ごとの参加度」(30%)－毎回のコメントにて確認、「期末レポート」(70%)－講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 「音楽」とは何か?－オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽 第2回 日本の音楽(1)－邦楽は西洋音楽だった(奈良時代、音楽の伝来、邦楽) 第3回 日本の音楽(2)－舶来品の西洋音楽(明治時代、西洋音楽と邦楽) 第4回 テキストと音楽(1)－歌い方には4通りもある(テキストと音楽との関係、西洋詩学) 第5回 テキストと音楽(2)－和風ラップに至る道(日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽) 第6回 宗教と音楽－感動『戦場のピアニスト』に隠された秘密(宗教、民族と音楽) 第7回 ポピュラー音楽－Mozartの時代にもポピュラー音楽はあった(大衆芸能と芸術の差異) 第8回 日本音楽の受容－エッフェル塔と三味線(パリ万博、異国趣味、印象派の音楽) 第9回 音律－ドレミは対数?(音響学基礎、音律、世界の音階) 第10回 『第9』とは－なぜ『第9』は年末恒例?(戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退) 第11回 著作権－自分の曲でも使用料払うの!?(音楽における国内、海外の著作権法の概説) 第12回 オペラ－愛の結末は・・・(古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇) 第13回 電子音楽－電子立国ニッポンはすごい!(発振の原理、発展史、日本の技術とアーティスト) 第14回 民族音楽－音楽は世界非共通(民族音楽とその関連、民族音楽からの享受) 第15回 現代の音楽－音楽、なう!(20世紀後半からの現代音楽、音楽と社会)			
使用教科書 指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目についても幅広く調べること。			

[授業科目名] 文芸の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 短編小説の魅力 小説とは何か。短編小説の方法とその魅力について知る。 小説の方程式を知れば誰でも1編の小説は書けることを知る。 ☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習Ⅰ（短編小説を書く）」を受講してください。			
授業の概要 文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・随筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いてもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられることを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業と取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法） 第2回 文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて） 第3回 志賀直哉の「山鳩」と小説の三要素について 第4回 小説の三要素と有史以来の作品について 例えば「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」など 第5回 小説の構造1 例えば志賀直哉「出来事」 第6回 小説の構造2 例えば芥川龍之介「蜜柑」 第7回 小説のジャンルについて1 例えば川端康成「合掌」 第8回 小説のジャンルについて2 例えば内田百閒「風の神」・「山東京伝」 第9回 小説のジャンルについて3 例えばヘミングウェイ「老人と海」 第10回 模倣ということ 例えばレイモンド・チャンドラーと村上春樹など 第11回 模倣からオリジナルへ1 例えば芥川龍之介『今昔』から「鼻」へ 第12回 模倣からオリジナルへ2 例えば芥川龍之介『今昔』から「運」へ 第13回 人称（視点）の問題について 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ なお、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかになっていく。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習・事前に配布する短編小説を分析しながら読んでくる。復習・本時にあつかった作品の鑑賞文を書く。			

[授業科目名] 演劇の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田尻 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ テーマ「浄瑠璃の成立と展開」 「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、演劇を通して日本の古典芸能や日本文化について学ぶことを目標とする。			
授業の概要 浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』（平曲）にまで遡る。本講義では、浄瑠璃の歴史的展開をたどりながら、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。			
学生に対する評価の方法 学期末試験の成績や作品鑑賞時のレポートによって評価する。 授業への出席状況も反映されますので、欠席や遅刻には十分注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・芸能の起源 第2回 時代の特色——中世—— 第3回 『平家物語』と「語り」の成立 第4回 平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行 第5回 浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立 第6回 時代の特色——近世—— 第7回 古浄瑠璃時代 第8回 近松門左衛門と世話物——『曾根崎心中』と『冥途の飛脚』—— 第9回 作品鑑賞① 第10回 合作時代における時代物 第11回 時代物三大名作② 第12回 作品鑑賞 第13回 時代物三大名作③ 第14回 定期試験 第15回 作品鑑賞			
使用教科書 必要に応じて資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 作品鑑賞に際しては、鑑賞のための資料をあらかじめ配付するので、事前に梗概や特色などについて予習しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ I 自然に興味を持たせ、自然に上達させること II 各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく III バドミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること			
授業の概要 スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要な不可欠なものである。本授業では、バドミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果 (60%)、受講態度 (40%) など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 実習 初歩的技能の習得 1. バドミントンの歴史 2. シャトルあそび 3. グリップ 2回 実習 初歩的技能の習得 ○運動特性、技術、用具などに関する知識の習得 1. ハイサービス 2. ストローク 3. 簡易ゲーム 3回 実習 初歩的技能の習得 ○各種グリップの理解 1. ショット ・ドライブ ・スマッシュ ・ヘヤピン ・ドロップ ・クリヤー ・ロブ 2. 簡易ゲーム (ハーフコートダブルスゲーム) の実践 4回 実習 初歩的技能の習得 ○ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得 1. いろいろなサービス ・ショートサービス ・ドライブサービス ・クリックサービス 2. 簡易ゲーム (オールコート3対3のゲーム) の実践 5回 実習 基本的技能の習得 1. 高度なストローク 2. フットワーク 3. 基本フラインの組み合わせ練習 6回 実習 基本的技能の習得 ○ダブルスゲームの進め方の理解 1. ダブルスゲーム ・ダブルスのルール ・フォーメーション ・審判法 ・ゲームの実践 7回 講義 VTR (全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部) を見る 1. トップアンドバック、サイドバイサイド 2. 入れ替わり (攻守) のタイミング 3. VTRを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する 8回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○サービス中のフォルトの理解 9回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○ラリー中のフォルトの理解 10回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○セッティングの理解 11回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅰ 12回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅱ 13回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅲ 14回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅳ 15回 個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する ☆課題とは毎時間実施する 20 分間の有酸素運動 (ウォーキング、ジョギング、ランニング) のこと			
使用教科書 (参考図書) 大体連研修部作成教材 バドミントン (平成 20 年度作成 DVD 教材シリーズ)			
自己学習の内容等アドバイス バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1～4年次前・後期	選択	メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ I テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。 II 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。 III テニスを通してスポーツマンシップを涵養する。			
授業の概要 最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段をテニスを実践的に学習する中で獲得する。 テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるので生涯スポーツに適している。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果(60%)、受講態度(40%)など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 1. ガイダンス 大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。 2. スポーツのスキル 第2回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ラケットワーク 2. グランドストローク 第3回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ボレー 2. サービス 第4回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. スマッシュ 第5回 講義 テニスの技術論 1. 技術構造及び基本技術について解説する。 2. 一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。 3. 打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。 第6回 実習 テニスの基礎 II 総合練習 第7回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの基本戦術 1. フォーメーション 2. 連続プレイの組み立て 3. コンビネーションの理解と実践 第8回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの応用戦術 1. フォーメーション 2. コンビネーション 3. コンビネーションの実践 第9回 実習 ルールとマナー 1. 試合の進行 2. 審判法 3. ルール 4. マナー 第10回 実習 テニスの基礎 II 基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用 第11回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦1 第12回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦2 第13回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦3 第14回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦1 第15回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦2 ◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたはサブアリーナで実施する。			
使用教科書 (参考図書) VTR 神和住 純 監修 「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」 ポニーキャニオン VTR BBC 制作 「テニス教室決定版」 ポニーキャニオン			
自己学習の内容等アドバイス テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康 I (実習 I)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 笹川 慶
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学科 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ フライングディスク フライングディスク(frisbee)を用いた競技は近年注目されており、性別・年齢に関わらず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しめるニュースポーツである。このようなフライングディスクの特性を理解しながら、身体を動かす喜びやゲームの楽しさや、異なる個性との関わりを通じて、互いに学び合い、助け合い、励ましあい、チームとしての強調性などを習得し、生涯を通してスポーツに親しむ習慣を養う。そこで、本講義ではチームスポーツを中心としたフライングディスク競技を可能な限り紹介、実践することを目的とする。			
授業の概要 心身の健康は万人共通の願いであり、健康の上こそ大なる個性の発展が期待できる。しかし、近年における機械文明の急速な発展に伴って心理的なストレスや運動不足が増すと共に、豊饒な食生活とも相俟って健康を損ねる機会が多発している。そこで本講義では、実際にスポーツ活動を行うことによって、心身の健康を維持増進させる方法のひとつである生涯スポーツへ自ら積極的に親しむ姿勢を養うことを目標とする。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する ・出席が3分の2に満たないものは単位習得なしとする。 			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 基本的技能Ⅰ (グリップ、スローイング、キャッチング) 第3回 基本的技能Ⅱ (バックハンドスロー、サイドアームスロー、ハンマー、など) 第4回 ドッチビー 第5回 他競技スポーツ 第6回 アルティメットについて (講義、班編制およびルール)スポーツ 第7回 ポートアルティメットⅠ 第8回 ポートアルティメットⅡ 第9回 基本練習とミニゲーム 第10回 他競技スポーツ 第11回 アルティメットの練習法 (基本動作とフォーメーション、ルール) 第12回 リーグ戦Ⅰ 第13回 リーグ戦Ⅱ 第14回 リーグ戦Ⅲ 第15回 トーナメント (リーグ戦Ⅲの結果をもとに)			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 反復練習あるのみ。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 1) 卓球、バレーボール、バドミントン及び身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要 本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受する。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物 (50%)、授業態度 (35%)、学習成果及びレポート (15%) を総合的に判断して評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明 第 2 回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。) 第 3 回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践 第 4 回 卓球③ ゲーム内容の発展 第 5 回 スポーツの理論と実践法 バレーボール① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 6 回 バレーボール② 応用技能の習得とゲームの実践 第 7 回 バレーボール③ ゲーム内容の発展 第 8 回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバドミンントンの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 9 回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践 第 10 回 バドミントン③ ゲーム内容の発展 第 11 回 健康的な身体育成法の実践 第 12 回 表現的な身体育成法の実践 第 13 回 リズミカルな身体育成法の実践 第 14 回 歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。 第 15 回 総括 <注意事項> 第 1 回の授業は、NIAS ホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第 2 回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ (室内用) を着用すること。			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 卓球、バレーボール、バドミンントンのルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 高橋 篤史
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 口論義運動公園のプールを利用
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。 ・水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。 			
授業概要 <p>生命の源“水”。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといっても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。</p> <p>授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>出席状況（60%）、授業態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。</p> <p>実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。</p> <p>本授業では再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義 第2回 水中ウォーキング、正しい姿勢の習得、クロール（キック・プル） 第3回 水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック） 第4回 クロール、背泳、平泳（キック） 第5回 クロール、背泳、平泳 第6回 クロール、バタフライ 第7回 4泳法のテスト、アクアエクササイズ ※ 第1回は教室での授業とし、第2回よりプールへ移動する。 ※ 第2回からは口論義運動公園まで、往復徒歩で移動する。（片道徒歩約30分・雨天時） ※ 授業は二時間続きで行い、移動の時間もウォーキング運動ととらえる。 ※ 移動時のウォーキングには適した服装（ジャージ、夏場はハーフパンツ等）と運動靴を用意すること。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス <p>実習期間中は春から夏にかけているため気温の変化が大きいことが考えられる。日頃から体調管理を行い、実習に取り組むことを心がけてほしい。</p> <p>実習の回数は限られていることから、実習以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。</p>			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 全学部対象、現地実習（3泊4日）

授業の到達目標及びテーマ

冬季スポーツ種目として、スノーボードを実施する。
授業の目的は、冬の自然環境の中に身を置き、各種目と自然との対話を通して、人類のみが有する運動文化としての価値を認識する。また、自然環境と人間との関わり方（自然との交流）、スノーフィールドを仲間と一緒に楽しむ基本的な技術やマナーを体験を通して学ぶ。

授業の概要

授業は、学内授業および、現地授業（実習）より構成する。学内授業はスノーフィールドでの現地実習がより円滑に効率よく進められるようにするために行う。現地実習は、各自の技能段階に応じ、初心、初級の班別に細分して実施する。日程は、午前および午後にスキー場またはスノーフィールドにて実習を行い、夕食後は、講義、全体会等を通して一層の理解を深める。

学生に対する評価の方法

技術能力（30%）、受講態度（50%）、レポート等（20%）を参考に総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

- 1回 [学内授業]
1. 歴史、魅力と概念
2. 基礎技術のVTRを教材に運動メカニズム等基礎知識の説明
- 2回 [学内授業]
1. 現地授業における生活上の諸注意を行う
2. 安全指導
3. 基礎体力トレーニングプログラムの実施について
- 3回～15回 [現地授業]
スケジュール

1日目	2日目	3日目	4日目
8:15 大学発 8:30 上社発	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 8:30 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習 <バジジテスト> 閉講式
昼食 12:00 研修所着 12:30 集合・移動 13:00 開講式 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:00 集合・移動 14:00 研修所出発
16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「滑走理論」 (20:30迄)	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「安全なスノーボード を楽しむために」 (20:30迄)	
22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	

使用教科書

教科書は使用しないが、資料を作成し配布する
(参考図書) 日本スノーボード協会著作・編集 「J S B Aスノーボード教程」 山と溪谷社

自己学習の内容等アドバイス

とにかく基礎体力を実習前に養っておくこと。

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考えてみる。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。			
授業の概要 本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。			
学生に対する評価の方法 期末試験（50%）、課題の提出（10%）、受講態度（40%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 I－1. 身体は細胞のすみか、そして主は私 1) 自分を見る目をつくる 2回 2) 身体運動の意味 3回 3) 地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる 4回 2. 宇宙空間における生体変化 5回 3. 運動しているとき、身体の中で何がおこっているのかー ヒトは動くようにできているー 6回 II－1. 生涯発達と健康 1) 発達と健康科学 7回 2) 身体能力の年齢的变化(ライフステージ)に応じた健康スポーツ 8回 III－歩行の生涯健康 1. DNAの持つはるかな記憶 2. ヒトがサルと別れた日 9回 3. 歩行の定義 10回 4. 歩行の運動学的意義 1) 歩く(ウォーキング)速さと歩幅 2) 歩く速さとエネルギー消費量 11回 3) 歩行ー健康に良い有酸素性運動ー 12回 4) 歩行と健康 5) 歩行と脳 13回 IV－運動とからだの健康 1. 運動不足と健康障害 2. 肥満の予防・解消ー基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング 14回 3. 健康的に痩せるとはどういうことか V－運動の功罪 15回 期末試験			
使用教科書 生涯発達の健康科学 藤井勝紀共著（杏林書院）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康科学		講義	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	選択	ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 1) 健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。 2) 生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。			
授業の概要 本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（30%）、レポート（20%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、参考図書の紹介、授業日程の説明 第2回 スポーツ・運動の意義と健康との関わり 第3回 生活習慣病予防のための運動の理論と実践法 第4回 定期的な運動実践の効果及び運動例 体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性 第5回 歩数による日常生活の運動量の把握 生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検 第6回 健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した運動プログラムについて 生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。 第7回 運動施設の整備・拡充について 第8回 運動クラブの育成・援助について 第9回 運動プログラム・行事の設定・提供について 第10回 運動生活の類型、構造及び運動者行動 第11回 運動と体力及びトレーニングの原則について 第12回 運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法 第13回 健康のための生涯スポーツの理論と実践法 第14回 課題のまとめ 第15回 総括			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。 参考図書（購入は自由）：「健康とスポーツ概論 ― 運動と健康の理論 ―」 芝山正治他著 圭文社			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語について復習しておくこと。			

[授業科目名] 英語コミュニケーション I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・スコット・シキ ポージン・ポーター・モヤ ポッティンジャー・マクドナルド
[単位数] 1	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語ネイティブスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。			
授業の概要 自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況 30%、授業参加貢献度 30%、最終オーラルテスト 40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の 3分の1 以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 01 回 Introducing Self and Others. (自己や周りの人の紹介) 第 02 回 Talking about Daily Routine. (日常生活について語る) 第 03 回 Asking to do Something. (してもらいたいことをお願いする) 第 04 回 Talking about Likes / Dislikes. (好き・嫌いについて語る) 第 05 回 Talking about Experiences. (自分の経験談を語る) 第 06 回 Exchanging Personal Information. (個人のアピールを試みる) 第 07 回 Talking about Frequency of Activities. (クラブやサークルについて語る) 第 08 回 Talking about Past Schedule. (今までのスケジュールを紹介する) 第 09 回 Describing Locations of Places. (場所の具体的な位置を述べる) 第 10 回 Talking numbers: Time, schedule, and prices. (数表現についての練習：時間、計画、値段など) 第 11 回 Checking / Confirming Information. (情報の精査と確認) 第 12 回 Positive / Negative Tag Questions. (肯定形・否定形の付加疑問文の練習) 第 13 回 Talking about Future Plans. (先々の計画について語る) 第 14 回 Review Activities / Prep for final oral Test. (総復習・最終オーラルテストの準備) 第 15 回 Final oral Test in small groups. (小グループごとの最終オーラルテストを実施)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤・ファルク・スコット・シキ ボージン・ポーター・モヤ マクドナルド・ポッティンジャー
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語コミュニケーションⅠに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるようよう訓練する。			
授業の概要 徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションⅠと同様、小人数クラスで行う。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation. (質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。) 第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions. (意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。) 第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation. (意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。) 第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting. (指示を与える。助けを求める。感想を述べる。) 第05回 Inquiring and giving information about times and prices. (時間と値段について尋ねたり情報を与えたりする。) 第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment. (注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。) 第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends. (助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。) 第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation. (休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。) 第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities. (新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。) 第10回 Responding to happy/unhappy news. (幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。) 第11回 Asking people to do things formally and informally. (人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。) 第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement. (薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。) 第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad. (海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語) 第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks. (感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。) 第15回 Final Oral test in small groups. (小グループでの最終会話テスト)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] S.ポージン
[単位数] 1	[開講期] 2年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ※ヒューマンケア学部 08 生のみ 開講期：4年次前期／単位：2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ <u>This class has 3 goals</u> 1. Learn vocabulary 2. Practice speaking 3. Use English in a game or activity</p>			
<p>授業の概要 Most of the lessons will begin by a short free talk between the teacher and the course participants individually or a game between the teacher and the whole class. Below is a tentative study plan for 15 lessons comprising communication skills and areas. However, there will be some changes in the order and the contents according to the member' interests, learning needs, and spoken abilities.</p>			
<p>学生に対する評価の方法 Grading is based on the following 1. being active in class 50 2. group activities 30 3. speaking/interview test 20 Total 100</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introduction to this class. 第02回 Speaking about yourself. 第03回 Speaking about daily life 第04回 Describing people 第05回 Group Activity Preparation 第06回 Group Activity 第07回 Speaking about past activities 第08回 Speaking about plans 第09回 Giving instructions 第10回 Group Activity Preparation 第11回 Group Activity 第12回 Inviting, accepting and rejecting invitations 第13回 Review for test 第14回 Vocabulary/interview test 第15回 Last class. Speaking about your future</p>			
<p>使用教科書 No textbook is required for this class. The teacher will provide all materials for this class..</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス Students are recommended to review contents they have studied in the Eigo Communication I and II, and / or listen to English conversation programs available on radio, TV and the Internet before taking the Eigo Communication III course.</p>			

[授業科目名] 総合英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。			
授業の概要 語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。 第2回 演習 英文和訳① 英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 英文和訳② 第2回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 英文和訳③ 第3回で行った和訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 英文和訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 英文和訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。 第8回 演習 英文和訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第9回 演習 英文和訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第10回 演習 英文和訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第11回 演習 英文和訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第12回 演習 英文和訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの英文和訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題訳提出 担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語 I (前期) では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。			

[授業科目名] 総合英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 総合英語Ⅰで習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。			
授業の概要 本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身近な話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する 第2回 演習 和文英訳① 和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 和文英訳② 第2回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 和文英訳③ 第3回で行った英訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 和文英訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 和文英訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。 第8回 演習 和文英訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第9回 演習 和文英訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第10回 演習 和文英訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第11回 演習 和文英訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第12回 演習 和文英訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの和訳英訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題形式英作文提出 担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語Ⅱ(後期)では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現してみる。(初段階では翻訳ソフトを使ってもらわない。但し、翻訳ソフトの訳は間違いが多々あるので、のち修正する必要がある。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。英会話で雑談する教材も用意。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 専門科目からの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 専門科目からの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。			
上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部 ※08生のみ：4年次前期
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 ネットからの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 ネットからの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 英語検定2級に合格するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 異国語としての英語学習を通して、自国語と比較しながら、英語国の文化・歴史・習慣などを学びたい。英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点に置きながら、家族的雰囲気の中で、みんなと一緒に楽しく、英語に慣れるような授業をめざす。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を利用して基礎力養成。 第2回 英検2級問題の出題形式を解説。 第3回 文法問題を中心に解く。 第4回 同上 第5回 比較的短い英文を解釈する。 第6回 同上 第7回 Eメールの英文を解説する。 第8回 同上 復習の単語小テスト 第9回 やや長い英文を速読して、大意を把握する訓練。 第10回 同上 第11回 リスニングテストの実施。 第12回 長文英語の内容理解の方法を説明する。 第13回 同上 第14回 定期試験 第15回 二次面接試験の解説と実施。 上記の授業計画は、学生の反応・関心と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変更したりすることもあります。			
使用教科書 「7日間完成英検2級予想問題ドリル（旺文社）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検2級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要は全くない。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という準備の有無が合格への大きな決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、「合格のための自分の指針を知る事」が授業のテーマになる。			
授業の概要 15回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検2級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験（英語面接）の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間がある。 時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料（映画、TVドラマ、インターネット）を提供する予定。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業はComputer LABにて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会にもなる。授業への要望などは、積極的に受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検2級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み（30%）、課題提出（30%）、および確認テスト（3回）での得点（40%）を考慮して評価する。なお、課題については、問題を解答し、電子メールにて答案内容を提出すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回目は、授業内容の説明および自分の長所短所を知るための模擬試験の場である。 第2回～第6回までは、英検2級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・（読解練習）」の問題演習と攻略を行う。第7回～第11回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第13回と第14回では、2次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。 第1回 授業および英検2級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。 第2回 語い問題 (part1) 第3回 語い問題 (part2) 第4回 語法問題 (part1) 第5回 語法問題 (part2) 第6回 語順整序 (part1) + 復習 第7回 第1回確認テスト 第8回 リスニング演習 (part1) 第9回 リスニング演習 (part2) 第10回 リスニング演習 (part3) 第11回 リスニング演習 (復習) 第12回 第2回確認テスト 第13回 2次試験対策 (英語面接) (part1) 第14回 2次試験対策 (英語面接) (part2) 第15回 第3回確認テストおよび総括第1回			
使用教科書 英検2級 頻出度別問題集 (CD付き) (高橋書店)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ TOEICテストで、目的に応じた高得点を獲得するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 出題形式を分かりやすく解説する。過去の問題を参考にして、問題形式に慣れるように、練習を繰り返す。英語学習を通して、英語国の文化・歴史・習慣なども、詳しく面白く説明していく。もちろん、英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点において、授業を進める。家族的雰囲気の中で、みんなで楽しく、英語に触れて、親しめる工夫をしたい。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を参考に、出題形式を解説。 第2回 写真描写問題を解説。 第3回 応答問題を解説。 第4回 会話問題を解説。 第5回 説明文問題を解説。 第6回 短文穴埋め問題を解説。 第7回 長文穴埋め問題を解説。 第8回 読解問題を解説。 第9回 復習単語小テスト。 第10回 弱点の補強。 第11回 同上 第12回 応用問題。 第13回 定期試験の傾向と対策 第14回 定期試験 第15回 全体的総復習&まとめ 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 「TOEICテスト対策実況中継（コスモピア）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC 試験の対策を目的としている。目標を履歴書に書ける点数である“500 点”達成と定めるが、内容は決して容易な問題ばかりではない。当然ながら教員は授業に投入するが、履修生の頑張りをも期待する。TOEIC という試験の「Listening」、および「Reading」の 2 セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。			
授業の概要 <u>TOEIC の問題形式はかなり固定されているが、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。</u> ただ、そのためには、普段の取り組みの中でポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく取り入れて進む予定であるが、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。また、授業への受講生からの要望などを取り入れていく予定である。積極的に要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを各々に備えた教室での授業となる。			
学生に対する評価の方法 出席 (20%)、授業態度 (20%)、課題 (20%) に加え、2 回の確認テストでの得点(40%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。 ①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類) (1) 写真問題(10 問) (2) 質問と返答の問題(30 問) (3) 会話文問題(30 問) (4) モノログ(一人語り)の問題(30 問) ②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類) (1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3) 短文読解問題(48 問) 使用するテキストは上記の 7 つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。 (〔 〕の中は発音と構文のテーマ) 第 1 回 授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。 第 2 回 テキスト Lesson1 (旅行) [接尾辞による品詞の見極め] 第 3 回 テキスト Lesson2 (日常生活) [注意すべき主語と動詞の一致] 第 4 回 テキスト Lesson3 (健康) [動詞の後の動名詞・不定詞の選択] 第 5 回 テキスト Lesson4 (外食) [分詞の叙述用法と限定用法] 第 6 回 テキスト Lesson5 (出来事) [関係詞の制限用法と非制限用法] 第 7 回 第 1 回確認テスト 第 8 回 テキスト Lesson6 (遊び) [注意すべき受動態] 第 9 回 テキスト Lesson7 (メディア) [同形の単語の品詞の見極め] 第 10 回 テキスト Lesson8 (オフィス) [3 つの完了形の違い] 第 11 回 テキスト Lesson9 (人材) [比較を使った慣用表現] 第 12 回 テキスト Lesson10 (金融) [置詞・接続詞いずれにも使える語] 第 13 回 テキスト Lesson 11 (昇進) [従属節における主語の省略] 第 14 回 テキスト Lesson12 (購買) [代名詞の特殊な用法] 第 15 回 全体総括と今後の指針の指示。第 2 回確認テスト ※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。			
使用教科書 THE NEXT STAGE TO THE TOEIC TEST Pre-intermediate 金星堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M.ファルク
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ファッション造形学科
授業の到達目標及びテーマ 今日広く社会で評価されている英語力試験である TOEIC 450-500 点以上達成を目標とし、文法、リスニング、リーディングを中心とする試験対策と問題練習のための演習である。目的達成のための (Task-based) リスニング、英文法および語法に関する CR (Conscious Raising)、英文による情報の要点理解等具体的な実践を通し、試験対策を合理的かつ実効性のあるものにする。			
授業の概要 Most of the TOEIC study areas below are taught through quizzes, and simulation activities. At the beginning, the students will take an original and complete TOEIC test with no preparation. Later, they learn and practice the required TOEIC test taking /learning skills in pairs, groups and with the whole-class; and then take the original complete TOEIC test again. During the study, the students will work with the teacher individually to get confidence in understanding the TOEIC strategies according to their own abilities. . Below is a tentative study plan for 15 lessons. However, there will be some changes in the order and the contents according to the students' interests, and learning needs.			
学生に対する評価の方法 学期中のテストは実施しません。成績評価は、平常の課題作成 (50%)、授業内における授業に関する討論への参加度 (50%) で決まる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業目的と実践テスト1ー宿題。 第2回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合い。 第3回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合いおよび実践テスト2ー宿題。 第4回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第5回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第6回 聴解テスト パート3：簡単な英会話、実践テスト2についての話し合いおよび実践テスト3ー宿題。 第7回 聴解テスト パート3：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第8回 聴解テスト パート4：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第9回 聴解テスト パート4：簡単な英会話、実践テスト3についての話し合いおよび実践テスト4ー宿題。 第10回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第11回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第12回 読解テスト パート6：読解、モデルテスト4についての話し合いおよび実践テスト5ー宿題。 第13回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第14回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第15回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。			
使用教科書 教科書: Anne Tayer. <i>Target TOEIC</i> (2 nd Edition). Compass Publishing.2006. (about 3,000 yen) TOEIC 情報: http://myhome.shinbiro.com/~jinkag/toEIC.htm			
自己学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てほしい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 実践英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目標としている。将来、英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生に向けて、学術的な英語力をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)			
授業の概要 現在の TOEFL は、Listening、Reading、Writing、Speaking の 4 セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内の TOEFL では、Listening、Grammar、Reading の 3 セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短時間で結果が出やすい Listening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料 (映画、音楽、インターネットなど) を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。大学での外国留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み (30%)、課題提出 (30%)、および模擬テスト 2 回 (40%) での得点を考慮して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <ul style="list-style-type: none"> ・ TOEFL への準備段階として、第 2 回～第 7 回までは一文ずつに区切った形で TOEFL の英文に取り組み、さらに学術的な語いに触れていくための内容を行う。 ・ スコアアップへの実践力を高めるため、第 9 回からは TOEFL の実際の問題に似た形の英文を対象にしつつ授業内容を進めていく。 ・ 時間が許す限り、毎回の授業で Grammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。 第 1 回 講義に関する Introduction、および TOEFL についての説明。受講生の TOEFL へのニーズ調査。受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない) 第 2 回 問題演習: Listening (4～5 語のディクテーション / 5～6 語のディクテーション) + α ① 第 3 回 問題演習: Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(not の短縮形)) + α ② 第 4 回 問題演習: Listening (ディクテーション l と r / 発音とスペル) + α ③ 第 5 回 問題演習: Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④ 第 6 回 問題演習: Listening (慣用表現 / 7～8 語のディクテーション) + α ⑤ 第 7 回 問題演習: Listening (第 2 回から第 7 回までの復習) + α ⑥ 第 8 回 第 1 回模擬試験実施 (授業内) および既習事項確認 第 9 回 問題演習: Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar & Speaking 第 10 回 問題演習: Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar & Speaking 第 11 回 問題演習: Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar & Speaking 第 12 回 問題演習: Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar & Writing 第 13 回 問題演習: Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar & Writing 第 14 回 問題演習: Listening (第 9 回から第 13 回までの復習) + Grammar & Writing 第 15 回 第 2 回模擬試験実施 (授業内) および総括			
使用教科書 TOEFL テストリスニング問題 350 喜田慶文 著 (旺文社)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] フランス語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の5級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせ60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業について説明、第0課（アルファベと基本表現） 第2回 第0課の復習、第1課（国籍を言う） 第3回 第0課のテスト、第1課復習、第2課（名前・職業を言う） 第4回 第1課のテスト、第2課復習、フランス語の発音と綴りの読み方 第5回 第2課のテスト、第3課（もちものをたずねる） 第6回 第3課復習、第4課（趣味を語る） 第7回 第3課のテスト、第4課復習、第1～第4課復習の練習問題 第8回 第4課のテスト、第5課（誰か尋ねる） 第9回 第5課復習、第6課（したいことを尋ねる） 第10回 第5課テスト、第6課復習、第7課（住んでいるところを言う） 第11回 第6課テスト、第7課復習、第8課（何をしているか尋ねる） 第12回 第7課テスト、第8課復習、第5～第8課の練習問題 第13回 第8課テスト、第9課（家族を語る） 第14回 第9課復習、第10課（年齢を言う） 第15回 第9課テスト、第10課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 復習してテストに備えること			

[授業科目名] フランス語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ フランス語Ⅰに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。 また、フランスの文化についての理解も深める。 フランス語検定試験の4級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。はじめの数回はフランス語のⅠで学習した内容を復習し、その後は各課の「会話」を通じて、重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを合計して60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせて60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フランス語Ⅰで学んだ内容の復習（第0課～第3課） 第2回 同上（第4課～第6課） 第3回 同上（第7課～第9課） 第4回 第10課（年齢を言う） 第5回 第10課復習、第11課（時刻を言う） 第6回 第10課テスト、第11課復習、第9～第11課の練習問題 第7回 第11課テスト、第12課（紹介する） 第8回 第12課復習、第13課（日課を説明する） 第9回 第12課テスト、第13課復習、第14課（量を表す） 第10回 第13課テスト、第14課復習、第15課（天候を言う） 第11回 第14課テスト、第15課復習、第12～第15課の練習問題 第12回 第15課テスト、第16課（比較する） 第13回 第16課復習、第17課（過去のことを語る） 第14回 第16課テスト、第17課復習、第18課（未来のことを語る） 第15回 第17課テスト、第18課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 必ず復習し、テストのために準備して下さい。			

[授業科目名] 中国語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初歩的な会話を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかりと教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第1課 中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。 第3回 第2課 母音・子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。 第4回 第3課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文の学習。 第5回 第3課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第4課 「これは誰のですか?」。指示代名詞、疑問詞、副詞と疑問文の学習。 第7回 第4課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第5課 「あなたはどこに行きますか?」。動詞の学習。 第9回 第5課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第6課 中国語と中国事情 第11回 第7課 「これはどうですか?」。形容詞の学習。 第12回 第7課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プレントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 中国語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。			
授業の概要 この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」についてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わったごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第8課 「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。 第3回 第9課 「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。 第4回 第10課 「あなたは食事をしましたか?」。過去形、完了文を学習する。 第5回 第10課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第11課 「彼はいつ用事がありますか?」。時間の表現を学習する。 第7回 第11課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第12課 「あなたの家は遠いです遠くないか?」。介詞、反復疑問文を学習する。 第9回 第12課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第13課 中国語と中国事情 第11回 第14課 「あなたは何時から始まりますか」。助動詞を学習する。 第12回 第14課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ） 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンに「接続語」はいらない。 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 互
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説と作文 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンと作文 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 総合講座 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高齢化および少子化という日本社会の現状に関して偏らない理解を持ち、将来の生活を考えるための視点を持てるようにすることを授業の目標とする。			
授業の概要 少子化・高齢化が急速に進行する社会の状況を正確に認識することは大切である。そして、それとともに、老年期は「余生」ではなく、「人生の収穫の時期であり、生の味わいを真に見つめる時期である」と捉えることも同様に大切である。そのためには何が必要か。自らの生をどのように生き、他者の生をどのように支援することができるか。以上のような問題を多面的に検討する。			
学生に対する評価の方法 総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 科目の位置づけや問題のありかについて解説をする。 併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法についても説明する。 《医学の立場から》 第2回 高齢化社会の姿 長寿世界一となった日本は、諸外国の模倣ではなく自らの手で未来長寿社会を築く責務を担うに至った。その高齢化社会の本質とは何か解説する。 第3回 介護保険 平成12年に導入した介護保険について、その特徴、導入の経緯、導入後5年の現状や見直しについて解説する。 第4回 高齢社会の健康科学 遺伝的因子より環境的因子が人間の寿命に影響を与えると認識され始めている。長寿と生活習慣との関係について解説する。 第5回 ターミナルケア 高齢社会を迎え「ターミナルケア」の必要性が高まってきている。「ターミナルケア」の役割、その重要性について解説する。 第6回 高齢社会の生と死 成熟した高齢社会では死の問題は避けて通れない。高齢者の死生観、生き甲斐、生きる幸せ、終末期のあり方について高齢者の立場から考えてみる。			

《社会科学の立場から》

第7回 高齢社会と経済成長

高齢者の増加は日本経済にとって経済成長を鈍化させるのか、あるいは、労働生産性や労働力はどうなっていくのかなど、経済的視点から高齢社会を論じる。

第8回 高齢社会と財政負担

高齢社会による財政負担および社会保障給付の問題を扱う。未曾有の高齢社会において、大きな支出項目となる財政負担、あるいは年金、医療費、福祉など、さまざまな面から功罪両面を論じる。

第9回 高齢社会による期待成長産業

シルバー産業、生活支援産業、ビジネス支援産業など、高齢化によって成長が期待される産業と産業構造の変化などについて論じる。

第10回 マーケティング論の立場から高齢社会を考える。

マーケティングの発想—消費者行動論の立場から、今後の高齢社会のあり様を考える。

《総合的学習》

第11回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。プレゼンテーションも試みる。

《人文科学の立場から》

第12回 「ふるさと学」

私たちはどのように「ふるさと」を持つのだろうか。必要とするのだろうか。どのようにして充実した環境を得て、如何に質の高い生活を得るかという問題を、少子高齢社会の「ふるさと」の姿という観点から論じる。

第13回 「老」の価値

「老」の文化論をともに考えてみたい。私たちの祖先は、「生老病死」をどのように受け止めてきたのだろうか。今ここにいる私たちには、「生老病死」をどのように見つめることができるだろうか。

第14回 ライフ・サイクル

「ライフ・サイクル」論について基本的な解説をする。併せて、諸民族のライフ・スタイルと、彼らが加齢 (aging) をどのように受け止めているか、いくつかの具体例をも紹介し、その智慧に学ぼうとする。

《まとめ》

第15回 まとめ

レポートの書き方について説明し、全体的なまとめを行う。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 総合講座Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目は、「あなた（学生）にとって、環境問題とは何か」という問いかけを一貫した柱とするものである。地球環境の諸問題を理解し、率先して行動しようとする意識を持つことができるようになることを、授業の目標とする。</p>			
授業の概要 <p>環境に関わる危機的な兆候や状況が繰り返し問題にされているが、それらに関する情報は、未だ十分に公開されているとはいえない。このような中で、私たちはどのように行動することができるのか、必要なのかということ、さまざまな角度から解説する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 「環境問題」について、現代文明のあり方の問題として捉えることから始める。併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法を説明する。 《自然科学の立場から》以下3回は、外部講師が参加する。 第2回 自然科学の立場から見た地球環境 地球の歴史から人類の誕生、そして文明の起源を解説することから始める。文明の歴史は、環境への適応と、そして同時に環境への負荷の歴史でもある。 第3回 水とゴミ(1) 水などの資源に始まり、廃棄物の問題にいたるまで、第一線の研究者としてだけでなく、現場の陣頭指揮に当たった立場から、ありのままをわかりやすく紹介する。 第4回 水とゴミ(2) 環境の浄化やリサイクルの問題などを取りあげる。 《医学その他の立場から》 第5回 水俣病問題を考える 公害の原点とされている水俣病は50年前に水俣市の化学工場（当時新日本窒素、現在チッソ）から排出されたメチル水銀が魚類に蓄積し、それを多食した住民が罹患した。長く鹿児島で過ごし、この問題に深く関与してきた。その経緯を述べ、公害問題をともに考えてみたい。 第6回 屋久島の事例から考えること 富士山が世界遺産への登録を拒否されたことを知っているだろうか。その理由は散乱するゴミである。一方、屋久島は1993年に世界遺産に登録された。私たちの生活と環境との関わりをみつめるうえで、極めて貴重な事例となっている。長くその現場に取り組んできた立場から解説する。 第7回 放射能について 核兵器の脅威、放射能の害などについて解説する。原爆による被害の状況などを具に証言するゲスト・スピーカーが参加する予定である。			

《生物学の立場から》以下2回は外部講師が参加する。

第8回 環境問題と生物(1)

生態系はどのように連鎖しているか。そこで環境破壊が行なわれると、生命はどのような影響を受けるか。長く現場で取り組んできたこの分野の専門の講師を迎えて実施する。

第9回 環境問題と生物(2)

生物の棲息環境の保護について、具体的な取り組みの事例を紹介しながら、そのさまざまな問題点を考えていく。

《総合的学習》

第10回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。

《社会科学の立場から》

第11回 経済成長と環境

高度経済成長期から、安定成長期、グローバル化が進展した時期、バブル崩壊後といった、それぞれの局面の経済活動と、それに派生した環境問題を取り上げる。

第12回 環境ビジネス企業の最前線

環境を悪化させない社会経済システムの構築に向けた取り組みについて論じる。また、環境ビジネス企業最前線の取り組みも解説する。

《人文科学の立場から》

第13回 環境に関する教育・思想の潮流と具体的な取り組み

「環境」は今、どのように論じられているか。それらのいくつかを解説し、身近な取り組みについても紹介する。

第14回 リンゴの教え・海の教え

環境の問題に取り組んだ人々の事例と、そこから学ぶことのできる教訓について解説する。

第15回 環境人類学の黎明

世界の諸国・諸民族は、環境の問題にどのように直面してきたか、また取り組んできたか。それらの事例から、今後の人類のあるべき姿についても考えたい。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 教養総合演習 I (短編小説を書く)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 小説作法を実践的に学び、1 編の短編小説を書き上げる。			
授業の概要 近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の 1 つのプロセスを学び、1 編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は、受講態度、予習、復習、提出作品など、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する） 第 2 回 あるテーマとその描き方について学ぶ。 第 3 回 テーマの見つけ方・各自 10 のテーマを設定する。 第 4 回 初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10 のテーマのうち、5 つのストーリーを書く。 第 5 回 小説にプロットは欠かせない。5 つのうち、3 つの設計図（小説の姿）を書く。 第 6 回 3 つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。 第 7 回 場面と 3 つの作品の参考資料の収集。 第 8 回 3 つの設計図から 1 編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。 第 9 回 1 編の小説を書き始める。 第 10 回 1 編の小説を書き終わる。 第 11 回 第 1 回改訂作業（登場人物は機能しているか） 第 12 回 第 2 回改訂作業（導入部は読者の心を掴むか・障害物は適切か） 第 13 回 第 3 回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か） 第 14 回 各自朗読と批評 1 第 15 回 各自朗読と批評 2			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (『アジアの歴史』を読む)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 松田壽男博士の名著『アジアの歴史』を講読する。 本書は、アジアの地理、風土、歴史を、世界史的視野において分析・通観したもので、出色の概説書である。これを学ぶことによって、近隣アジアの基礎知識を身につけつつ、社会人としての力量向上をめざす。			
授業の概要 従来型の「世界史」に対する批判の書であり、また一方で平易な入門書でもある本書を、丹念に読み、これを報告発表することによって、地理的・歴史的知識、あるいは専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。			
学生に対する評価の方法 試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告・発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 報告分担 第3回 「世界史とアジア」「歴史と風土」 第4回 「アジア史の基礎」 第5回 「黄土の文化」「中国の北と南」 第6回 「インド文化のひろがり」 第7回 「海洋に生きる人たち」 第8回 「地中海という世界」 第9回 「イラン文化のかがやき」 第10回 「アジアの十字路」「西域の文化」 第11回 「漢民族の栄光」 第12回 「絹馬の交易」「ステップの道」 第13回 「トルコ＝イスラーム」 第14回 「世界史の転換」 第15回 総括			
使用教科書 松田壽男『アジアの歴史』（岩波現代文庫） 『世界史年表・地図』（吉川弘文館） 『なるほど知図帳 2011 世界』（昭文社）			
自己学習の内容等アドバイス テキストを読む際に、地名は歴史地図・現代地図で、歴史上の事柄は年表で確認しておくこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (マーケティング)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ※募集人数は 15 名前後
授業の到達目標及びテーマ マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。			
授業の概要 マーケティングは、企業の経営戦略の考え方を学ぶためにも、賢い消費者になるためにも必要である。幸い、本学では管理栄養学科—食品流通、食品マーケティング、映像メディア学科—メディアを介したマーケティング活動、デザイン学科—普及活動や広告デザインとしての広告論、ファッション学科—流行理論や販売促進のためのプロモーション戦略、ヒューマンケア学部—各種子どもの市場調査とマーケティングの模索などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度ならびにレポート等で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 サブゼミ (演習) の概要とマーケティングとは何かを説明する。 第 2 回 マーケティングの歴史と理論 (平易に解説) 第 3 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 1 章—製品戦略に関する解説・説明 第 4 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 2 章—価格戦略に関する解説・説明 第 5 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 3 章—プロモーション (広告等) に関する解説・説明 第 6 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 4 章—流通チャネルに関する説明・解説 第 7 回 マーケティングの最近の手法 (気付かないで多用している身近な話題) 第 8 回 マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。 第 9 回 消費者行動論 第 10 回 市場調査、マーケティング・リサーチ 第 11 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 12 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 13 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 14 回 総括 第 15 回 レポート等の提出と半期を振り返って。			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 基本となるマーケティングの理論を短期間でマスターすること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (健やかにダイエット)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照
授業の到達目標及びテーマ ・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。 ・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる “健やかにダイエット” 」 <受講の要件> ①体格指数(BMI)25 以上 ②体脂肪率 男子 25%以上、女子 30%以上 ③腹囲 男子 85cm、女子 80cm 以上 ①②③のいずれか一つ以上、該当する学生が対象			
授業の概要 本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。			
学生に対する評価の方法 受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。 なお、期末試験および再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 1 第 2 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 2 第 3 回 身体運動の展開 (栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する) ○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定 ○ ライフコーダ (生活習慣記録機) の使用説明 第 4 回 身体運動の展開 1 ○ ライフコーダによる 1 週間分のデータを分析する ○ コンバインドトレーニングの実施 (レジスタンストレーニング、エアロビクス) 第 5 回 身体運動の展開 2 第 6 回 身体運動の展開 3 第 7 回 身体運動の展開 4 第 8 回 身体運動の展開 5 第 9 回 身体運動の展開 6 第 10 回 身体運動の展開 7 第 11 回 身体運動の展開 8 第 12 回 身体運動の展開 9 第 13 回 身体運動の展開 10 ○ コンバインドトレーニングの実施 ○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定 第 14 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成) 第 15 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成)			
使用教科書 必要に応じて、資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス ・運動している自分自身を科学する。 「やってみるごと」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」 ・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. ファルク
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ この授業の目的は、1) 各学生の専門分野 (管理栄養など) に関連する話題のプレゼンを行う 2) プレゼンに際して、学生間で英語で相互に意見交換する、などの基礎的技術を養う。個人個人の学習を把握するため、受講人数は10～15人くらいを予定している。 英語でプレゼンテーション・この授業を受けるにあたり、文法や語彙などの英語基礎学力は問わない。どのようにして面白いプレゼンができるかということを目指し、いかなる学生も受講できる。			
授業の概要 下記に挙げたほとんどの学習材料は、実生活、クイズ、疑似活動などを取り上げたもので、先ず初めは学生たちが事前準備なしで口頭によるプレゼンを行なう。後に計画を練ったり、準備したりして、更にプレゼンを進めて行く。学習期間中、学生は自信を持って計画を立案したり、自分のプレゼンを作成していくために、個々に教員と共に勉強して行く			
学生に対する評価の方法 成績評価の内訳は次の通り；レポート提出 (50%)、オーラルテストとしてのパワーポイントを使った自身の専門に関するプレゼン発表 (50%)。原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回～第5回 基礎英語コミュニケーションスキル (実践/復習) 第6回～第7回プレゼン一般を立案するための基礎技術 第8回～第9回一般的なプレゼンを構築するための基礎技術 第10回～第14回自己の専門分野に関連した内容のプレゼン実習 第15回最終オーラル試験として、自分の専門分野に関する内容のプレゼンを準備・実践する			
使用教科書 • Jones, L. and Alexander, R. 2000. <i>New International Business English</i> . CPU. 学生は教科書購入の必要なし。上記の参考文献からのプリント類が準備される。ネット上からも教材を得る。			
準備学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てもらいたい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 直
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ 基本的な英文を文法・語彙選択などを間違わずに作成する。英訳だけではなく、英作方法を修得する。 註) 「基礎英語学力向上のための Web 授業」がネット上に公開されているので、学内での空き時間ならびに自宅など学外での余暇の時間に各自が自由に学習できる。(学外から当該サイトへのアクセスには、大学ネットワークにログインする各自の ID・パスワードが必要) URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/			
授業の概要 各自が英語を母国語とする国をひとつ選び、その文化、歴史、政治、法律、習慣、日常生活などをインターネットや文献で調べ上げ、自分の意見や感想、コメントを加えた報告レポートを英語で書く。1,500～2,000 語を目標とする。個人の学習内容や進捗度合いを見極めるために、10～15人を予定。使用教室は、E-31 (東館3階同時通訳演習室)を予定している。(空きがない場合は小教室)			
学生に対する評価の方法 レポート内容70%、授業貢献度20%、授業受講態度・姿勢10%で評価する。 原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 講義 授業計画・評価方法についての説明、およびレポートの書き方を教授 第02回～04回 演習 諸外国の情報を入手し、日本語でまとめ上げる。 第05回～08回 演習 日本語での情報内容を英語に訳し、自分のコメントも加える。 第09回～13回 演習 各自が訳した英文を担当教員がチェックし、修正しながら指導する。 第14回 演習 レポート提出 (個々にチェックを行い、修正箇所がある場合は次週に再提出) 第15回 演習 レポート最終提出 (完成版)			
使用教科書 原則として教科書は使わない。インターネットや雑誌などから情報を入手する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業受講前に各自が雑誌やインターネットで必要な情報を入手し、学習材料として準備する。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (オペレーションズ・リサーチ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人が生活していくと、その身の回りには多くの課題や問題が発生する。我々は、それら問題を解決するために多くの判断を下していかなければならない。一般にそれら判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実に効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ (OR) である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。			
授業の概要 本授業では、まず OR でよく出現する実社会における幾つかの問題に対する数理的な解決方法を、EXCEL を使った演習を通じて学ぶ。その後、各自が自分で問題を設定し同様に解決を試みる。最後にこれら演習をレポートとしてまとめる。 なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理1）、表計算演習（または情報処理2）を事前に修得しているか、もしくはこれらに対して同等以上のスキルを有することが望まれる。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題（EXCEL のワークシート）などから総合的に評価する。なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（書注意、講義内容、成績評価方法など） 第2回 簡単な生産計画問題を使い線形計画法の基本を学習する。 第3回 EXCEL のソルバー機能を使って実際に解く。 第4回 自分の身近な問題へ適用してみる。 第5回 シミュレーションによる問題解決方法を学習する。 第6回 EXCEL を用いて、金利返済やバスの乗車など身近な問題をシミュレーションで解いてみる。 第7回 実際の自分の問題へ適用してみる。 第8回 PERT/C PMを用いた工程管理を学習する。 第9回 EXCEL を用いて、工程管理を行う 第10回 卒業研究や卒業作品作成のスケジュール管理などに適用してみる 第11回 AHP による意志決定手法を学習する。 第12回 EXCEL を用いた演習を行う。 第13回 その結果を自分の就職活動の意志決定に適用してみる。 第14回 今までの学習結果を整理し、レポートとしてまとめる。 第15回 同上			
使用教科書 なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）			
準備学習の内容等アドバイス 時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちな場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (宗教心理学)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15 名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 宗教が、その周辺の諸文化と密接に結びつき、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて宗教心理学という新しい視点から考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。			
授業の概要 研究のための視点として宗教心理学を講じると共に、それに並行してさまざまな宗教文化についても解説し、心理学的な分析をする。 受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。 「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 宗教心理学とは何か 心理という人間一般の地平で宗教を眺めようとすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとすることを意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。 第 2 回 心の深層と象徴 宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100 万回生きたねこ』などを題材に解説する。 第 3 回 元型(1) ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。 第 4 回 元型(2) 「マンダラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーターパン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。 第 5 回 神話に学ぶ愛のかたち 神話やさまざまな物語の中には、さまざまな愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン (アーサー王伝説)・かぐや姫などを題材とする。 第 6 回 変容 一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常生活の中にも存在し得る。錬金術・茶道・キャンプファイアー・箱庭などを題材に解説する。 第 7 回 「身体」の宗教心理学 「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教という文化やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得るものであることについては、第 6 回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探究する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。			

第8回 「回心」の研究

「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第9回 宇宙飛行士の悟り

「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第10回 生と死の心理

前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第11回 芸術と宗教

芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第12回 教育と宗教

西洋でも東洋でも、教育という営みに宗教は深く関わる。それは何故か。教育史を概観しながら解説する。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 教養総合演習Ⅱ（人間性研究）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 「人と思想」をテーマとする。 学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触れることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、思想的遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要 「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面を切り口として、その人間性を研究する。 「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも1科目の単位の取得者が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「人間性」とは何か なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。 第2回 人間性研究の方法論 研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社会的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。 第3回 資料について 資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。 第4回 日記・手記・伝記・評伝 日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。 第5回 人物の背景 歴史的社会的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。 第6回 ライフ・サイクル ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個人的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。 第7回 契機 個人的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。			

第8回 評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第9回 歴史的影響(1)

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回 歴史的影響(2)

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回 「人間性研究」のまとめ(1)

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかななくても、それに近い考察の仕方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。

第12回 「人間性研究」のまとめ(2)

前回の解説を振り返りながら、各自のまとめの作業に入る。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 情報基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. コンピュータの基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンの基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア／ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 コンピュータの特徴（世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴） 第3回 ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置 （ハード／ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、CPU） 第4回 デジタルとアナログ（デジタル／アナログの定義、デジタルの利点、デジタル化の方式） 第5回 基数変換（2進数、16進数、基数変換） 第6回 数値表現①（固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差） 第7回 数値表現②（ゾーン10進数、パック10進数） 第8回 文字表現（1バイト系コード、2バイト系コード） 第9回 命令とプログラム （命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ） 第10回 補助記憶装置（ハードディスク、フロッピーディスク、CD） 第11回 補助記憶装置（DVD、光磁気ディスク、半導体ディスク） 第12回 入出力インタフェース（シリアルインタフェース、パラレルインタフェース） 第13回 入出力装置（入力装置、出力装置） 第14回 ソフトウェア（オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 情報倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。			
授業の概要 インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70点）、単元ごとの達成度小テスト（5回分合計30点）、出席回数等を考慮して、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など） 第2回 情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性） 第3回 個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権） ※第1回達成度小テスト 第4回 社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化） 第5回 身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響） ※第2回達成度小テスト 第6回 電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト） 第7回 Webページによる情報の受信・発信（Webページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション） 第8回 情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ） ※第3回達成度小テスト 第9回 コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウイルス、スパムメール・チェーンメール） 第10回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為） ※第4回達成度小テスト 第11回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為） 第12回 ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル） 第13回 まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面 ※第5回達成度小テスト 第14回 まとめ：健全な情報社会のあり方を考える 第15回 学期末試験			
使用教科書 『情報倫理』 情報倫理教育研究グループ著（実教出版）420円			
自己学習の内容等アドバイス 簡単な「達成度小テスト」のためにも、復讐あるいはテキストの準備は不可欠である。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。参考図書は必要に応じ紹介する。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典・内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理Ⅱ（表計算）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ <p>学校あるいは企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が保健あるいは心理アンケート等を行い、収集したデータを計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、性質の異なったデータに対して、適切な機能を選択し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15 点程度）、授業内で提出する課題（85 点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が 50 点満点であり、残りは、収集したデータを計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて 35 点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1 回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第 2 回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第 3 回 計算機能についての学習 第 4 回 グラフ機能についての学習 第 5 回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第 6 回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF 関数の基本 第 7 回 IF 関数の入れ子 第 8 回 IF 関数と論理積・論理和 第 9 回 日付処理の方法 第 10 回 検索行列関数の使い方 第 11 回 カレンダーを作る 第 12 回 保健あるいは心理アンケートの作成と実施 表集計ソフトを利用して、アンケート用紙を作成する。 第 13 回 アンケートから得たデータの打ち込みと分析その 1 第 14 回 データの分析その 2 と解釈 第 15 回 計算表と作図を含めたレポート作成（提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。参考図書は必要に応じ紹介する。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報処理Ⅱ（表計算）		演習	堀尾 正典
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次後期	選択	幼児保育対象
授業の到達目標及びテーマ <p>企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） <p>表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。</p> 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールと並び、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイデアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。			
授業の概要 本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、 <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。			
学生に対する評価の方法 受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 古藤 真
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS) Excel2007 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やABC分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。			
授業の概要 表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(20%)、実技試験(60%)、情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト(20%)などで総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンスおよび基本操作 受講する上での諸注意や演習の概要、成績の評価方法など 第2回 Excel の基礎知識 データ入力 第3回 Excel 入門 簡単な表の作成 ファイル操作 プリンタの操作 演習室利用の際の諸注意 第4回 ワークシートの活用1 第5回 ワークシートの活用2 第6回 ワークシートの活用3 第7回 グラフ1 第8回 グラフ2 第9回 データベース1 第10回 データベース2 第11回 データベース3 第12回 Excel の応用1 第13回 Excel の応用2 第14回 実技試験1 第15回 実技試験2			
使用教科書 Windows Vista 対応 30 時間でマスター Excel 2007 実況出版編集部編 (実教出版)			
自己学習の内容等アドバイス ソフトウェアの修得には、短期間で集中して演習することも必要です。時間があれば教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡します。随時実施すること。			

[授業科目名] ネットワーク論 ／情報処理Ⅲ（ネットワーク論）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. ネットワークに関する基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンをLANやインターネットに接続する時の基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 今日のこのようなネットワーク社会においては、コンピュータはLANやインターネットなどに接続されていることは必須となっており、ネットワークに関する幅広い知識や技術が要求されている。本講義では、LANとインターネットを中心としたこれらの基礎知識について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 ネットワークの概要 （LANとWAN、ネットワークを構築するハードウェア、クライアント／サーバ・システム） 第3回 OSI参照モデル（OSI参照モデルの概要） 第4回 TCP/IP①（TCP/IPの概要、TCP/IPとOSI参照モデル） 第5回 TCP/IP②（IPアドレス、サブネットマスク） 第6回 LAN①（LANの特徴、伝送媒体の種類） 第7回 LAN②（LANの種類、プロトコル） 第8回 WAN①（WANの構成とインターフェース、伝送制御） 第9回 WAN②（電気通信サービス） 第10回 インターネット①（インターネットの特徴、接続技術、ドメイン名） 第11回 インターネット②（インターネットのサービス） 第12回 インターネット③（インターネットの接続方法） 第13回 ネットワークセキュリティ（セキュリティの概念、不正アクセス行為と対策、ウイルス） 第14回 ネットワーク関連知識（ネットワーク管理ツール、OS、符号化と伝送技術、関連法規） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習 ／情報処理IV(プレゼンテーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を活かしながら課題探求することである。 特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 ビジネスの現場では、プレゼンテーション能力のある人、クリエイティブな能力のある人の活躍がめざましくなっている。 そこで本科目は、プレゼンテーションの基本的理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。 具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。			
学生に対する評価の方法 プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど） 第2回 プレゼンテーションの基礎（プレゼンテーションの概要とPowerPointの基本操作） 第3回 プレゼンテーションデータ作成の基礎1（テキストデータによるスライドの作成） 第4回 プレゼンテーションデータ作成の基礎2（スライドの編集・加工、印刷） 第5回 プレゼンテーションデータ作成の基礎3（図表やグラフの利用） 第6回 プレゼンテーションデータ作成の基礎4（スライドマスタの利用、特殊効果の設定） 第7回 復習問題 第8回 プレゼンテーションの実践1（オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成） 第9回 プレゼンテーションの実践2（情報の収集、スライドの作成） 第10回 プレゼンテーションの実践3（スライドの作成） 第11回 プレゼンテーションの実践4（シナリオの作成） 第12回 プレゼンテーションの実践5（発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術について） 第13回 プレゼンテーションの実践6（リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価） 第14回 発表1（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価） 第15回 発表2（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）			
使用教科書 実教出版編集部（編）『30時間でマスター プレゼンテーション+PowerPoint2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] データベース演習 ／情報処理VI (データベース)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。 特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト (Microsoft Access) を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。特に産業界では、データベース技術を持つ人材のニーズが高まっている。 そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。 具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成 (テーブル)、データの抽出や集計 (クエリ)、データ入力画面の作成 (フォーム)、各種報告書や宛名ラベルの印刷 (レポート) 等の各項目について学習していく。			
学生に対する評価の方法 期末試験 (50%)、提出を義務付けた課題 (30%)、授業における取組状況 (20%) により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど) 第2回 データベースの基礎1 (リレーショナルデータベースとは、データベースソフト Access の基本操作) 第3回 データベースの基礎2 (データの検索、並べ替え、印刷) 第4回 テーブルの作成1 (テーブルとは、データの形式、データの入力) 第5回 テーブルの作成2 (入力支援機能の活用、効率的なデータ入力) 第6回 フォームの作成 (フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集) 第7回 クエリの作成1 (クエリとは、選択条件の作成) 第8回 クエリの作成2 (集計処理、式ビルダの利用、関数の利用) 第9回 クエリの作成3 (アクションクエリの利用) 第10回 データベースの設計1 (新規テーブルの作成、フォームの設計) 第11回 データベースの設計2 (リレーションシップの設定、データの入力) 第12回 データベースの設計3 (リレーションシップされたクエリの作成と計算) 第13回 レポートの作成 (レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能) 第14回 全体の復習 第15回 期末試験			
使用教科書 実教出版編集部 (編) 『30時間でマスター Access2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] プログラミング演習 ／情報処理Ⅶ（プログラミング）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な思考法を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができるはずである。</p> <p>本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、将来の挑戦に対する足がかりには十分なるであろう。</p>			
授業の概要 <p>本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができるJavaScriptを用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Java スクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Java スクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能になるだろう。</p> <p>なお、本科目はでは情報の教職課程の履修を目指す学生（映像メディア学科2年以上で教職を選択する者）を優先とし、希望者多数の場合は、抽選となる場合もありうるので注意いただきたい。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。</p> <p>第2回 HTML と CSS について（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習）</p> <p>第3回 主なタグ（HTML 言語を用いて簡単な Web ページの作成）</p> <p>第4回 JavaScript の概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子）</p> <p>第5回 入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力）</p> <p>第6回 分岐1（IF の基本的な使い方）</p> <p>第7回 分岐2（条件分岐の応用）</p> <p>第8回 繰り返し1（繰り返し処理の作り方）</p> <p>第9回 繰り返し2（多重ループ）</p> <p>第10回 関数（関数とは、作り方、呼び出し方）</p> <p>第11回 配列（配列とは、配列の利用方法）</p> <p>第12回 課題作成1（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する）</p> <p>第13回 課題作成2</p> <p>第14回 課題作成3</p> <p>第15回 評価</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難であろう。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。</p>			

[授業科目名] システム開発と運用論 ／情報処理Ⅷ（システム開発と運用）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 情報システムの開発、運用、管理に関する基本知識や各種技法を理解する。 2. 経験者の指導の下で、情報システムの開発、運用、管理等の実務ができる。			
授業の概要 情報システムの開発、運用、管理に関する知識や技法は、情報システムだけではなく、一般の業務の遂行においても必要であり、それらを踏まえた上で、情報システムの開発業務に関わる場合に必要な、基本知識と各種技法を学ぶ。本講義では、開発技法、ソフトウェアの再利用、開発の準備、要件定義、分析・設計技法、外部設計、内部設計、プログラム設計、プログラミング技法、テスト・レビュー技法、システム構成技術、システムの性能と信頼性の項目に分類し、各々の詳細についてその基本を学習する。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス（授業の目的、授業計画、評価方法等の受講ガイダンス） 第2回 システム開発の概要（システムの定義、システム化とは、システム開発の概要） 第3回 システム開発（システム開発技法、開発コストモデル） 第4回 ソフトウェアの再利用（サブルーチン、関数、プログラム属性、リバースエンジニアリング） 第5回 システム化開発の準備（準備の手順） 第6回 システム化要件定義（調査方法、分析方法、分析設計図法） 第7回 システム設計技法（プロセス中心設計、データ中心設計、オブジェクト指向設計） 第8回 外部設計 （要件定義の確認、サブシステム分割、画面設計、報告書設計、コード設計、論理データ設計） 第9回 内部設計（プログラム分割、物理データ設計、入出力詳細設計、レビュー） 第10回 プログラム設計（構造化設計、モジュール分割技法、モジュールの独立性、レビュー） 第11回 プログラミング （モジュール設計、構造化プログラミング、プログラミング手法、コーディング、成果物） 第12回 テストとレビュー （ボトムアップアプローチ、テスト手法、デバッグ手法、レビュー手法、テスト管理） 第13回 システム構成技術（システムの構成、処理形態） 第14回 システムの性能と信頼性（稼働率、処理能力、性能評価法、信頼性の指標） 第15回 試験			
使用教科書 なし。 但し、随時プリント等の参考資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 総合講座 クリエーション ナウ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] メディア造形学部 教員
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア造形学部を構成する映像メディア学科、デザイン学科、ファッション造形学科の全体像を把握することで、メディア造形の世界がいかに複雑かつ密接にあるかを学ぶ。その上で、表現することが、いかに様々な領域を横断し合って成立しているかを知るとともに、自ら積極的に他領域とブラグインしていく姿勢を養う。			
授業の概要 映像・デザイン・ファッションの各領域の分野を、メディア造形学部全学科の教員により紹介・解説しながらも、メディアとは何かを根底に置き、より拡張された表現世界を呈示する。また、3学科分野に限らず、人が創造する行為（クリエイション）と社会とを接続する内容で各講義を行っていく。			
学生に対する評価の方法 出席状況、学科単位で行うレポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 今、メディア造形のあり方とは～領域を越えて 第2回 映像メディア1（映像メディアについて・映像基盤としての写真） 第3回 映像メディア2（CGとアニメーション表現） 第4回 映像メディア3（TVというメディア） 第5回 映像メディア4（映画の世界） 第6回 映像メディア5（サウンドとインスタレーション） 第7回 デザイン1（総合） 第8回 デザイン2（プロダクト・デザイン） 第9回 デザイン3（ビジュアル・デザイン） 第10回 デザイン4（環境空間デザイン） 第11回 ファッション造形1（ファッション・トレンド予測） 第12回 ファッション造形2（ファッション・プレゼンテーション） 第13回 ファッション造形3（生活者の意識変化とファッション小売業態） 第14回 ファッション造形4（ファッション素材と染色） 第15回 拡張するメディア造形へ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 自分の専攻以外の学科について、特に注目すること。			

[授業科目名] 現代映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像が現在に至るまでの歴史と基礎、映像のためのさまざまな考察によって、視覚表現、映像表現を实践するための基本的考え方や制作のための幅広い情報収集の方法を習得する。			
授業の概要 映像表現の出発点として、映像装置の歴史（日光写真、ゾーマトロープ、フェナキストスコップ、立体視などから3Dシステムまで）、視覚と見ることの構造、光と色彩と映像の歴史、時空間の考察を経て、映像のより深い認識へと向かう。講義内容の理解度を量るために、実験やテーマについて的小論文提出、そして自己表現、コミュニケーション能力を養うためのコンセプト発表を取り入れる。			
学生に対する評価の方法 受講態度、(20%) 授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、講義への参加意識やコミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 講義のはじめに、パースペクティブ描画、点と線による抽象表現を実施する。			
第1回	見ることの構造	見ることのはじまりから透視図法への表現と歴史	
第2回	視覚構造(1)	視差、錯視、3Dなど視覚特性を利用した表現の考察	
第3回	視覚構造(2)	残像効果による動画の成立	
第4回	光と視覚(1)	光と色彩	
第5回	光と視覚(2)	光による映像表現	
第6回	映像における時間	時間の概念と映像における時空間	
第7回	映像の芸術表現(1)	映像芸術の成立と歴史	
第8回	映像の芸術表現(2)	不可視の可視化	
第9回	映像の抽象表現(1)	点・線・面による映像表現	
第10回	映像の抽象表現(2)	表現を読み解く	
第11回	映像と情報	情報の収集、分析、読み取りから表現へ	
第12回	イメージの視覚化(1)	視覚化のためのコンセプトと設計	
第13回	イメージの視覚化(2)	設計のプレゼンテーション	
第14回	作品と講評	映像作品を講評する	
第15回	映像論 まとめ	講評	
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義で得たことについて復習し、実践で確認できることは実践を試みる。			

[授業科目名] メディア論 (コミュニケーションとメディア)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本のメディアと限定することなく、グローバルデジタル化の変遷の渦中にあることで、その変化の詳細を検証する。現存のメディアがネット上の仮想空間に吸収され、そのメディアとしての性格も変化を余儀なくされる。そんなデジタル環境の変化の中から、不安なく人間が歓迎できる新しいメディアの盟主を探求・考察し、それぞれの学生の‘メディア論’の構築を到達目標とする。			
授業の概要 放送、新聞、出版、広告、インターネット、アニメ、ゲームなど、19世紀から20世紀に発達したメディアの形成の歴史に触れながら、現在の社会的木鐸と称されるマス・メディアというものの功罪を学ぶ。さらに、ネットとの融合を不可避とするデジタル化するメディアの性格の変化に伴い、人間や社会との関係、メディアインフラ、法律、モラル、ジャーナリズム、そして将来のメディアリテラシーについても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解と好奇心、探究心の提示（30%）、出席数（40%）、試験レポート（30%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回. 過去のメディア、現在進行形のメディア、将来完了形のメディアの変遷 メディアとネットとの融合が生み出すものは 変化する「メディア」という性格 第2回. マス・メディアの役割と功罪 メディアリテラシーの基礎理論 第3回. 表現の自由（1）言論・表現の自由とは 第4回. 表現の自由（2）プライバシーの権利、匿名性という存在、知る権利 第5回. 表現の自由（3）著作権、芸術性とわいせつ表現 第6回. 新聞のメディア性（1）ジャーナリズム論の理論化 第7回. 新聞メディアの未来（2）新聞離れの実態 第8回. 出版メディアの現実と将来予測 第9回. 映画・アニメーションメディア（1）映像誕生から映画制作の現状 第10回. アニメーションメディア（1）アニメーションのグローバル席卷 第11回. 放送のメディア性（1）ネットとの融合 第12回. 放送メディア（2）ジャーナリズムはどのように生き残るか 第13回. インターネットの特性と既存メディアの関係 第14回. インターネットツールの拡大とメディアの住み分け 第15回. 試験レポート			
使用教科書 とくになし。			
自己学習の内容等アドバイス デジタル世代の視座をもとに、過去、現在、将来のメディアの性格、社会的使命の変化の源泉を探求する。日常的なメディアとの関係性に、恣意的違和感や不安を想定し、人間が歓迎する未来のメディアを検証する。			

[授業科目名] 認知心理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伊藤 君男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア学部にも所属する学生にとって、「人がどのようにものを認識しているのか」についての知識を得ることは、各々の専門を深く習得するために役立つと思われる。本講義では、認知心理学が提供する知識を習得し、人間の認知機能についての理解を深めることが目標である。			
授業の概要 認知とは、人が自分をとりまく環境をどのように認識し、そこからどのような知識を、どのような方法で手に入れているのか、そして、どのように、それらの知識を使用し、判断しているのかを説明しようとするものである。本講義では、知覚・記憶・問題解決・推論などを中心に解説していく。			
学生に対する評価の方法 最終的におこなう試験（50%）、授業時のレポート課題（30%）、平常の授業態度（20%）によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 本講義の概要 第2回 認知心理学が取り扱う領域 第3回 認知心理学の研究法 第4回 記憶のメカニズム 第5回 短期記憶と注意 第6回 長期記憶と検索 第7回 記憶の歪み 第8回 パターン認識 第9回 文脈効果と認識の歪み 第10回 問題解決 第11回 推論のメカニズム 第12回 推論の歪み 第13回 意思決定 第14回 認知と感情 第15回 試験			
使用教科書 使用しない。参考書などは、講義中に必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 認知心理学に習得した知識を、講義内だけでなく、他の講義や日常生活の理解などに適用してみるよう、心がけるとよい			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
美学		講義	瀬島 久美子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1～4年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
芸術学、美学、美学哲学の解体と再構成の歴史を考察することから、a 独自の美学確立へ向かうことを目標とする。			
授業の概要			
絵画、映像、音楽、空間造形など、美学の基礎となる作品を考察することで東洋と西洋の美の差異、世界の美の変遷を辿り、また自分を取り巻く情報環境を認識し、現代の美の輪郭を把握する。			
学生に対する評価の方法			
受講態度(20%)、授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、コミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
講義のはじめに、文章表現のトレーニングとして、絵画、映像作品の印象批評、分析などを発表または提出する。			
第2回	遠近法(1)	表現の歴史とさまざまな遠近法	
第3回	遠近法(2)	知の遠近法としての美学、哲学	
第4回	遠近法へのアプローチ	遠近法の探索	
第5回	記号と言語(1)	言語による表現について	
第1回	記号と言語(2)	映像における記号と言語	
第6回	知覚と認識(1)	線的認識と面的認識	
第9回	知覚と認識(2)	光の面的認識	
第7回	ヴァナキュラーな表現(1)	ヨーロッパの光、日本の光	
第8回	ヴァナキュラーな表現(2)	西洋の表現、東洋の表現	
第10回	GENIUS LOCI(1)	歴史と自然環境からのアプローチ	
第11回	GENIUS LOCI(2)	情報の読み取り	
第12回	時空間の表現(1)	空間の概念。建築とインスタレーション	
第13回	映像的アプローチ(1)	遠近法の探索と考察	
第14回	映像的アプローチ(2)	考察結果のプレゼンテーション	
第15回	まとめ、講評		
使用教科書			
なし			
自己学習の内容等アドバイス			
講義で学んだ事を基礎として表現に応用するために、復習の段階で実践を試みる。			

[授業科目名] 芸術英語コミュニケーション		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 白前 晋
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 文献（主に映像、ファッション、デザインに関わるもの）を講読し、理解力を高め日本語でのコミュニケーション能力の向上を計ることを狙いとする。専門分野における制作の方向性を明確にできる力を養うことを目標とする。			
授業の概要 主に英語文献を読み解き（授業の中で訳す）、ディスカッション形式で授業を進める。写真や映像、音楽なども資料として取り扱うことでより理解を深める。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、授業内で行なうレポートにより各授業項目の理解度(40%)、最終に実施する試験(40%)などで総合的に評価を行う。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションと英語力の確認テスト 第2回 文献購読にあたり 第3回 文献講読① 第4回 文献講読② 第5回 文献購読③ 第6回 文献購読④ 第7回 文献購読⑤ 第8回 英語文献講読⑥（映像鑑賞） 第9回 英語文献講読⑦（映像鑑賞） 第10回 文献購読⑧ 第11回 文献購読⑨ 第12回 文献購読⑩ 第13回 文献講読（試験に関して） 第14回 試験日① 第15回 試験日② 履修者の状況（履修者所属学科及び学年）によって、上記のスケジュール及び内容を変更することも想定している。映像鑑賞に関しては授業の進行状況などによって日程を変更することが想定される。文献に関してはファッション、デザイン、映像に特化せず幅広く取り扱う予定。 英訳ができるツール（電子辞書など）を持参すること。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 語学力を向上させるための授業ではないので、英語検定などの試験対策などは各自で行うことをすすめる。			

[授業科目名] 西洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松田 愛
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近現代のアートのおもろろな作品と実践について、美的・芸術的価値だけでなく社会的・歴史的意義について分析し、思考する力を身につけます。本授業が自身や他者の生、世界との関わり方について見つめるきっかけになればよいと思います。			
授業の概要 アートは現代という時代に生きる私たちのもののおもろろの見方や、社会の事象を映し出すと同時に、時代を超えて「生きること」そのものについての問いを投げかけます。近現代の作家たちの作品や、おもろろな実践をとりあげ、制作意図や活動背景を知るとともに、アートが現代の社会や歴史、世界や私たちの生とどのように関わっているのかを考えます。			
学生に対する評価の方法 授業での小レポート 40%、定期試験（レポート） 60%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 近代までの西洋美術史 第3回 西洋近代美術のはじまり（1）：マネの絵画 第4回 西洋近代美術のはじまり（2）：印象主義の実践 第5回 近代から現代へ：後期印象主義とセザンヌの絵画 第6回 マティスの絵画 第7回 ピカソの芸術 第8回 キュビズムの実践 第9回 ダダ、シュルレアリスム 第10回 抽象表現主義 第11回 ポップアート 第12回 日本のポップ 第13回 コンセプチュアル・アート 第14回 現代の芸術 第15回 定期試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 本や資料を通して学べることは限られているため、積極的に美術館や展覧会へと足を運び、作品と直接向き合う機会をもちましょう。			

[授業科目名] 日本美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木下 稔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 スライド使用
授業の到達目標及びテーマ 美術の歴史は、美の殿堂でもあり、人間の生活の記録でもある。美術作品は、美しさを通して、我々に感動と興奮を覚えさせる。美術作品が、我々に呼びかけ、語りかける意味とその意味の関連について考察し、異なる時代に於ける美術の特徴、制作意識、技術的意味と意義など自ら理解できるよう指導する。			
授業の概要 本講では、特に平安・鎌倉時代の「やまと絵」、室町時代における「水墨画」及び近世初期、桃山から江戸初期に至る障屏画、近・現代の絵画を中心に、それぞれの様式上の特徴と変遷、その意味と意義、そして今日的意義を概説、考察する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (20%)、各授業項目の理解度 (30%)、最終に実施する試験 (50%) などで総合的に評価を行う。尚、出席率は3分の2以上を必要とする。特別理由の無い限り再評価はしない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義内容の説明、そして造形美術の意味と意義について 第2回 造形美術との出会い、造形美術は如何にあるべきか 第3回 先史時代の美術 ―その生活と文化― 第4回 奈良時代の美術、彫刻・工芸を中心に 第5回 平安時代の美術について、日本独自の美術様式の成立 第6回 「やまと絵」 ―源氏物語絵巻を中心に―、 <u>小テスト</u> 第7回 鎌倉時代の絵画 ―中国宋・元画と日本の絵画について― 第8回 室町水墨画と雪舟の世界 第9回 桃山時代の美術とその精神 第10回 桃山時代の美術 ―永徳・等伯・友松の世界― 第11回 光悦・宗達、そして琳派について ―その世界と時代思潮― 第12回 江戸時代初期における美術について、その流派と画家達 第13回 近・現代の美術、絵画を中心に (劉生・鬚光・大観・古径・遊亀ほか) 第14回 評価試験 第15回 日本美術の精神、そして今後における造形美術の使命			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じてその都度、文献資料の紹介と資料コピーを提供。 参考図書 山根有三監修『日本美術史』美術出版社 他			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を事前に知らせる。そして必ず質問事項を尋ね アドバイスする。			

[授業科目名] 東洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本はアジア文化圏の一隅を形成しており、古来この圏内のさまざまな文化を吸収することで独自の文化を形成してきた。この授業では日本に影響をおよぼしてきたアジア文化の歴史的展開について、特に美術的な観点から理解することを目標とする。			
授業の概要 広範な東洋美術の歴史について、中国・韓半島の絵画史、およびインドから中国・韓半島に及ぶ仏教彫刻史を概観する中で論じる。			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 北朝時代までの中国絵画（第1章①②） 第3回 中国の石窟寺院の仏教壁画（第1章③④） 第4回 隋・唐・五代の絵画（第1章⑤⑥⑦） 第5回 宋・南宋時代の中国絵画（第1章⑧⑨） 第6回 元代以降の中国絵画（第1章⑩⑪⑫） 第7回 韓半島の絵画（第1章⑬⑭⑮） 第8回 インドの仏教彫刻（第2章①②③） 第9回 中国の初期仏像（第2章④⑤⑥⑦⑧） 第10回 隋から宋代にかけての仏像（第2章⑧⑨⑩⑪⑫） 第11回 韓半島の仏像（第2章⑬⑭⑮） 第12回 試験 第13回 レポート講評 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 「すぐわかる東洋の美術」（東京書籍）			
自己学習の内容等アドバイス 授業初回に通達するサイトから必要資料をダウンロードし、常に次回分を予習すること。ほとんどの学生にとって東洋美術史は予備知識のない領域なので、予習なしに授業を理解することは難しい。また復習もこまめに行うこと。膨大な情報量をまとめて復習できるとは思っていない。			

[授業科目名] 先端芸術論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間の能力と先端技術を藝術によって融合させ、新しい文化と共生関係を創造し続けている現代の藝術は、従来の絵画、デザイン、工芸、彫刻という表現領域では推し量れないものになってきている。そこで来るべき時代意識に即した様々な藝術表現を探り、広く社会に目を向けた創造とはどのようなものがあるかを知り、視野を広げることを目標とする。特に現代美術の終焉以降のアート有り様を中心に、様々な場で発表されている変容するアート表現としてのドキュメントを見てながら解釈し、ポスト・アートとして提示する。			
授業の概要 テクノロジーの発展において現在の藝術は、今までの価値観・文脈の延長上では捉えきれない表現内容・方法を取っており、様々な展開を今現在見せている「アート」の具体的作品を多数とりあげ、新たな解釈をしていく。			
学生に対する評価の方法 試験期間中に授業内容に関する題目でレポートを作成し、その内容で評価する。 出席状況、受講態度をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第一回 「藝術表現とはなにか」～ コンテキストとアートワールドの逸脱 第二回 「モダンアート」～ 創作上の自由宣言・主義主張 / 個人の自律という幻想 第三回 「前衛って何？」～ お藝術でなければ何でもいい 社会の文脈を問うその質があった時代 第四回 「モダンアートの終焉の始まり」～ 複製の環境のなかで / 主体でなくなる 第五回 「大衆音楽」～ ROCK MUSIC 百花撩乱 / ポップと箱(制度)からの脱出 第六回 「身体」～ 他者としての私 / 汗・臭いがない漂白世界と記号化する世界 第七回 「リアリティからリアルへ」～ 日常と世界の彼方 / 2001-9.11 以後 第八回 「日常のマイノリティ」～ 大袈裟でないリアルなもの / 透明な日常 第九回 「他者との交わり」～ 知らないものとの出会い / 不気味さと興味 第十回 「情報を経験する」～ データーベースの憂鬱を超えてテクノロジーと制御不可能な私 第十一回 「錯綜する複数のナラティブ」～ 物語の破綻からものかたる 第十二回 「メディアがコンテンツ」～ 透明化するメディアの前で 第十三回 「ニュー・メディア」～ 新たな画像 ～ 可能性としてのメディア 第十四回 「人の欲望」～ 試してみたいから、大きな問い 第十五回 「再び、アートとはなにか」～ アートは必要か *藝術ではない「アート」を考えていきます。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等は授業後でもよいので必ず確認すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナー I (会社設立)		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次後期 (集中)	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家(新しい事業を起こす人)と企業家(既存の組織を変革する人)の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会(ビジネスチャンス)を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、起業家及び変革に必要なプロセスについて概説したうえで、自らの事業計画作成を通じて、起業に際して求められる条件を考察します。			
授業の概要 企業経営を理解するには、企業経営を取り巻く環境を理解したうえで企業経営を評価する理論的な枠組みを駆使することが必要です。この授業では特にアントレプレナーのマインドを意識しつつ企業経営の歴史の変遷を確認するとともに、企業経営を理解する上で必要な切り口(経営戦略、マーケティング、ビジネスシミュレーション等々)を説明します。その上で、学んだ知識をビジネスプランに反映させる方法を体験してもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と発言(50%)、ビジネスプランについてのレポート(50%)により評価する。 受講者数によってはグループによる演習を行う。その場合は、グループワークの成果も評価に加えることがある。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回:日本のベンチャー創業の現状と課題/日本における開業率の低下の現状と、これに伴う課題について学ぶ 第2回:第1回の続き 第3回:日米のベンチャー創業の比較分析/ベンチャー先進国米国との比較を通じて、日本の置かれた現状と課題について学ぶ 第4回:経営に関わる理論/アントレプレナーに必要な経営理論を学ぶ 第5回:第4回の続き 第6回:事例を通じた経営理論の理解 第7回:第6回の続き 第8回:マーケティングに関わる理論 第9回:第8回の続き 第10回:事例を通じたマーケティング理論の理解 第11回:前回の続き 第12回:シミュレーションの枠組みと事例研究 第13回:ビジネスアイデアの発想法/ビジネスアイデアを見つけた際の着眼点について学ぶ 第14回:演習 第15回:演習と発表 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進度及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナーⅡ（会社運営）		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3・4年次前期（集中）	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家（新しい事業を起こす人）と企業家（既存の組織を変革する人）の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会（ビジネスチャンス）を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、アントレプレナーⅠの受講者を対象に、新たに開始した事業を順調に成長させるために必要となる専門的な知識を、事例研究と演習をもとに学びます。			
授業の概要 現実の企業経営では事業の発展段階に応じて経営課題も多様化し、それに応じた対応が求められます。この授業では、こうした経営課題の中から特に重要とされる経営戦略と市場開拓、マーケティング活動に焦点をあてて、基本的な知識について講義した後に実在する企業経営を評価します。その上で、各自が事業戦略の策定やマーケティング計画の作成におこなってもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と参加態度（50%）、戦略とマーケティング計画に関して作成したレポート（50%）により評価する。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：事例を通じた経営戦略の理解① 第2回：事例を通じた経営戦略の理解② 第3回：事例を通じた経営戦略の理解③ 第4回：事例を通じたマーケティング戦略の理解① 第5回：事例を通じたマーケティング戦略の理解② 第6回：事例を通じたマーケティング戦略の理解③ 第7回：発展段階に応じた経営理論の適応① 第8回：発展段階に応じた経営理論の適応② 第9回：ビジネス・プランの作り方① 第10回：ビジネス・プランの作り方 第11回：グループによるビジネスプラン（演習） 第12回：第11回の続き 第13回：ビジネスプランのプレゼンテーション① 第14回：ビジネスプランのプレゼンテーション② 第15回：個人別ビジネスプランの作成 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進捗及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名] 映画鑑賞・評価		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画を自分自身の眼で見、自分自身の考えで読み解く事を目的とし、映像の表現者を志す者、又は生涯にわたり映画から多くの糧を得ようとする者に、よく視ることがよく表現することの第一歩であることを理解してもらおう。と同時に、安易に量産される商品としての映画と、映像表現の精華であり時の重圧に耐えうる作品としての映画を見極める鑑賞眼を養う。			
授業の概要 映画とはどうゆうメディアか。それを理解するための構造分析、思考、映像表現等の講義と、実際の映画上映とその研究解説を主軸とする。上映する映画は年代、国籍を問わず広範囲に選択されるが、必ずしも名作と言われるものにかぎらず、映画としての充実度が重視される。また上映される作品は毎年変わる。限られた数本の映画ですべてを語る事は出来ないからである。			
学生に対する評価の方法 中間、期末の2回の試験で評価する。 試験は、映画を上映してその後、その場で論文を作成するもので、当日まで作品題名は伏せるので、学生独自の視点と思考が重要視される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 映画その構造、原理、社会性、人間に与える影響 人はなぜ映画を観たがるか？ 第2回 講義 映画的表現とはなにか、映画に映っているなにに注目すべきか？ 自作CMの表現を例に解説。 以後3回から14回は映画の上映と解説を行うが、すべて上映作品は当日発表する これは先入観なしで映画と向き合ってもらうためである。従って、ここには前年の授業内容を参考として紹介する。 （2010年度内容） 第3・4回 「フレンジー」（アメリカ）アルフレッド ヒッチコック サスペンス表現における、間と呼吸 巨匠最晩年の若々しい実験。 第5・6回 「天国と地獄」（日本）黒澤 明 雄弁な画面構成とは、構図が語る登場人物の内面心理。 第7・8回 「緑の光線」（フランス）エリック ロメール 中間試験 映画と人生の補色構造 第9・10回 「教授と美女」（アメリカ）ハワード ホークス スクリューボールコメディと透明な演出 第11・12回 「ひまわり」（イタリア）ヴィットリオ デ シーカ 俳優の存在感で可まる映画 小道具の意味 第13・14回 「奇蹟」（デンマーク）カール テオ ドライヤー 期末試験 虚構のなかに生まれる人間感情の真実。 第15回 講義 映画のDNA 映画誕生に至る経緯とその独自性 「月世界旅行」 ジョルジュ メリエス			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の性質上特に予習は必要ないが、復習は重要である 授業中に参考として紹介された映画、資料は必ず鑑賞、参照しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デザイン基礎 I A (発想・表現)		実習	木村 一男・河村 暢夫・小谷 恭二 黄 ロビン・金 昌郁・尹 成濟 井垣 理史・富安 由紀子・松井 伸之 山田 厚志・吉田 修作
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
4	1 年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ デザインにとって豊かな発想力は重要な鍵であり資産である。発想することから表現に着地するためには様々な情報を徹底的に分析して視点を変え伝える形に調理して行く必要が有る。この発想力を磨くには短期間に試行錯誤を繰り返すことが重要である。大きさや質を変換することも一つの方法である。自然の中にある秩序を観察して発見することや描写記録することも肝要であり、デザインされたモノを模倣することは避けたい。 ブレーンストーミングやKJ法で中間の発想を纏めて書き出し、発想したテーマを近いもので纏めて幹になる問題と枝葉のような問題を分類しながら問題解決をするトレーニングもある。多種の訓練を試みる。			
授業の概要 前期では、モチベーション（動機付け）を育てて才能の可能性を伸ばすことを学修の目標としている。 デザインを通して個性の確立、視野の拡張、豊かな表現力、等々を目指して日々研鑽を重ねる。 具体的な観察表現として画紙やゼムクリップ、輪ゴム等を与えて自由な発想から絵を描かせる。次第に抽象的なテーマに移行してデザイン要素の発見が繰り返えしながら発想方法を身につける。			
学生に対する評価の方法 課題ごとに取り組む姿勢や作品の深度を評価していく。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
1 限・2 限(9:40~12:50)		3 限・4 限(9:40~12:50)	
第 1 回	全体のオリエンテーション・教員紹介	第 1 回	全体のオリエンテーション・教員紹介
第 2 回	観察から表現へ [発想訓練] 画紙・スプリング等	第 2 回	画紙・スプリング等の形からモチーフを抽出する。
第 3 回	観察から表現へ [発想訓練] 輪ゴム・クリップ等	第 3 回	抽出したテーマを平面構成する。
第 4 回	観察から表現へ [貝殻] の観察とスケッチ	第 4 回	抽出したパターンを構成する。
第 5 回	貝殻の観察描写から模様の観察とパターン要素の検出・その発展	第 5 回	貝殻の観察描写からパターンを抽出する。 20cmx20cm の中に平面構成をする。
第 6 回	貝殻デザイン表現/油粘土による立体造型	第 6 回	油粘土による立体造型 20cmx20cm
第 7 回	素材の研究：油粘土による立体造型 20cmx20cm	第 7 回	石膏制作
第 8 回	構成の基本要素およびその原理1 [点・線・面による表現]	第 8 回	点・線・面の平面構成
第 9 回	構成の基本要素およびその原理2 [点・線・面による表現]	第 9 回	点・線・面の立体構成
第 10 回	平面構成/鉛筆による発想	第 10 回	鉛筆から無彩色
第 11 回	平面構成/色鉛筆による発想	第 11 回	色鉛筆から有彩色
第 12 回	立体構成による表現の考察 25cmx25cm の中で構成をする。	第 12 回	立体構成による表現の考察 25cmx25cm 発泡スチロールの構成/石膏仕上げ
第 13 回	空間構成による表現の考察 5cmx25cm	第 13 回	空間構成による表現の考察 5cmx25cm 発泡スチロールの構成/石膏仕上げ
第 14 回	全体のまとめ	第 14 回	全体のまとめ
第 15 回	作品展示と総合講評会	第 15 回	作品展示と総合講評会
使用教科書 特に定めないがテーマごとにレジメを用意する。			
自己学習の内容等アドバイス この課題は総合課題であるので、指導者が替わっても流れの中で制作を連続的に進めていくことが肝要である。			

[授業科目名] デザイン基礎 I B (応用)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・黄 ロビン 尹 成濟・伊藤 美知代
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業はデザイン基礎 IA(発想・表現)・IB(応用)と並行しデザイン表現におけるスキルを向上させるための授業である。デザイン基礎 IB(応用)ではデザインの表現や展開する基礎的なメソッド(技法)を中心に、表現基礎としてのタイポグラフィ・色彩構成・平面構成・立体構成、空間の構造などを視覚的に表現する原理と立体または空間的技法を学ぶ。			
授業の概要 この授業では、タイポグラフィデザインの基本となる活字の成立歴史と生成のメカニズムをアナログ・デジタル両面から学ぶことから始め、デザインにおいて最も重要な要素としての構成原理(統一と変化、バランス、リズム、対称、調和、強調、連続リビティション、グラデーションなど)を理解した上で点・線・面を基本とする色彩・平面・立体構成も試みる。また、光や音や素材が造形する形に大きく関わっている立体・空間構成としての形の簡略化、単純化、構造化等もデザイン表現の大切な技法である。この4つ(文字・平面・立体・空間)のデザイン基礎表現として設定し学習する。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の質や深度、授業の参加態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画(回数ごとの内容等) 本授業は、4クラスが7週単位で行い、前後期4の課題が行われることになる。			
1クラス / 2クラス 第01回 タイポグラフィ スタディー1 タイポグラフィ[文字の歴史と印刷] / 色彩構成1 構成の基本要素と原理 第02回 タイポグラフィ スタディー2 視感覚と視覚調整の重要性 / 色彩構成2 点による色彩構成 第03回 タイポグラフィ スタディー3 視感覚と視覚調整の重要性 / 色彩構成3 線による色彩構成 第04回 タイポグラフィ スタディー4 文字の構造と種類 / 色彩構成4 面による色彩構成 第05回 タイポグラフィ スタディー5 文字の構造と種類 / 色彩構成5 構成原理による平面構成 第06回 タイポグラフィ スタディー6 タイポグラフィ応用課題 / 色彩構成6 構成原理による平面構成 第07回 タイポグラフィ スタディー7 タイポグラフィ応用課題 / 色彩構成7 構成原理による平面構成			
3クラス / 4クラス 第08回 立体構成1 紙による造形基礎、紙の理解 / 空間構成1 平面から空間に(平面分割) 第09回 立体構成2 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成2 パターンとリズム感による空間構成 第10回 立体構成3 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成3 パターンとリズム感による空間構成 第11回 立体構成4 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成4 パターンとリズム感による空間構成 第12回 立体構成5 立方体の構造と応用 / 空間構成5 立方体の構造と空間 第13回 立体構成5 立方体の構造と応用 / 空間構成5 立方体の構造と空間 第14回 立体構成6 立方体の構造と応用 / 空間構成6 立方体の構造と空間 第15回 全体まとめ / 合同授業、作品展示および全体講評会 ※ 授業計画は学科の都合や進行状況によって変更する可能性もある。			
使用教科書 授業進行に応じて、各担当教員が書籍・資料などを適宜提示、配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 各クラスの授業内容は大枠で統一されています。担当する教員の専門分野によって多少の内容が異なっている。よって時間が許す限り他のクラスに積極的に見学する事を進める。 最終的には共同の講評会を行い、お互いの結果物からデザイン表現過程に生かすようにすること。			

[授業科目名] デザイン基礎ⅡA（発想・表現）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 木村 一男・河村 暢夫・小谷 恭二 黄 ロビン・金 昌郁・尹 成濟・ 井垣 理史・富安 由紀子・松井 伸之 山田 厚志・吉田 修作
[単位数] 4	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ デザインにとって豊かな発想力は重要な鍵であり資産である。発想することから表現に着地するためには様々な情報を徹底的に分析して視点を変え伝える形に調理して行く必要が有る。後期は社会や家庭内に視点を移し様々な問題を掘り起こし解決していくことに比重を置き問題解決をするトレーニングを重ねたい。ブレインストーミングやKJ法で仲間の発想を纏めて書き出し、発想したテーマを近いもので纏めて幹になる問題と枝葉のような問題を分類しながら。多種の訓練を試みる。			
授業の概要 後期では、さらに社会生のあるテーマに視点を移してモチベーション（動機付け）を高めグループの力を発揮して授業を進めていく。次第に抽象的なテーマに移行してデザイン要素からデザイン行為の中から発見して問題解決を演習する。			
学生に対する評価の方法 課題への取り組み姿勢と提出作品の質や深度、授業への参画態度などを加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 全体のオリエンテーション 工房を使用する課題もあるため、各課題はクラスごとにローテーションにて実施する。 テーマ1：[ドアハンドルの研究] 自分の手の複製（キャストイング）、デザインクレイを握り形の原型を探る。 握りやすい形態を模索、発泡材を用いた模型制作、図面作成 木材または樹脂を用いて造形、塗装 テーマ2：[段ボール遊具の研究] 幼稚園の見学、アイデアスケッチ ケント紙による模型制作 段ボールを用いて1/1遊具の制作 テーマ3：[食をテーマにしたデザインの研究] 特に興味のあるテーマの抽出 イメージを描き発表 テーマ4：[衣をテーマにしたデザインの研究] 素材の観察からプロモーション 特に興味のあるテーマの抽出 イメージを描き発表 テーマ5：[住をテーマにしたデザインの研究] 特に興味のあるテーマの抽出 イメージを描き発表 第15回 作品展示と総合講習会			
使用教科書 必要に応じてレジメを配布して作業内容を解説する。			
自己学習の内容等アドバイス 教員とは良くコミュニケーションを取ること。			

[授業科目名] デザイン基礎ⅡB（応用）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・黄 ロビン 尹 成濟・伊藤 美知代
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業はデザイン基礎ⅠA(発想・表現)・ⅠB(応用)と並行しデザイン表現におけるスキルを向上させるための授業である。デザイン基礎ⅡB(応用)ではデザインの表現や展開する基礎的なメソッド(技法)を中心に、表現基礎としてのタイポグラフィ・色彩構成・平面構成・立体構成、空間の構造などを視覚的に表現する原理と立体または空間的技法を学ぶ。			
授業の概要 この授業では、タイポグラフィデザインの基本となる活字の成立歴史と生成のメカニズムをアナログ・デジタル両面から学ぶことから始め、デザインにおいて最も重要な要素としての構成原理(統一と変化、バランス、リズム、対称、調和、強調、連続リビティション、グラデーションなど)を理解した上で点・線・面を基本とする色彩・平面・立体構成も試みる。また、光や音や素材が造形する形に大きく関わっている立体・空間構成としての形の簡略化、単純化、構造化等もデザイン表現の大切な技法である。この4つ(文字・平面・立体・空間)のデザイン基礎表現として設定し学習する。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の質や深度、授業の参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画(回数ごとの内容等) 本授業は、4クラスが7週単位で行い、前後期4の課題が行われることになる。 1クラス / 2クラス 第01回 立体構成 1 紙による造形基礎、紙の理解 / 空間構成 1 平面から空間に(平面分割) 第02回 立体構成 2 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成 2 パターンとリズム感による空間構成 第03回 立体構成 3 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成 3 パターンとリズム感による空間構成 第04回 立体構成 4 折る、切る、組み合わせるなどの行為と造形構造 / 空間構成 4 パターンとリズム感による空間構成 第05回 立体構成 5 立方体の構造と応用 / 空間構成 5 立方体の構造と空間 第06回 立体構成 5 立方体の構造と応用 / 空間構成 5 立方体の構造と空間 第07回 立体構成 6 立方体の構造と応用 / 空間構成 6 立方体の構造と空間 3クラス / 4クラス 第08回 タイポグラフィ スタディー1 タイポグラフィ[文字の歴史と印刷] / 色彩構成 1 構成の基本要素と原理 第09回 タイポグラフィ スタディー2 視覚と視覚調整の重要性 / 色彩構成 2 点による色彩構成 第10回 タイポグラフィ スタディー3 視覚と視覚調整の重要性 / 色彩構成 3 線による色彩構成 第11回 タイポグラフィ スタディー4 文字の構造と種類 / 色彩構成 4 面による色彩構成 第12回 タイポグラフィ スタディー5 文字の構造と種類 / 色彩構成 5 構成原理による平面構成 第13回 タイポグラフィ スタディー6 タイポグラフィ応用課題 / 色彩構成 6 構成原理による平面構成 第14回 タイポグラフィ スタディー7 タイポグラフィ応用課題 / 色彩構成 7 構成原理による平面構成 第15回 全体まとめ / 作品展示および全体講評会 ※授業計画は学科の都合や進行状況によって変更する可能性もある。			
使用教科書 授業進行に応じて、各担当教員が書籍・資料などを適宜提示、配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 各クラスの授業内容は大枠で統一されています。担当する教員の専門分野によって多少の内容が異なっている。よって時間が許す限り他のクラスに積極的に見学する事を進める。 最終的には共同の講評会を行い、お互いの結果物からデザイン表現過程に生かすようにすること。			

[授業科目名] デザインプロジェクト I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井垣 理史
[単位数] 2	[開講期] 1 年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業は全学が学年を越えて一つの課題をグループ化したチームで研究を行うものです。 上級生と下級生が教え学ぶことによって学生の自主性や指導能力を向上させることを期待しています。昨今グループで行動や上下関係を敬遠しがちな世相ですが相互理解とデザイン力の向上の一助にと期待しています。			
授業の概要 課題の企画作成、各グループ内の分担決定、立案、制作、発表のための説明パネルや映像作成、総合発表会（口頭発表訓練）を学科を超えて取り組む学習を目指しています。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の質や深度、グループ内での協調性、授業への参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 本学習は2年間で2単位15週をめぐりに開講するものです。 基本的な構想としては他の学科や学年を超えたつながりを深めよりワイドな学習を構想しています。 研究テーマは「学園祭」「大学内のサイン計画」「各種国際コンペティション」「国際ワークショップ」等をテーマにして状況に応じた流動性を持たせた学習を目指します。			
使用教科書 特に指定しない。			
自己学習の内容等アドバイス 新しい試みとして学年や学科を超えたプロジェクトであるので、あらかじめ相手の立場を研究することが肝要です。			

[授業科目名] 図学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 淳子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 図学・図法の習熟は、造形およびデザインの創作における形態表現のために必要な基礎概念である。このことを理解し、演習を通じて作図の手法と表現媒体の特性を把握する。			
授業の概要 前期では、イメージとかたちを結びつける基本の手順から、幾何学を使った平面図形や空間形態の基本的な要素を抽出・照合し、表現しようとするかたちを図に組み立てる。			
学生に対する評価の方法 受講態度、演習課題の目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 01 回 図学の概要 第 02 回 目測：直線、角度など 第 03 回 線の構成 1・2 第 04 回 基本作図 12 A 第 05 回 基本作図 12 B 第 06 回 直延 第 07 回 いろいろな多角形 1：三角形と正五角形 第 08 回 いろいろな多角形 2：正三角形から正十角形 第 09 回 いろいろな多角形 3：連続した正多角形 第 10 回 図面から見取り図 1. アクリル立方体評価 第 11 回 図面から見取り図 2. アクリル立方体評価 第 12 回 副投影面 第 13 回 立方体の切り口 第 14 回 切頭多面体 第 15 回 地球儀について			
使用教科書 授業時に解説・演習プリントを配布			
自己学習の内容等アドバイス 授業中や授業後に不明な点を質問し、納得できる演習物の提出を心がける。			

[授業科目名] 図学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 淳子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 図学・図法の習熟は、造形およびデザインの創作における形態表現のために必要な基礎概念である。このことを理解し、演習を通じて作図の手法と表現媒体の特性を把握する。			
授業の概要 後期では書き表す図面が明解に整えられるよう、視覚的・感覚的表現と論理的秩序づけが相互に関係することを、形態の表現を通じて理解する。さまざまな作図形式の特性と多面性を知り、用途に適合する作図方法の特質を使い分ける。			
学生に対する評価の方法 受講態度、演習課題の目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 地球儀のプレゼンテーション 1 第02回 地球儀のプレゼンテーション 2 第03回 JD（ジェイ・ダブリン）透視図法 1 透視図とは・TOP・ELE・MP 第04回 JD透視図法 2 平行透視図法・45°図法 第05回 JD透視図法 3 30°-60°図法 1・2 第06回 JD透視図法 4 三点透視図法 1・2 第07回 JD透視図法 5 拡大・連続・分割 第08回 JD透視図法 6 分割応用・楕円 1・2 第09回 JD透視図法 7 楕円 3 第10回 JD透視図法 8 GLID 1 第11回 JD透視図法 9 GLID 2 第12回 JD透視図法 10 イニシャル 第13回 曲線 1 コンパス円弧 1・2・3・4 第14回 曲線 2 アルキメデス曲線・つるまき曲線 第15回 曲線 3 サイクロイド曲線・カージオイド・ネフロイド			
使用教科書 授業時に解説・演習プリントを配布			
自己学習の内容等アドバイス 授業中や授業後に不明な点を質問し、納得できる演習物の提出を心がける。			

[授業科目名] デザイン論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男 (一部オムニバス形式とする)
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 広範なデザインの領域の活動やその社会的役割や使命について解説、講義することをテーマとして、総合的なデザイン活動の全容を捉え、これからのデザイン学習の基本を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 前半をデザインの全容について、その役割、分野、展開等について講義し、後半をオムニバス形式でデザインの各分野について担当教員が述べる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度とレポートによる			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 デザインを学ぶに際して 第2回 デザインのめざすもの 第3回 デザインの領域 第4回 デザインの展開 第5回 デザインと生活 第6回 デザインと社会 第7回 デザインと企業 第8回 これからのデザイン 第9回 ヴィジュアル・デザインⅠ 第10回 ヴィジュアル・デザインⅡ 第11回 スペース・デザインⅠ 第12回 スペース・デザインⅡ 第13回 プロダクト・デザインⅠ 第14回 プロダクト・デザインⅡ 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 広いデザイン領域に視野を広げ、全容を捉えるように努めること。			

[授業科目名] デザイン史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 19 世紀の産業革命に始まる近代デザイン運動の動きを、世界と日本の視点から通観することをテーマとして、現代のデザイン活動に連なる大きなデザインの流れとその成果を理解し、これからのデザインを考える基礎を作ることを到達目標とする。			
授業の概要 前半で世界（ヨーロッパを中心に）のデザインについて触れ、後半に明治から始まる日本のデザインについて述べる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度とレポートによる			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 デザイン史を理解する為に 第 2 回 近代デザインのはじまり 第 3 回 ヨーロッパの伝統と革新 第 4 回 アートと産業の結びつき 第 5 回 バウハウスの誕生 第 6 回 ヨーロッパの動き 第 7 回 インダストリアルデザインの確立 第 8 回 ヨーロッパ・アメリカの現代デザイン 第 9 回 アジアの台頭 第 10 回 明治・大正のデザイン 第 11 回 昭和モダニズム 第 12 回 戦後のデザイン 第 13 回 現代のデザイン 第 14 回 21 世紀のデザイン 第 15 回 まとめ			
使用教科書 参考図書「世界デザイン史」「日本デザイン史」（いずれも美術出版社刊）			
自己学習の内容等アドバイス 細かな事象の理解にとどまらず、大きい時代の流れを捉えるように努めること。			

[授業科目名] 生活と色彩		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 萩原 康予
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ PCCS(日本色研配色体系)をベースとするシステムティックな色彩感性の修得。 カラーイメージおよび生理的、心理的影響と配色技法のシナジー効果を生み出す配色スキルの育成。 取得した色彩理論を応用したセルフイメージのプロデュース。			
授業の概要 各テーマに沿った色彩論の講義及び演習			
学生に対する評価の方法 授業態度, 意欲, 演習課題の達成度			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 色彩感度の確認と調整トレーニング (わたしの赤色とあなたの赤色は同じではない?) [Color map, Color chart の作成 1] 第2回 色ってなあに? 色彩理論はなぜ必要? 色が見える仕組みとユニバーサルカラー [Color map, Color chart の作成 2] 第3回 色を見る基準 (PCCS) とカラーイメージ 第4回 ココロに効く色カラダに効く色 (色彩心理) 第5回 配色分析の基本と演習・配色の面積比 第6回 使用する色数と配色 [イッテン色彩論, ビコロール, トリコロール] 第7回 配色技法と色面構成 1 [セパレーション, アクセントカラー, グラデーション] 第8回 配色技法と色面構成 2 [ドミナント, トーンオントーン, トーンイントーン, トーナル] 第9回 配色技法と色面構成 3 [ナチュラル, コンプレックス, カマイユ, フォカマイユ] 第10回 カラーネーム 色の規格(JIS)とマンセルシステムと CIE 第11回 色彩計画事例(環境・インテリア・プロダクト) 第12回 色と光の関係・色と線と質感の関係 第13回 アンダーベース (ナチュラルカラーとモダンカラー) 第14回 カラードレーピング (似合う色と似合わせ色の効果) 第15回 TPO を意識したセルフプロデュース (自己演出法)			
使用教科書 PCCS ハーモニックカラー201-L (日本色研事業)			
自己学習の内容等アドバイス 日常的に触れるデザイン (印刷媒体、印刷物) で学んだ色彩理論を置き換えて考察する。 好きな色彩, 嫌いな色彩, 良く見かける色彩などを PCCS に基づきシステムティックに認識・分析する。			

[授業科目名] 観察と描写		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 河村 暢夫・小川 淳
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザインの世界はオリジナルな形を追求し独創的な造型能力を身につける必要があります。どのように訓練するかは自然の形や秩序を観察し発見するところから始めることが肝要でしょう。また表現能力は反復して描くことが近道です。根気よく眺め描くことに尽きます。描写材料や観察のモチーフは数種類選定して興味を継続できるようにプログラムしています。			
授業の概要 このデッサンの授業においては、実際に自然界に存在するものの描写を通して、まず描くことに慣れ観察し表現していく基礎を習得して行きます。はじめは「立方体」などの単純な形のものからスタートします。次第に「野菜や果物」など、少し複雑なものデッサンを行います。途中「動物」などの動くものを実際に見て描き、前期の最後は着衣人物（バレリーナ）を観察し動きも入れて描写します。			
学生に対する評価の方法 制作された作品の内容や完成度を評価の対象にします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 自由描写（筆と墨汁） 第2回 立方体の描写 第3回 立方体の描写 第4回 自然物（野菜・果物）の描写 第5回 自然物（野菜・果物）の描写 第6回 描写自然物（動物）観察と描写（東山動物園）で実習する。 第7回 スケッチから動物をデザインする。 第8回 人工物の（ペットボトル等生活雑貨から）描写 第9回 人工物の（ペットボトル等生活雑貨）描写 第10回 石膏像（未定） 第11回 石膏像（未定） 第12回 人物観察と描写（友達顔） 第13回 人物観察と描写（着衣：バレリーナ）※鉛筆速描 第14回 人物観察と描写（着衣：バレリーナ）※リキテックス着彩 第15回 総合講評会			
使用教科書 デッサン入門（美術出版社）			
自己学習の内容等アドバイス スケッチはどのような場面でも描くことができます。スケッチブックを何時も持ち歩き、描く習慣を付けてください。鉛筆、ボールペン、クレヨン、等々材料を替えて描くように心がけてください。			

[授業科目名] デザインドローイング		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 河村 暢夫 ほか
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザインの表現に使われる材料は色々な素材がある。鉛筆、色鉛筆、筆、ボールペン、マーカーペン、クレオン、パステル、水彩絵の具、リキテックス等々、これらを使うには反復練習が大切です。観察と表現をしながら表現素材に慣れていくように学習します。			
授業の概要 前期で身につけた観察と描写力をファンデーションとして、さらに表現素材の使い方を学びイメージーションを高める力を学習します。			
学生に対する評価の方法 授業態度や意欲的な取り組みをみて作品とともに総合評価を行います。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	オリエンテーションと筆による描写	点線面と顔	
第2回	水性ボールペンによる表現	食器	
第3回	水性フェルトペンによる表現	草花	
第4回	黒のボールペンによる表現	草花	
第5回	色鉛筆（黒を中心に）	草花	
第6回	マーカーによる表現	幾何形態	
第7回	マーカーによる表現	幾何形態	
第8回	マーカーによる表現	工具	
第9回	パステルによる表現	工具	
第10回	パステルによる表現	自動車	
第11回	パステルによる表現	電化製品	
第12回	リキテックスによる表現	生物	
第13回	リキテックスによる表現	人物	
第14回	リキテックスによる表現	風景	
第15回	総合講評		
使用教科書 デザインドローイング			
自己学習の内容等アドバイス 授業で学んだ表現方法を各自で反復練習を行うことが必要です。また、他の授業の課題にも応用してください。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デジタルデザイン基礎 I		演習	柴田 知司・平尾 正俊
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1 年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
1940 年代に実用デジタルコンピュータが登場して以来、1980 年代以降の作業の電子化・一元化を実現した DTP [Desktop Publishing] 技術の発展を経て、今日におけるデジタルデザイン表現は進化とともに、よりパーソナル化されてきました。本授業は、後期に実施する「デジタルデザイン基礎II」と連携した複合授業になります。授業の到達目標としては、今後のデジタルメディアの推移に柔軟かつ適切な対応ができるよう、コンピュータリテラシーを導入口とし、二次元コンピュータグラフィックスを用いた造形要素の構成、観察とメッセージの表現を実施、最終的には様々なメディアを活用したデザインングの修得を目指して演習を展開します。			
授業の概要			
グラフィックソフトウェア (Adobe Illustrator : ドローイング/Adobe Photoshop : フォトレタッチ) の基本的な操作・制作技術を修得します。また、実際に制作を進める上で関連してくる、入力 (デバイス・スキャナ・カメラ等) や出力 (ディスプレイ・プリンタ・プロッタ等) に関する知識も養い、まとめとして文字・画像・音・動画といった複数のマルチメディア要素の扱いを理解し、オーサリング (統合・編集) 作業を実施しながら、新規性・独自性に富んだ発想をデザイン表現に至らせるための具体的なプロセスや手段を学びます。			
学生に対する評価の方法			
授業態度・修得度・作品評価 ※操作演習を中心に進行するため、欠席や遅刻は控えるようにして下さい。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第 01 回 全体オリエンテーション：席決め/自己紹介/リテラシー調査/設備利用手引/授業概要説明			
第 01 回 コンピュータリテラシー-01：背景/ソフトウェア (Mac OSX/Adobe Creative Suite)			
第 02 回 コンピュータリテラシー-02：ハードウェア/デバイス (Macintosh/入出力：スキャナ+プリンタ)			
第 01 回 コンピュータリテラシー-03：メディア/ネットワーク (インターフェイス/記録メディア/サーバ)			
第 03 回 Adobe Illustrator オペレーション 01[導入]：Illustrator について/作業環境・基本操作			
第 01 回 Adobe Illustrator オペレーション 02[基礎]：オブジェクト作成・編集			
第 04 回 Adobe Illustrator オペレーション 03[基礎]：カラー設定			
第 01 回 Adobe Illustrator オペレーション 04[基礎]：画像配置・編集			
第 05 回 Adobe Illustrator オペレーション 05[基礎]：フィルタ・効果			
第 01 回 Adobe Illustrator オペレーション 06[基礎]：文字の操作			
第 06 回 課題オリエンテーション[説明]：「造形要素の構成：ドローイング」(概要説明/作品紹介/進行法)			
第 01 回 デバイスレクチャー-01：イメージスキャナの操作 (原画スキャニング方法/解像度/ファイル形式)			
第 07 回 デバイスレクチャー-02：イメージスキャナの入力 (素材収集→画像データの読み込みと扱い)			
第 01 回 課題プロダクション[制作]：「造形要素の構成：ドローイング」(制作作業/進行状況チェック)			
第 08 回 デバイスレクチャー-03：プリントアウト (インクジェットプリンタ：画材用紙)			
第 01 回 課題プレゼンテーション[発表]：「造形要素の構成：ドローイング」(テーマ/コンセプト/手法)			
第 09 回 Adobe Photoshop オペレーション 01[導入]：Photoshop について/作業環境と基本操作			
第 01 回 Adobe Photoshop オペレーション 02[基礎]：カラー補正			
第 10 回 Adobe Photoshop オペレーション 03[基礎]：レタッチ・マスク			
第 01 回 Adobe Photoshop オペレーション 04[基礎]：描画モード・合成			
第 11 回 Adobe Photoshop オペレーション 05[基礎]：フィルタ加工			
第 01 回 Adobe Photoshop オペレーション 06[基礎]：作画・アートワーク・文字の操作			
第 12 回 課題オリエンテーション[説明]：「観察の表現：フォトレタッチ」(概要説明/作品紹介/進行法)			
第 01 回 デバイスレクチャー-04：デジタル一眼レフカメラの操作 (写真撮影方法/画素数/ファイル形式)			
第 13 回 デバイスレクチャー-05：デジタル一眼レフカメラの入力 (素材収集→写真データの読み込みと扱い)			
第 01 回 課題プロダクション 01[制作]：「観察の表現：フォトレタッチ」(制作作業/進行状況チェック)			
第 14 回 課題プロダクション 02[制作]：「観察の表現：フォトレタッチ」(制作作業/進行状況チェック)			
第 15 回 デバイスレクチャー-06：プリントアウト (レーザープリンタ：特殊用紙)			
第 01 回 課題プレゼンテーション[発表]：「観察の表現：フォトレタッチ」(テーマ/コンセプト/手法)			
使用教科書			
演習プリント・参考文献・作品例は授業内において適宜配付・提示・紹介します。 ※第 02 週目以降はプリントを挟む用の A4 ファイルとデータ保存用の USB フラッシュメモリを持参下さい。			
自己学習の内容等アドバイス			
操作演習に関しては授業内容をよく理解し、修得に至るまで繰り返し復習を実施するようにして下さい。 課題制作に関しては PC 上で作業を完結させるのではなく、アナログ的な手法を取り入れる工夫も試みて下さい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デジタルデザイン基礎Ⅱ		演習	柴田 知司・平尾 正俊
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1 年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 1940 年代に実用デジタルコンピュータが登場して以来、1980 年代以降の作業の電子化・一元化を実現した DTP [Desktop Publishing] 技術の発展を経て、今日におけるデジタルデザイン表現は進化とともに、よりパーソナル化されてきました。本授業は、前期に実施した「デジタルデザイン基礎Ⅰ」と連携した複合授業になります。今後のデジタルメディアの推移に柔軟かつ適切な対応ができるよう、コンピュータリテラシーを導入口とし、授業の到達目標としては、二次元コンピュータグラフィックスを用いた造形要素の構成、観察とメッセージの表現を実施、最終的には様々なメディアを活用したデザインングの修得を目指して演習を展開します。			
授業の概要 グラフィックソフトウェア (Adobe Illustrator : ドローイング/Adobe Photoshop : フォトレタッチ) の基本的な操作・制作技術を修得します。また、実際に制作を進める上で関連してくる、入力 (デバイス・スキャナ・カメラ等) や出力 (ディスプレイ・プリンタ・プロッタ等) に関する知識も養い、まとめとして文字・画像・音・動画といった複数のマルチメディア要素の扱いを理解し、オーサリング (統合・編集) 作業を実施しながら、新規性・独自性に富んだ発想をデザイン表現に至らせるための具体的なプロセスや手段を学びます。			
学生に対する評価の方法 授業態度・修得度・作品評価 ※操作演習を中心に進行するため、欠席や遅刻は控えるようにして下さい。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 01 回 全体オリエンテーション：前期授業からの流れ/アナログとデジタル/授業概要説明 第 01 回 メディアリテラシー-01 : DTP [Desktop Publishing] (デジタルデザインのワークフロー) 第 02 回 Adobe Illustrator オペレーション 01[応用] : 文字の組版 第 01 回 Adobe Illustrator オペレーション 02[応用] : グラフの作成 第 03 回 Adobe Illustrator オペレーション 03[応用] : 高度な機能 第 01 回 Adobe Illustrator オペレーション 04[応用] : 印刷と出力 第 04 回 Adobe Photoshop オペレーション 01[応用] : カラーマネジメント 第 01 回 Adobe Photoshop オペレーション 02[応用] : 高度な機能 第 05 回 Adobe Photoshop オペレーション 03[応用] : Web・アニメーション 第 01 回 Adobe Photoshop オペレーション 04[応用] : 印刷と出力 第 06 回 メディアリテラシー-02 : マルチメディア (文字・画像・音・動画の統合と編集/Apple iLife) 第 01 回 課題オリエンテーション[説明] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (概要説明/作品紹介/進行法) 第 07 回 デバイスレクチャー-01 : ビデオカメラの操作 (動画撮影方法/メディアの種類/ファイル形式) 第 01 回 デバイスレクチャー-02 : ビデオカメラの入力 (動画データの読み込みと扱い) 第 08 回 Apple iLife オペレーション 01[フォト] : Apple iPhoto (読み込み・アーカイブ・加工・書き出し) 第 01 回 Apple iLife オペレーション 02[ミュージック] : Apple iTunes (読み込み・アーカイブ・書き出し) 第 09 回 Apple iLife オペレーション 03[サウンド] : Apple GarageBand (読み込み・作曲・編集) 第 01 回 Apple iLife オペレーション 04[サウンド] : Apple GarageBand (マッチング・効果・書き出し) 第 10 回 Apple iLife オペレーション 05[ムービー] : Apple iMovie (読み込み・プロジェクト+クリップ操作) 第 01 回 Apple iLife オペレーション 06[ムービー] : Apple iMovie (編集・効果・オーディオ・書き出し) 第 11 回 Apple iLife オペレーション 07[コンテンツ] : Apple iDVD (読み込み・メニュー・コンテンツ) 第 01 回 Apple iLife オペレーション 08[コンテンツ] : Apple iDVD (カスタマイズ・マッピング・書き出し) 第 12 回 課題プロダクション 01[制作] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (制作作業/進行状況チェック) 第 13 回 課題プロダクション 02[制作] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (制作作業/進行状況チェック) 第 14 回 課題プロダクション 03[制作] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (制作作業/進行状況チェック) 第 01 回 課題プロダクション 04[制作] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (制作作業/プレゼンツール作成) 第 15 回 デバイスレクチャー-03 : パッケージング/プリントアウト (I+L プリンタ : 画材用紙/DVD-R) 第 01 回 課題プレゼンテーション[発表] : 「メディアデザイン : オーサリング」 (テーマ/コンセプト/手法)			
使用教科書 演習プリント・参考文献・作品例は授業内において適宜配付・提示・紹介します。 ※前期授業と同様、プリントを挟む用の A4 ファイルとデータ保存用の USB フラッシュメモリを持参下さい。			
自己学習の内容等アドバイス 操作演習に関しては授業内容をよく理解し、修得に至るまで繰り返し復習を実施するようにして下さい。 課題制作に関しては PC 上で作業を完結させるのではなく、アナログ的な手法を取り入れる工夫も試みて下さい。			

[授業科目名] 絵画		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小川 淳
[単位数] 2	[開講期] 1 年次 (集中)	[必修・選択] 選択	備考 教職必修科目
授業の到達目標及びテーマ 西洋絵画を中心にして、美術の流れを一望し、大雑把な美術史の流れを掴むとともに、その中から自分が興味を持てるスタイルや画家の絵を一枚選び「模写」をすることで、観察力や表現技術を高め、それぞれの画家やその絵が描かれた理由や時代背景への理解をも深める。			
授業の概要 西洋絵画を中心に、レオナルド・ダ・ヴィンチなどのルネッサンス美術から、バロック、ロココ、ロマン派からアングルなどの新古典派、モネやゴッホの印象派、ピカソのキュビズムやマチスのフォービズム、カンディンスキーやモンドリアンらの抽象、ダリやキリコなどのシュールリアリズム、A. ウォーホルらアメリカンポップからフランク・ステラらのミニマリズム、A・ワイエスなどの超写実的スーパーリアリズムやラッセンなどのマリンアート、さらには日本のアニメ絵画にいたるまで、歴史上の絵画の流れをざっと概観し、その中からひとつの流派、画家の作品を選び、模写し発表する。(日本画など、上記に該当しない絵画も可) 画材はアクリル/水彩で制作する。			
学生に対する評価の方法 それぞれが選んだ絵画の流派のスタイルや特徴への理解と、描かれた作品の技術面などの表現力を評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1日 ガイダンスとスライド上映 レオナルド・ダ・ヴィンチから村上隆まで 模写作品決定 簡単な技法説明 第2日 実習 B2 パネルまたは F10 号程度のキャンバスに下絵のトレース 下塗り→描写 第3日 実習 描写を進める 制作計画チェック 第4日 実習 描写を進める (随時技法相談) 第5日 実習 描写を進める 第6日 講評 描写を進める 午後作品発表[作品を選んだ理由や描いてみた感想を話してください]			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 集中講義が始まってから、作品を決めるのでは制作が間に合わないので、前期の間に事前に描く絵を決めて初日にはコピーを持ってきて下さい。(6月末くらいに一度チェックします。) 必ず自分が好きな絵を選んでください。無い場合は前期の間に探して下さい。どうしても決まらない場合はこちらで指定します。			

[授業科目名] 工房実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫・平光 無門・金 昌郁 尹 成濟・井垣 理史・柴田 知司
[単位数] 2	[開講期] 1 年次集中	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 工房はデザイン学科においてはデザイン課題のプレゼンテーション用の出力や模型を作る大切な場所である。 房内には大変危険をとまなう設備もあり、学生は一連の工房研修を受けて表現力を向上させ工具や設備を安心して制作を続けたい。			
授業の概要 工房の諸設備は高速の回転を伴う機械類が備えてある。それぞれ作業目的があり適切な訓練が必要である。また特殊なデジタル機器や写真撮影技術のレクチャーも行う。 工房の設備を大きく7つに分類し、各講座を15名程度のグループにわけて順次開講する。			
学生に対する評価の方法 工房実習の資格ライセンスを与える。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション：工房の概要、遵守事項など 第2回～下記7 講座を全て履修する。 講座1<木工A>（4 コマ） 服装や作業環境などの安全確認について 手工具：のこぎり、のみ、かんな、きり、玄のうなど 圧縮具：クランプ、はたがね、バイスなど 墨付け：さしがね、スコヤ、コンベックス、ノギスなど 電動工具の紹介と加工実習：電動丸のこ、充電ドリルドライバー、エアータッカーなど 講座2<木工B>（4 コマ） 服装や作業環境などの安全確認について 動力電源と集塵機について 木工機械：ボール盤、帯のこ・糸のこ盤、角のみ盤、ベルトサンダーの説明と加工実習 講座3<木工C>（4 コマ） 服装や作業環境などの安全確認について 未熟者の使用禁止、危険作業の事例など 危険度の高い木工機械：丸のこ盤、かんな盤、ルーター、旋盤、大型バンドソーの説明と一部加工実習 講座4<金工>（4 コマ） 金属は木材と比べ扱いにくい印象があるが、加工の自由度はむしろ木材よりも高く、すぐれた造形素材と言える。この講座では金工室にある諸設備の正しい使い方を学びながら、金属ならではの加工技術を紹介し、一部を体験する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 金属板の切断、曲げ加工：プラズマ溶断機、旋盤など ・ 板材と棒材の溶接：アーク溶接機 ・ パイプの曲げ加工：パイプベンダー ・ ねじ切り加工：タップ&ダイス 			

講座5<デジタル> (4 コマ)

コンピュータで作成したデータを様々な形式で出力・加工するために、下記の特殊機器に関する操作実習を行います。

- ・高品位フラットベッドスキャナ
A3サイズの原面を高解像度で読み込み、B1サイズに引き伸ばす事ができるスキャナ
- ・大型インクジェットプリンタ
B0+サイズの出力まで対応し、様々な種類の長尺ロール用紙に印刷ができるプリンタ
- ・カッティングプロッタ
ベクターデータで作成した図形や文字をシルエットで切り抜いてシールにできるプロッタ
- ・厚物ダイレクトプリンタ
アクリル、ガラス、布といった3cm程度までの厚みのある素材に印刷ができるプリンタ
- ・レーザーカッター
アクリル、ダンボール、金属、石材といった素材をレーザー光によって細やかに加工できるプロッタ

講座6<写真> (4 コマ)

1コマ

- ・基本的なカメラ機材について
- ・カメラの種類、フィルムの種類、フィルムカメラとデジタルカメラの仕組み
- ・レンズの仕組み
- ・露出、シャッター、感度について

2コマ

- ・レンズの仕組みと被写界深度の効果
- ・スタジオ照明機材、ライトの効果(daylight、tungsten)、フラッシュ撮影
- ・露出、シャッター、感度の設定
- ・オートメーターの使い方

3コマ

- ・モノ撮りの基本撮影体験 (複写を含む)

4コマ

- ・人物の基本撮影体験 (複写を含む)

講座7<クレイ・塗装・樹脂>

デザインクレイ：45度で軟らかくなり自動車からブローチまでの造形が可能です。

塗 装：塗装室には塗装ブースがあり空気と水の循環で塗料の粉末を除去します。

赤外線乾燥ランプがあり、乾燥棚に塗装後収納できます。

スプレーガン：塗料を筆で塗ると同じようにスプレーガンで塗料を噴霧して

表面に塗料を均等に塗ることができます。使用後はシンナーで良く洗う。

塗 料：ラッカー系・アクリル系・オイル系・ウレタン系等の塗料があります。

それぞれ異なった溶剤があるので、間違っても使わないように注意をすること。

樹 脂：数種類の造形材料があります。型で量産をすることもできます。

FRP=強化樹脂、ガラス繊維やカーボン繊維をポリエステル樹脂で固めます。

ヨット・風呂桶・ヘルメット等

シリコンでの型取り=人形や怪獣の型とりによく使われます。

多少のオーバーハングでも強制的に抜くことができます。

その他の造形材料=発砲樹脂 (低発砲から高発砲材があり硬軟があります。)

ウレタン樹脂、硬化時間が速い。透明度の高いポリエステル樹脂

使用教科書

必要に応じて随時紹介する

自己学習の内容等アドバイス

危険を伴う作業であるために、指導者の助言を守ること。整理整頓に心がけること。服装は作業服を着用すること。靴は運動靴か安全靴を着用すること。

[授業科目名] 海外デザイン研修		[授業方法] 演習	[授業担当者名] デザイン学科教員
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザインを学ぶ上で海外の情報や外国社会との交流は不可欠である。デザインの基礎でもあるヨーロッパの歴史的な都市構造・建築様式・装飾様式、またアメリカにおける最新の工業デザインや映像・アミューズメントなどの現代の造形文化を、直接見て触れて体験することで、よりグローバルな視野を持つことができる。			
授業の概要 本授業は、実際に海外に出かける研修旅行や留学を目的とした授業であり、その事前の調査・計画や帰国後のレポート作成なども含めたものである。			
学生に対する評価の方法 事前リサーチのレポート、研修レポート、研修活動などを総合的に判断し評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 海外デザイン研修の概要説明、オリエンテーション 第2回 研修の準備についての説明 第3回 日本、アジア、ヨーロッパ、北米のデザイン環境調査 / ディスカッション 第4回 日本、アジア、ヨーロッパ、北米のデザイン環境調査 / ディスカッション 第5回 日本、アジア、ヨーロッパ、北米のデザイン環境調査 / ディスカッション 第6回 研修先についての説明 / 研修の準備 第7回 研修先についての説明 / 研修の準備 第8回 現地研修(研修先での調査・見聞・スケッチ・写真撮影など) 第9回 現地研修(研修先での調査・見聞・スケッチ・写真撮影など) 第10回 現地研修(研修先での調査・見聞・スケッチ・写真撮影など) 第11回 現地研修(研修先での調査・見聞・スケッチ・写真撮影など) 第12回 現地研修(研修先での調査・見聞・スケッチ・写真撮影など) 第13回 研修の資料のまとめ 第14回 研修のまとめ内容と発表 第15回 全体まとめおよびレポート提出			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 記録をきちんと行うこと。 資料などをまとめるためのファイルは必ず持参すること。			

[授業科目名] ベーシックデザインⅢ a		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 富安 由紀子・伊藤 美知代 松井 伸之・黄 久美子・黄 ロビン 吉田 修作・金 昌郁・平尾 正俊
[単位数] 3	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 各自に適した表現方法や表現素材が見つければ、自由テーマによる作品制作に転換する。おもに個別指導にて学生個々の方向性を模索する。造形表現も可能性を知ること到達目標とする。			
授業の概要 ベーシックデザインⅢa においては、デザインのクリエイティブな面に重点をおいた作品制作をおこなう。造形力や表現力を高めるために課題テーマを選択して、作品制作を繰り返しておこなう。			
学生に対する評価の方法 受講態度と作品審査			
授業計画（回数ごとの内容等） ・インテリア課題 1グループ：第1～3回、2グループ：第4～6回、3グループ：第7～9回、4グループ：第10～12回 ・グラフィック課題1 1グループ：第10～12回、2グループ：第1～3回、3グループ：第4～6回、4グループ：第7～9回 ・グラフィック課題2 1グループ：第7～9回、2グループ：第10～12回、3グループ：第1～3回、4グループ：第4～6回 ・プロダクト課題 1グループ：第4～6回、2グループ：第7～9回、3グループ：第10～12回、4グループ：第1～3回 第13・14・15回 講評会、まとめと作品のファイリング			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 後期の分野選択をふまえて関心ある分野の基礎をじゅうぶんに理解しておくこと。			

[授業科目名] ベーシックデザインⅢb		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 前田 純治・小谷 恭二・新家 春二 尹 成齊・吉田 修作・河村 暢夫 平光 無門・小島 篤
[単位数] 3	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 4クラスが、時期をずらしながら4つのデザイン計画課題に取り組み、後期からの分野選択にそなえることを目標とする。			
授業の概要 ベーシックデザインⅢbにおいては、グラフィックデザイン、インテリアデザイン、プロダクトデザインのプロセスを学ぶ。また印刷物、建築物、工業製品などの幅広い材料に関する知識と使用を想定した機能についても学ぶことにデザイナーに必要な計画力を身につける。作品の提出時には講評会をおこなう。			
学生に対する評価の方法 日常の授業への参画態度や受講態度と、提出レポートや制作作品の内容および表現方法で採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） ・インテリア課題 住宅プラン、平面図、透視図、模型の制作 1グループ：第1～3回、2グループ：第4～6回、3グループ：第7～9回、4グループ：第10～12回 ・グラフィック課題1 1グループ：第10～12回、2グループ：第1～3回、3グループ：第4～6回、4グループ：第7～9回 ・グラフィック課題2 1グループ：第7～9回、2グループ：第10～12回、3グループ：第1～3回、4グループ：第4～6回 ・プロダクト課題 ペーパーウエイト、ペントレイ 1グループ：第4～6回、2グループ：第7～9回、3グループ：第10～12回、4グループ：第1～3回 第13・14・15回 講評会、まとめと作品のファイリング			
使用教科書 「建築デザインの製図法から簡単な設計まで」 彰国社			
自己学習の内容等アドバイス 後期の分野選択をふまえて関心ある分野の基礎をじゅうぶんに理解しておくこと。			

[授業科目名] ベーシックデザインIV a (立体空間分野)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平尾 正俊・金 昌郁 平光 無門・小島 篤
[単位数] 6	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 3年次の専門コース選択に向けて、各コースに必要な基礎的能力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 ベーシックデザインIVa では、立体空間デザイン分野のなかでも、空間計画デザインに必要な知識や技術を学ぶ授業を、複数担当者による形式でおこなう。			
学生に対する評価の方法 受講態度と作品審査			
授業計画（回数ごとの内容等） 空間計画系（平光、小島） 1～5回 模型表現：前期に計画した住宅の模型制作 30時間 縮尺1/50、モデルボード 6～9回 パース・スケッチ表現：前期に計画した住宅の内外観のパース・スケッチ 24時間 透視図法、パースガイド、模型を見ながらなどの方法で作図 トレペにインキングによる線描き、裏面よりマーカーによる彩色 10～15回 外構デザイン：サステナブルをテーマに住宅のガーデニングデザインをする。36時間 講義：「2×4構法、木造軸組工法、丸太組構法の比較」 「外構材料」「地域性植栽」「庭の歴史」 資料をもとに「積算」を行い、費用を把握する。 工程表をつくり、工事日程を管理する。 アイデアスケッチ、平面計画 模型制作、縮尺1/50、モデルボード、植栽模型材料 パネル制作、アクソノメトリックパース表現 プレゼンテーション クリエイト系（金、平尾） 1～15回 遊具玩具のデザイン			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の中でも「住宅建築」等の建築雑誌を紹介するが、日常においてもインテリアや建築関係の雑誌などを見て、関心を持つようにしておくこと。			

[授業科目名] ベーシックデザインIVb (立体空間分野)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫・黄 ロビン 吉田 修作
[単位数] 6	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ ベーシックデザインIVb では、3年次の専門コース選択に向けて各コースに必要な基礎的能力を身につけることを到達目標としている。立体空間デザイン分野のなかでプロダクトデザインに必要な知識や技術を学び立体計画系の授業を複数担当者による形式で授業を行う。 第一課題：材料収集 第二課題：食器をつくる。陶磁を素材としてコーヒーカップ・大小皿・汁椀・を作成する。鋳込み成形 第三課題：スツール（小椅子）の研究/段ボールを素材にして座れる椅子を制作する。			
授業の概要 15週で3課題を実習する。プロダクトデザインに必要な基礎的な素材の知識や基本的な加工方法をモノ作りを体験しながら学べるようにプログラムを組んでいる。第三課題においては素材と構造の関係を会得する。			
学生に対する評価の方法 日常の授業への参画態度や授業の理解度を見ながら、提出作品の内容および表現方法で総合評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 第一課題：[材料研究] 第2回 材料研究 日常生活の中で見つけた素材を収集する。100種類 第3回 材料研究 分類して10x10段の棚（自作）にプレゼンテーションする。 第4回 研究成果の発表 第5回 第2課題 [自分の食器を作る] 陶磁 第6回 調査からデザインへ 原型を作る 第7回 原型制作 第8回 泥漿（でいしょう）鋳込み 第9回 乾燥と焼成 第10回 第3課題[段ボールスツール]：自分が座れる椅子の制作 第11回 既成のスツールを調べる/マッピング制作/アイデアスケッチ 第12回 構造研究 1/10 模型制作/ケント氏 第13回 模型制作/製図をする。1mm ミラコーワ 第14回 1/1 段ボール制作開始 第15回 まとめと講評：段ボール仕上げと講評会/ポートフォリオ提出			
使用教科書 その都度解説用のレジュメを用意している。特に教科書は定めない。			
自己学習の内容等アドバイス この課題は材料や素材の発見からもの作りのプロセスを学び最終的には構造の基本を学習します。常に身の周りの生活用品を観察して素材や作り方を調べておくように心がけてください。			

[授業科目名] ベーシックデザインⅣa (Ⅴ.コミュニケーション分野)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 尹 成齊・松井 伸之 新家 春二・黄 久美子
[単位数] 6	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 3年次の専門コース選択に向けて、各コースに必要な基礎的能力を身につけることを到達目標とする。 4つのテーマに分けて、図像と文字表現の関係を編集(構成)された印刷物を前提にその関係の可能性を探る。 この授業では様々な視覚要素の写真、ダイアグラム、イラストレーション、色彩、文字などによる情報の伝達とビジュアル効果を必要に応じてどう構造化するのかを学ぶ。 こういった基本的な考えは3、4年次の専門課程になっても変わらないが、ここでは、ビジュアルコミュニケーションデザインの基本原理を実践的に学ぶことを目的としているため、前提となるテーマやメディアは各授業内で設定された限定されたものとなる。			
授業の概要 ベーシックデザインⅣaでは、ビジュアルコミュニケーションデザイン分野のなかでも、造形的要素として写真、ダイアグラム、イラストレーション、色彩、文字を中心に複数担当者による形式で作品制作をおこなう。すべての授業において試みる内容としては、視覚的要素の観察と発見といったフィールドワーク・視覚的編集、構造化のデザインを理解すること・表現して行くメディアとは何かを知る、考える・デザインフォーマットを考えてかたちを表すことなどのデザインプロセス的思考がよりよい成果物をあげるためのポイントになる。			
学生に対する評価の方法 展開するための理解度や応用、応用プロセスの展開力、最終プレゼンテーションでの成果物と作品を総合して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 合同授業、全体オリエンテーション study1. ビジュアル基礎表現の開発ためのプログラム 第02回 ビジュアルコミュニケーションデザイン基礎課題1(各授業の視覚要素の基礎表現) 第03回 ビジュアルコミュニケーションデザイン基礎課題2(各授業の視覚要素の基礎表現) 第04回 ビジュアルコミュニケーションデザイン基礎課題3(各授業の視覚要素の基礎表現)、各クラスのstudy2. 課題説明 study2. ビジュアルコミュニケーションデザイン基礎の応用プログラム 第05回 テーマの検討1. 各自テーマの考察と提案、発表(資料収集) 第06回 テーマの検討2. 各自のテーマのプレゼンテーション(全体計画提示) 第07回 表現の検討・計画1 表現の方向性の検討および発表 第08回 表現の検討・計画1 表現方法の検討 / 各自提案 第09回 テーマによる制作/個別指導 第10回 テーマによる制作/個別指導 第11回 クラス内のテーマと表現方法のディスカッション 第12回 テーマによる制作/個別指導 第13回 テーマによる制作/個別指導 第14回 テーマによる制作/まとめ 第15回 合同授業、作品展示および全体講評会 ※授業計画は各クラスの課題が異なるため進行状況によって変更する可能性もある。			
使用教科書 授業進行に応じて、各担当教員が書籍・資料などを適宜提示、配付する。			
自己学習の内容等アドバイス クラスメイトでプロセスを共有するために各自フォーマットにテーマの考察から表現方法の展開までの内容を記録して回覧することを進める。			

[授業科目名] ベーシックデザインIV b (V.コミュニケーション分野)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 富安 由紀子・伊藤 美知代 小谷 恭二・前田 純治
[単位数] 6	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 3年次の専門コース選択に向けて、ビジュアルコミュニケーションデザインに必要な基礎的能力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 ベーシックデザインIVa では、ビジュアルコミュニケーションデザイン分野のなかでも、専門のデザインに必要な知識や技術を学ぶ授業を、複数担当者による形式でおこなう。			
学生に対する評価の方法 日常の受講態度と、制作作品の内容および表現方法で採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1～4回 ビジュアルコミュニケーション基礎課題1、 5～8回 ビジュアルコミュニケーション基礎課題2、 9～12回 ビジュアルコミュニケーション基礎課題3 13～15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス それぞれの課題に合わせて資料収集し、次週の授業に備える。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デザインとコーディネイト I		演習	平光 無門・金 昌郁
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 住空間を提案する際の、デザインとコーディネイトの表現方法を知ることの到達目標とする。前期は主にコーディネイトボードについて知る。			
授業の概要 現在の住空間に対する仕事として必要なものは何かと追求する時、デザインとコーディネイトをいかに上手く組み合わせ、クライアントに対し満足感を与える事が大変重要な事と思われる。住空間に対し現在市場に流通しているインテリアエレメントを使用してコーディネイト。尚かつオリジナルなインテリア商品をデザインし、それらを組み合わせることで快適な空間を作る為の知識と技術を学習する。			
学生に対する評価の方法 1, 授業態度 2, レポート 3, 課題			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 インテリア設計の流れ。インテリアコーディネートの定義、デザインについて。 作図トレーニング (鉛筆、定規、三角定規、三角スケール、方眼用紙B4) 第2回 インテリアの歴史。インテリアスタイルの分類及び決定方法について。 模型を用いて三面図を描く (鉛筆、定規、三角定規、三角スケール、方眼用紙B4) 第3回 生活行為の動線計画。インテリアの人間工学について。 模型を用いて三面図を描く (鉛筆、定規、三角定規、三角スケール、方眼用紙B4) 第4回 インテリアエレメントの研究。内装材。インテリアファブリック、ウインドウトリートメントについて。 テレビボード三面図トレース (鉛筆、定規、三角定規、三角スケール、方眼用紙B4) 第5回 インテリアショールーム見学。サンゲツ、松下電工 他 第6回 照明計画。照明器具の選び方。 テレビボード三面図トレース (鉛筆、定規、三角定規、三角スケール、方眼用紙B4) 第7回 ファニチャーデザイン (基本的な寸法、デザイン、レイアウト) について。 フリーラックのスケッチデザイン (定規一式、コンパス、ケント紙) 第8回 静岡家具展示会見学。家具工場見学 (マルカ) 他 第9回 1LDK 平面図トレース。 フリーラックのスケッチデザイン (定規一式、コンパス、ケント紙) 第10回 カラースキム (カラースキムボード) フリーラックのスケッチデザイン (カッター、定規一式、筆記用具一式) 第11回 照明プラン (方眼ボード) (カッター、定規一式、筆記用具一式) 第12回 ウインドウトリートメント (カラースキムボード) (カッター、定規一式、筆記用具一式) 第13回 ファニチャープラン (方眼ボード) フリーラックの着彩 (ケント紙、マーカー、色鉛筆 他) 第14回 フリーラックの三面図及び着彩 (ケント紙、マーカー、色鉛筆 他) 第15回 1LDK コーディネイトボードのプレゼンテーション			
使用教科書 「住まいとインテリアデザイン」 彰国社			
自己学習の内容等アドバイス 日常生活の中で、心地良い住空間を体験したときに、家具や空間の寸法を確認するように。			

[授業科目名] デザインとコーディネートⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平光 無門・金 昌郁
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 住空間を提案する際の、デザインとコーディネートの表現方法を知ることが到達目標とする。前期は主にコンセプト作成とレンダリングについて知る。			
授業の概要 前期終了時に夏休み研究課題として店舗デザインの企画書作成を指導。1,2週にて企画書を作成、プレゼンを行う。3週目よりカジュアル家具のデザインを主にコンセプト作成からレンダリング迄を指導する。			
学生に対する評価の方法 1, 授業態度 2, レポート 3, 課題			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1,2回 店舗デザイン企画書作成 第3～5回 マーカー、レンダリング演習（マーカー） 第6回 インテリアショップ見学 第7回 カジュアルユニット家具コンセプト作り 第8,9回 カジュアルユニットデザインラフスケッチ30点 第10回 カジュアルユニット家具図面 第11回 カジュアルユニット家具レンダリング 第12回 カジュアルユニット家具プレゼンボード作成 第13回 ソファードesignスケッチ 第14回 ソファードesign図面 第15回 ソファードesignレンダリング			
使用教科書 「住まいとインテリアデザイン」 彰国社			
自己学習の内容等アドバイス 日常生活の中で、心地良い住空間を体験したときに、家具や空間の寸法を確認するように。			

[授業科目名] 作品展企画演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平光 無門
[単位数] 2	[開講期] 2年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 作品展の企画運営の流れを知ること、広報物のデザイン制作を到達目標とする。			
授業の概要 学外における作品展を企画し、基礎的なデザイン実技修得の成果を発表する。出展作品は2年生後期のベーシックデザインⅣの実習の中で、各自のデザインテーマ、もしくはいくつかのテーマの中から選択したテーマに沿って制作する。作品の制作のほかにも、会場の確保、展示計画、搬入・搬出の方法、広報などの企画と実践を通して作品展の運営方法を学ぶとともに、学外でのプレゼンテーションと社会の客観的な評価を知る機会とする。 また他科目（デザインプロジェクト、デザイン研修など）と連携し、学年・コースを横断したデザインワークを行う機会を設ける。			
学生に対する評価の方法 ミーティングなどの授業への参画態度や受講態度と、提出レポートなどで採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 進級制作展の全体企画 作品の数量、内容を整理し、日程や予算の計画、会場予約をおこなう 2回 広報・印刷物の企画 フライヤー、案内状などの印刷物の計画と発注 3回 展示会場の計画 会場内のレイアウトの計画 4回 搬入・搬出・運営について 搬入・搬出の方法と、会期中の会場当番等の計画 5回 進級制作展 実施 6回 まとめ 問題や反省点を抽出し、レポートする			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 授業内では架空の作品展で企画するが、作品展を実施する場合はその支援もする。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ものづくり講座Ⅰ（木工）		実習	勝水 喜一
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次（集中）	選択	
授業の到達目標及びテーマ 実際に作品を作るなかで、ものづくりの基本と「本物」の魅力をを知る機会としたい。機械工具の正しい使い方、木工作業の基本の流れを知ることの到達目標とする。			
授業の概要 集中講義として、「木工」などの手作り体験をする。デザイン作業がコンピュータを使ったデスクトップに比重が移行しつつあり、手を使う機会が少なくなっているが、手作りの作業には、ものづくりの楽しさや充実感を感じさせる魅力があり、またこれらの工芸・建築の分野には素材の扱い方や技法の深さから「本物」の価値観を認識する事もできる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度、制作態度、制作作品のデザインプロセスと精度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1日 1～2回 建築作品・家具作品など、教員の作品紹介 3回 木造軸組工法について。（映像教材を鑑賞、解説） 4回 指物の作り方。（映像教材を鑑賞、解説） 第2日 5回 材料、組物を条件として、椅子、小屋組みなどの木工作品をデザインする。 使用材料はタモ、ホワイトウッド、ランバーコア合板などの板材・柱材。実習室。木工室。 6回 図面作成。 7回 建築・指物の組手の種類を学ぶ。実習室。 8回 組手制作実習。木工室。 小材を使って数種類の組手を実際に作ってみる。のみ、のこぎり使用。 木工室の正しく安全な使い方についても学ぶ。 第3日 9～10回 木取り：木目や色を考慮し、材料の割付をする。 11～12回 木取り：少し余裕を持って、荒く材料を切断する。 第4日 13～15回 木作り：手押しかん盤、自動かん盤などを使って、 材料の外形寸法、直角などを、正確に切削する。 16回 墨付け：組手の場所を材料に正確に記す。け引き、墨つぼ、さし金、スコヤなど使用。 第5日 17～20回 加工： 角のみ盤、ほぞとり盤、ルーターなどを使いほぞ、ほぞ穴、ありなどの組手をつくる。 第6日 21～23回 加工：帯のこ盤、トリマーなどを使い面取り、切り抜きなどの形を作るための加工をする。 24回 仕上げ削り：のみ、かん盤を使って部品の仕上げをする。 第7日 25～27回 組み立て。 ハタガネ、クランプ、ロープによる固定。 28回 研磨：サンドペーパーで十分に研磨する。 第8日 29～30回 必要に応じて塗装仕上げ。 31回 作品講評会。 32回 作品写真撮影。			
使用教科書 配布資料、樹種や組手のサンプル			
自己学習の内容等アドバイス 服装等、安全作業の準備をしておくこと。			

[授業科目名] ものづくり講座Ⅱ（陶芸）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 坂野 晃平
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自分の手を使い、汗を流して反復練習する中で身につく技術、感覚を実感できるようにする。 現在のデザイン作業はコンピュータを使ったデスクトップに比重が移行しつつあり、手を使う機会が少なくなってきた。陶芸の手作りの作業には、ものづくりの楽しさや充実感を感じさせる魅力があり、また素材の扱い方や技法の深さを学ぶことから「本物」の価値観を認識する事もできる。実際に作品を作るなかで、ものづくりの基本と「本物」の魅力を知る機会としたい。			
授業の概要 集中講義として「陶芸」の手作り体験をする。本講座では、陶芸の基礎と、柔らかい粘土から焼き物が出来る上がるまでのすべての工程作業を8日間かけて実際におこなう。			
学生に対する評価の方法 制作態度、制作作品			
授業計画（回数ごとの内容等） 一日目 ものづくり講座Ⅱ（陶芸）基礎のガイダンスと窯業の概要説明 粘土を練る。ロクロの中心を取る 手ロクロを使った成形 二日目 手ロクロを使った成形、電動ロクロを使った成形 三日目 たたら成形による制作、電動ロクロを使った成形 四日目 仕上げ、高台けずり 五日目 素焼き窯詰め 素焼、窯づめの操作を覚える 六日目 窯出し、加飾 加飾と施釉 本焼き窯詰め 七日目 本焼き、窯の操作を覚える レクリエーションとして七輪を使った陶芸 八日目 窯出し・高台仕上げ 自作の器での茶話会 プレゼンテーションと展示会			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 普段から美術館や博物館、画廊などを回り、「いいもの」を観ておくこと。			

[授業科目名] ものづくり講座Ⅳ（鋳造）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 張山 裕史
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 手作りの作業には、ものづくりの楽しさや充実感を感じさせる魅力があり、またこれらの工芸の分野には素材の扱い方や技法の特殊さから「本物」の価値観を認識する事もできる。実際に作品を作るなかで、ものづくりの基本と「本物」の魅力を知る機会としたい。			
授業の概要 集中講義として、「ブロンズ鋳造」の手作り体験をする。			
学生に対する評価の方法 制作作品、授業への参画態度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ものづくり講座Ⅲ（鋳造）のガイダンス 作業工程の説明と作業工程の留意点 原形成形（スタイロフォームなどによる原形） 第2回 原形成形（スタイロフォームなどによる原形） 第3回 原形成形（スタイロフォームなどによる原形） 第4回 型取り・鋳込み 第5回 型取り・鋳込み 型わり・洗い 第6回 仕上げ（しめ・けずり・あなうめ） 第7回 仕上げ（しめ・けずり・あなうめ） 第8回 仕上げ（しめ・けずり・あなうめ） 作品講評 プレゼンテーションと展示			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 普段見過ごしている身の回りの金属製品を意識し観察する。			

[授業科目名] ものづくり講座V (模型制作)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫 他
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ プロダクトデザイン、環境デザインの模型制作はプレゼンテーションツールとして重要な部分を占めている。的確な素材やスケール感を表現する技術を学ぶ。			
授業の概要 模型制作に必要なとする道具の使い方や適切な材料知識、加工法、接着技術等々を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 模型制作に積極的に参加して意欲的に創作して、目的にかなった成果をだしているかを観察して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1日目 クレイ模型 第2日目 クレイ模型 第3日目 ペーパー模型 第4日目 ペーパー模型 第5日目 バルサ模型 第6日目 バルサ模型と全作品講評			
使用教科書 材料の加工法はDVDを上映する。 接着剤の知識 (東急ハンズで無料配布) デザインドローイング (武蔵野美術大学出版)			
自己学習の内容等アドバイス 模型の作例を観察しておくこと			

[授業科目名] デザイン研修 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平光 無門
[単位数] 2	[開講期] 2 年次 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 主に学外において、最新のデザインの動向を知ることが目的とする。研修旅行の事前の調査や資料作成、研修旅行後のレポートやまとめ、あるいは発表や展示なども含めた授業とする。			
授業の概要 1～2 年生の集中講義として、学科のプランに沿った学外研修旅行に参加する。新しいデザインが展開されている場所や、話題のスポット、優れたデザインの展示会などを研修、歴史や伝統のあるものの展示や街並み、レポートやエンターテイメントといった今後さらに発展していくと思われるようなイベントや産業に関連するものの研修などを、随時企画立案していく。			
学生に対する評価の方法 講習会や研修旅行の出席状況や受講態度、提出作品やレポートの内容および表現方法で採点する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1. デザイン講習会 社会で活躍されている一流のデザイナー、アーティスト、クリエイターを迎えて、「デザインの現場」をテーマに講演していただき、パネルディスカッションをおこなう。 2. デザイン研修旅行 各クラス旅行委員を中心にして、「私が選んだ GOOD DESIGN」をテーマに、クラフト、ファッションから、インテリア、建築、都市デザインまで、デザインの先進地を選び、研修旅行をおこなう。 3. 「私が選んだ GOOD DESIGN」ファイル 毎日の生活の中で目に触れた美しいデザインの数々を写真に収め、またスケッチをしておいて、「私が選んだ GOOD DESIGN」ファイルにまとめる。 4. 100 枚のデッサン 夏休みの課題研究のひとつで、故郷の風景、美しい建物、かわいい動物や鳥、きれいな花、良いデザインの製品などをテーマに 100 枚のスケッチをする。1 年生夏休み期間中実施予定			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 日常生活においてもデザイン事情に関心を持ち、雑誌等の情報もストックしておくこと。			

[授業科目名] 彫刻		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 鬼頭 正信
[単位数] 2	[開講期] 2年次 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 彫刻の基礎を習得する。「基本的塑造と石膏取り技法を習得する」			
授業の概要 人物頭部をモチーフにして観察力を養い、二次元的なものの方から、三次元としての人体の構造的なものの方を身につける。そして、粘土という柔らかい素材を通して感触と厚み・量感を感じながら、塑造という技法で、物の存在感を表現することを習得する。 粘土で造った塑像は、石膏という素材に移し替えることで、材質が変わった後のものの方の見え方、感じ方の変化を認識する。このようなプロセスを経ることで立体造形の基礎を習得する。			
学生に対する評価の方法 授業態度、制作態度、制作作品 (遅刻厳禁！)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 一日目 授業概要の説明 ① デッサン (人体という立体の構造と量を意識して、彫刻のためのデッサン) ② 資料画像の作成 ③ 芯の制作 二日目 ① 塑造 (構造と量の概要を制作。表面や細部に惑わされないように) 三日目 ① 塑造 (部分は全て全身との関係の中に存在することを意識して制作) 四日目 ① 塑造 (細部も像の全体との関係を意識して表現) 五日目 ① 塑像段階の講評 ② 石膏取り (雌型取り、土出し) 六日目 ① 石膏取り (鑄込み) 七日目 ① 石膏取り (割り出し) 八日目 ① 細部の仕上げ、彩色 ② 作品展示、講評、まとめ、採点			
使用教科書 (参考図書) ミケランジェロ・ロダンなどの作品集			
自己学習の内容等アドバイス 授業に関連する事項について毎回予習復習をすること。(遅刻厳禁！)			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
マルチメディアⅢ		演習	齊藤 綾
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 近年の情報デザインはインタラクティブに情報を取り扱う仕組み、形態や情報を変化し続けられるなどの特性を持っている。その特性と、近年のコンピュータ、ソフトウェアの技術の向上、国内外のインターネット環境の整備に伴い、社会におけるwebの役割は広がり、多岐にわたっている。今後より広がるであろうwebの特性を理解し、デザインや表現の可能性を広げることは非常に有効かつ重要である。マルチメディアⅢでは「動き」を利用したwebデザインに着目し、情報をより効果的かつインタラクティブに伝える手段を学ぶ。			
授業の概要 study1. 1～7週、webの特性の理解、表現技法の習得 webの特性についての説明、様々な動き、インタラクティブな表現技法の演習を行う。 study2. 7週～15週、「動き」を利用したwebコンテンツの制作、表現演習 後半の授業では前半に学んだ技法を利用し、各自のテーマを効果的に伝えられるアニメーション、インタラクティブの表現を研究し、webコンテンツの制作を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度、提出作品および習得度			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業内容 第01回 近年の情報デザインの紹介、ユーザーの動向の説明 第02回 表現技法についての演習（1） 第03回 動きについての表現演習（フレームアニメーション、モーショントゥイーン1） 第04回 動きについての表現演習（モーショントゥイーン2）、インタラクティブ表現演習（1）、プログラミング（Actionscript） 第05回 表現技法についての演習（複数のソフトウェアを利用して行う表現）、インタラクティブ表現演習（2）プログラミング（Actionscript）、サウンドの取り扱いについて 第06回 表現技法についての演習（ムービークリップを使用した表現）、プログラミング（Actionscript） 第07回 htmlコーディング技法、テーマ課題への導入 第08回 テーマによる制作課題（導入、テーマの選定、表現方法の検討） 第09回 テーマによる制作課題（テーマの決定、表現検討） 第10回 テーマによる制作課題（構成、デザイン） 第11回 テーマによる制作課題（構成、デザイン） 第12回 テーマによる制作課題（デザイン、プログラミング、中間チェック） 第13回 テーマによる制作課題（デザイン、プログラミング） 第14回 プレゼンテーション、講評 第15回 作品の修正及び仕上げ、提出			
使用教科書 資料を配布、参考作品は授業時に実際に公開されている優れたwebコンテンツの中から選定、紹介する。 ソフトとしてFlash、Dreamweaver、Photoshop、Illustratorを使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で用いた技法の反復練習を行うこと。また、より効果的なデザイン表現につなげるため、日常におこる様々な「動き」の特性を観察し、研究を行うこと。			

[授業科目名] マルチメディアIV		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 齊藤 綾
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ビジュアルコミュニケーション分野
授業の到達目標及びテーマ webでは、一般的にCSS (Cascading Style Sheets) を使い、デザインの仕様、インタラクティブな要素の設定を行う。現在、WWW で利用される技術の標準化を行っている団体「W3C」よりCSS2 が勧告されており、次世代のCSS3 を搭載したブラウザも増えている。CSS3 では、構成要素をアニメーションさせたり、以前では画像でしか行うことができなかった描画表現も可能になり、今後CSSの役割はより広がることが予想される。webデザイン、コーディングにとってCSSの習得は、非常に重要なもので避けては通れない。マルチメディアIV (VCD) ではCSSを用いたweb制作技法、表現方法の習得を目標とする。また、HTMLとCSSを用いたwebが得意とする外部サービスとの連携手法についても演習を行い、様々な情報、コミュニケーション手段を取り入れた表現の可能性についても考察する。			
授業の概要 study1. 1～7週、CSSを使用したwebデザインの表現技法演習 CSSを使用したwebの表現技法、外部サービスとの連携方法、表現の可能性について演習を行う。 study2. 8週～15週、webコンテンツの制作演習 後半の授業では前半に学んだ技法を使用し、webコンテンツの制作、表現の研究を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度、提出作品および習得度			
授業計画 (回数ごとの内容等) 授業内容 第01回 近年のwebデザインの動向、表現手法について 第02回 HTML (タグ、マークアップ) についての講義、演習 第03回 HTML (div) についての講義、演習、CSSについての表現技法演習 (1) 第04回 HTML (class, id) についての講義、演習、CSSについての表現技法演習 (2) 第05回 CSSについての表現技法演習 (3) 第06回 CSSについての表現技法演習 (4)、素材のデザイン技法について 第07回 CSSについての表現技法演習 (5)、制作課題についての説明 第08回 テーマによる制作課題 (企画) 第09回 テーマによる制作課題 (企画、デザイン) 第10回 テーマによる制作課題 (デザイン、プログラミング) 第11回 テーマによる制作課題 (デザイン、プログラミング、中間チェック) 第12回 テーマによる制作課題 (デザイン、プログラミング) 第13回 テーマによる制作課題 (デザイン、プログラミング) 第14回 プレゼンテーション、講評 第15回 作品の修正及び仕上げ、提出			
使用教科書 資料を配布、参考作品は授業時に実際に公開されている優れたwebコンテンツの中から選定、紹介する。 ソフトとしてFlash、Dreamweaver、Photoshop、Illustratorを使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で用いた技法の反復練習を行うこと。また、様々なwebサイト、アプリケーションを日常的に操作、体験し、webサイトの構造、多様なコミュニケーション方法、ユーザーへ配慮している点などを考察しておく。			

[授業科目名] マルチメディアIV		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平尾 正俊
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 立体空間デザイン分野
授業の到達目標及びテーマ CADは、デザインプロセスにおけるシミュレーションや各種図面の作成・編集に欠かせない道具となっている。本授業では、CADによる2D図形作成と3Dモデリングの仕組みを理解し、その操作方法と表現方法を学ぶ。			
授業の概要 2D/3D CAD の基本操作とその応用として、Vector Works による各種図面作成や家具などの3D パース作成を行い、2D と 3D による図面を編集して効果的なプレゼンテーションを行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度、プレゼンテーションおよび提出作品による目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 設計製図の目的と図法、CAD の概要と Vector Works の基本操作 第2回 2D オブジェクトの編集と加工 第3回 各種機能の使い方とデータ管理の方法 第4回 住宅の平面図 第5回 住宅の平面図 第6回 住宅の立面図、断面図 第7回 課題/飲食店の平面図 第8回 課題/飲食店の平面図 第9回 3D CAD の基本操作とモデリング 第10回 レンダリング (Render Works) の方法と光源などの各種設定 第11回 画像編集、文字組み、レイアウトなどプレゼンテーションの表現技法 第12回 課題/家具の三面図 第13回 課題/家具の3Dパース 第14回 課題/家具の3Dパース 第15回 作品講評会、まとめ			
使用教科書 適宜必要に応じてプリント配布			
自己学習の内容等アドバイス CAD を習得するには建築製図の図法表現等の基礎知識が必要であることから、2年次ベーシックデザインの教科書で製図法関連の項目をしっかりと理解しておくこと。			

[授業科目名] マルチメディアIV		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 修作
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 立体空間デザイン分野
授業の到達目標及びテーマ デジタル2Dソフトによる応用表現技術の習得。 アイデアを伝える方法としてのレンダリングや図面を2Dの代表的ソフトであるイラストレータ、フォトショップを用いてその形状、色彩、テクスチャなどの特徴を明確に表現できる技術習得を目指す。			
授業の概要 基礎的なツールの使い方を理解していることを前提とし、最も重要なペンツールの使いこなしから始め、立体的に見せるための陰影表現のテクニックやプレゼンテーションに使用する際のデザイン性を向上させる技術と感覚を習得する。 さらに紙面上に美しくレイアウトし、作品として仕上げる。			
学生に対する評価の方法 1.課題提出及びその習熟度 2.課題に対する取り組みの姿勢 などを元に総合的に判断			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要、スケジュール、評価方法、の説明 ・立体表現とは ・ペンツールの練習 第2回 ・筆記具の2D表現1 第3回 ・筆記具の2D表現2 第4回 ・テープカッター2D表現1 第5回 ・テープカッター2D表現2 第6回 ・テープカッター2D表現3 第7回 ・家具の2D表現1 第8回 ・家具の2D表現2 第9回 ・家具の2D表現3 第10回 ・工具の2D表現1 第11回 ・工具の2D表現2 第12回 ・工具の2D表現3 第13回 ・リストウオッチの2D表現1 第14回 ・リストウオッチの2D表現2 第15回 ・リストウオッチの2D表現3			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 当日の学習内容をもう一度復習する。習った技法を応用して自分のデザインしたいモノを表現してみる。			

[授業科目名] 博物館概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館は生涯学習機関であり、社会との関わりが深い。公立や私立を問わず、博物館の専門職員である学芸員は、高い見識とともに社会人としての一般常識が求められる。コミュニケーション能力を含め、それらをしっかり身につけて欲しい。 なお、この科目はデザイン学科の選択となっているが、学芸員資格取得には必須の単位である。資格取得を目指す者はこの単位を修得していなければ、これ以後の各論・実習の履修を認めない。			
授業の概要 いま博物館に何が求められているか、それに答えるためには何が必要か、期待される新たな博物館とは何かを考える。そのために、まずは博物館の歴史を振り返り、ついで博物館法に基づき、現代の博物館の種類、機能、役割などを順次解説する。なお、学期中、通常の講義とは別枠で学外の施設見学を行う。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50％）に、受講態度（欠席、遅刻、早退、出席カードへの記入状況）やレポート等加味（50％）しながら、総合的に判定する。まずは、補講を含め第14講時まで3分の2以上の出席が不可欠である。 追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。博物館とは何か、各自が思い描く博物館像を問い、あわせてこれまでの博物館利用体験などをアンケート調査する。 第2回 アンケート結果の公表。これをもとに各自の抱いている博物館像を浮き彫りにするとともに、博物館の実態について述べる。 第3回 博物館概論とは何か。 第4回 博物館法1。博物館法を定義から順次読み進む。 第5回 博物館法2。改正の要点を解説。 第6回 博物館の歴史その1－海外編、近代前－ 第7回 博物館の歴史その2－海外編、近代以後－ 第8回 博物館の歴史その3－日本編、近代前－ 第9回 博物館の歴史その4－日本編、近代以後 第10回 博物館の組織と職員、指定管理者制度。 第11回 博物館の仕事1－研究－ 第12回 博物館の仕事2－収集－ 第13回 博物館の仕事3－展示－ 第14回 博物館の仕事4－教育－ 第15回 評価試験。 補講 受講生の希望する施設を見学し、レポートを提出する。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配布する。 【参考図書】倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』 東京堂出版			
自己学習の内容等アドバイス 博物館は生涯学習機関であり、社会との結びつきが深い。一般常識を身につけるため、普段から新聞その他のマスメディアに親しんで欲しい。			

[授業科目名] 博物館学各論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 2 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この各論 I では、博物館に関する必要な科目の内、博物館経営論と博物館情報論について講義する。 「経営」というと、すぐに予算や対費用効果などお金関係のことが思い浮かぶが、決してお金だけがすべてではない。また、博物館における情報の種類や伝達方法について知る。両者をあわせて、博物館運営の理念や実践について考える。			
授業の概要 まずは、「経営」とは何か、言葉の意味から説き起こし、博物館経営に必要な基本を述べる。地元の博物館の事例を紹介しながら、経営の実態に迫る。また、情報についても言葉の意味から解説し、具体的な事例を紹介する。あわせて、保存科学についても触れる。なお、通常の講義枠とは別に学外の施設見学を行い、レポートを課す。さらに人前で話す練習として、毎回講義の冒頭にマスコミで取り上げられた博物館に関する話題で、3 分間スピーチを順次行う。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50%）に、出席状況や受講態度（出席カードへの記入）、レポート等加味しながら（50%）、総合的に判断する。まずは14 回目までに3分の2以上の出席が必須条件。追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。これまで自分が見た展示で一番印象に残っているものは何か、博物館経営、博物館情報と聞いて思い浮かぶことは何か、アンケート調査をする。あわせて、講義の進め方の概要を説明する。 第2回 アンケート結果の講評。ひとまず博物館から離れ、経営とは何か、その一般論から述べる。 第3回 博物館経営とは何か、『新編 博物館学』をもとに講義する。 第4回 博物館の組織と経費の実態について、岐阜県を中心に事例紹介をする。 第5回 博物館の現状1。愛知県内からいくつか博物館を選び、入館者数動向と運営について考える。 第6回 博物館の現状2。岐阜県内からいくつか博物館を選び、入館者数の動向と運営について考える。 第7回 博物館の作り方。「みのかも文化の森」を取り上げ、計画から開館までの概略を述べる。 第8回 博物館の運営。「みのかも文化の森」の実践例（学校教育との連携）を取り上げる。 第9回 博物館情報論1。まずは情報とは何かそこから解き起こし、博物館情報の種類と概要を述べる。 第10回 博物館情報2。博物館情報の活用と著作権。 第11回 博物館とマルチメディア。博物館に蹴る最新情報機器について述べる。 第12回 保存科学1。温湿度管理。 第13回 保存科学2。防虫、防霉対策。 第14回 保存科学3。光と博物館資料。 第15回 評価試験。 補講 受講生の希望する施設を一館見学し、レポートを提出する。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。 【参考図書】倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』、加藤有次他編『博物館情報論』			
自己学習の内容等アドバイス 新聞等のマスコミに触れ、常に博物館に関する話題の情報収集につとめる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デザイン法規		講義	森本 健
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 産業財産権にはどんなものがあるか、またこれらの権利の範囲やその手続きの仕方、知的財産権の知識と役割などについて実際の判例等を紹介して、デザインや商品開発に携わる学生にとって知っておかなければならないデザイン関連法規の概要について学ぶ。			
授業の概要 デザインに関する法規について学ぶ。デザイナーが制作したデザインの権利として、意匠登録などの産業財産権がある。グラフィックデザイン分野においては、CI のマークやロゴタイプなど商標や著作権をスペース・プロダクトデザイン分野においては、物品のデザイン形状、概観の色彩計画など、意匠権や実用新案権や特許権、不正競争防止法など、実際の事例における判例を紹介しデザイナーとして知っておかなければならない知的財産権の知識について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 調査レポートのまとめ、発表に対する評価と考査試験による評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回工業所有権四法（特許、意匠、実用新案、商標）の概要、著作権法との違い、著作権法、不正競争防止法の概要について解説。 2回 意匠権についてその定義、意匠登録の要件、存続期間、類似意匠、改正意匠法 事例に見る意匠の権利 ①インダストリアルデザインの法的保護。 関連して著作権法による保全・保護と不正競争防止法による保全、保護について。係争事例とQ&A 3回 事例に見る意匠の権利 ②グラフィックデザインの法的保護。 関連して著作権法による保全・保護並びに不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 4回 事例に見る意匠の権利 ③インテリアデザイン、建築の法的保護 関連して著作権法による保全・保護並びに不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 5回 事例に見る意匠の権利 ④パロディ作品、アイコン、キャラクター、美術品の法的保護 関連して著作権法による保全・保護並びに不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 6回 部分意匠制度の趣旨と概要、制度の利用方法、関連意匠と登録要件。具体的な係争事例 7回 商標について、登録の要件、存続期間、効力。専有使用権と模倣について、侵害された商標の損害賠償。不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 8回 商標にかかる事例①、トラブルや保護、権利侵害、関連して著作権法による保全・保護並びに不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 9回 商標にかかる事例②、トラブルや保護、権利侵害の事例、関連して著作権法による保全、保護並びに不正競争防止法による保全・保護。係争事例とQ&A 10回 不正競争防止法、概要、法の考え方、責任等について 11回 不正競争防止法の事例 関連して意匠法、商標による保全・保護並びに著作権法による保全・保護。係争事例とQ&A 12回 PL法（製造物責任法/Product Liability）について、概要、法の考え方責任等について 容器包装リサイクル法の概要、家庭電気製品リサイクル法の概要、グリーン購入法の概要 係争事例とQ&A 13回 デザイン関連法規（特許、意匠、実用新案、商標、著作権法、不正競争防止法等）のまとめ 14回 工業所有権法（意匠、商標）、著作権法、不正競争防止法についての係争事例。代表的なQ&A 15回 考査試験			
使用教科書 参考図書 図解 わかる著作権 ワークス刊。クリエイターのための知的財産権ルールブック グラフィック社刊 クリエーターのための模倣と創造のルールブック グラフィック社刊。 産業財産権標準テキスト(商標編)、産業財産権標準テキスト(意匠編) 社団法人発明協会刊			
自己学習の内容等アドバイス 学生の身近で起きている、知的財産にかかる新聞記事、ニュースを紹介してレポートを隔週ごとに提出させる。 学生が提出したレポートから、内容を見て発表させ、その事例について解説をする。 授業日の終了時に配布する知的財産権のQ&A資料について翌週までに勉強しておくこと(翌週に答え合わせと解説)。			

[授業科目名] デザインマネジメント		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近年、企業の経営戦略の中で重視されるデザインマネジメントについて、その基礎知識を把握、理解することをテーマとして、その概念を十分に習得して、その重要性を認識することを到達目標とする。			
授業の概要 デザインマネジメントの基本概念、そのあゆみ、その展開法、その広範な領域について述べる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度とレポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 デザインマネジメントとは何か 第2回 企業戦略に置けるデザインマネジメント 第3回 日本に置けるデザインマネジメントの展開 第4回 デザインマネジメントとデザイン力 第5回 デザインマネジメントのプロセス 第6回 プロジェクト・マネジメント 第7回 デザイナー・マネジメント 第8回 CI マネジメント 第9回 ブランド・マネジメント 第10回 デザイン戦略マネジメント 第11回 ケース・スタディ（1） 第12回 ケース・スタディ（2） 第13回 ケース・スタディ（3） 第14回 日本のデザインマネジメントの問題点 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 社会や企業のデザイン事象を常に注目していること。			

[授業科目名] デザイン研修Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小谷 恭二・黄 ロビン 金 昌郁・尹 成濟
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業は、2011年度から始まるデザインプロジェクト1との複合授業であり、学年を越えて一つの課題をグループ化したチームで研究を行うことを目標とする。具体的にはデザインに関するオリエンテーションをしたうえで、デザインの目的やテーマを学生が自らの興味を重ねながら発見し、主体的に学習、研究していく環境を提供する。思いがけない自らの示唆がリーターシップを作り出し、相互協力を生み、相互の関係の変化の中で全体の調和と競争をつくり出すことができる。			
授業の概要 各グループに記録者をおき、メンバーの個別の感想をまとめる。それぞれの日の作業に区切りがつけられたら、各自感想を書き、回覧したり、相互のディスカッションを行うことを前提にデザイン行為に移ることと共に、形態およびメディアの学習と制作によって作られた各グループの作品と、他のさまざまな作品の作業、プロセスなどを比較する。			
学生に対する評価の方法 チームワーク、積極性、テーマの設定からまとめまでのデザインプロセス、目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） ◎テーマの設定、フィールドワーク 各グループ別にテーマを設定する。自然物、人工物、行為の軌跡など多様な具体物、現象から形態を取り出して（サンプリング）文字（書く）、写真、イラストレーション（スケッチ）、ビデオなど様々な方法を用いて記述を試みる。これは視覚的要素の観察と発見といったフィールドワークである。 ◎構造化のデザイン・メディアの選択 収集したばらばらの形態群をいくつかの基本的な編集手法を用いながら分析、構造化してかたち化する。様々なメディアごとに展開してきた多様な表現、編集手法の歴史の中から具体例を見つつ今日の視点から学び、その中から各グループで興味をもった一つのメディア（ビジュアルコミュニケーションデザインまたはスペース・プロダクトデザイン）に限定してデザインする。 ◎制作から全体のまとめ 学期末のプレゼンテーションにおいては単なる作品の発表会にとどめず、それそのものがデザイン表現の機会ととらえたい。形態およびメディアの学習と制作によって作られた各グループの作品と、他のさまざまな作品の作業、プロセスなどを比較する。 ※今日的なデザインの課題の理解のために、授業の進行状況にあわせてビジュアルコミュニケーションデザインまたはスペース・プロダクトデザインに関する特別講義や集中授業、会社訪問などのデザイン研修を設定する予定である。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 事前に予測して計画を徹底的に行い実行すること。 資料などをまとめるためのファイルは必ず持参すること。			

[授業科目名] イベントプランニング		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大井 純
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期(集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ イベントのプランニングから企画書の書き方までを実習。 さらに、プレゼンテーションの仕方を実践し、社会活動の中で即役立つ能力を身につけます。 また、様々なニーズに対応するイベントの役割を、出来る限り具体的に学習します。			
授業の概要 展示会、コンサート、フェスティバル・・・などの様々なイベント。それらはすべて明確な目的によって計画されている。ここでは、実際に行われるイベントの計画について研修し、プランの立て方を実習。企画書の作り方からプレゼンテーションまで、プロジェクトチームを編成して行います。			
学生に対する評価の方法 企画内容による評価、授業への参画態度、などを受講生全員で採点評価します。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 イベント概論(イベントの歴史と、現代社会における役割) ※VTR(愛知万博が残したもの) 第2回 イベントの構成方法(6W2H分析法ほか) 第3回 イベントプランニングのテーマとコンセプトの設定 ※オリエンテーション イベント計画の立案と制作実習 ※ 3~4名で1プロジェクトを組み、アイデア出し。 第4回 同、実習 A アイデアの創出方法 第5回 同、実習 B 第6回 企画の内容構成(プロジェクトによる企画構成実習) 第7回 同、 第8回 同 第9回 パソコンルームでの、企画書制作実習 1 第10回 同 2 第11回 同 3 第12回 企画書の内容チェックとプレゼンテーションの仕方 第13回 プロジェクトチーム別でのプレゼンテーションと採点 第14回 同 第15回 総評 イベント業務管理者の資格取得について			
使用教科書 資料配布			
自己学習の内容等アドバイス アイデア出しのために、雑誌、新聞 情報誌、ネットなどを有効に使うこと。(情報の確保)			

[授業科目名] 博物館学各論Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木下 稔
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この各論Ⅱ（資料論）では、博物館施設に於ける学芸員の資格取得のための基礎的な知識および考え方を修得することをテーマとし、学芸員に何が必要か自主的に考える姿勢を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 博物館学各論Ⅱ（資料論）では、博物館資料の収集はじめ整理、保存、展示、調査研究などについて講義する。本講義では、特に博物館資料を理解するために、資料の意味と意義、資料の収集、保存方法、展示の方法に関わる知識と共に資料の取り扱いについて指導、講義する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、各授業項目の理解度（30%）、期末の評価試験（50%）などで総合的に評価を行う。尚、出席率は3分の2以上を必要とする。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 講義内容の説明、そして学芸員の職務内容ほかについて 2回 「資料」とは何か（造形美術を中心に） 3回 「資料」一つの見かた、考えかた 4回 「資料」の意味と意義について 5回 「資料」造形美術は如何にあるべきか（レポート提出） 6回 資料の収集と調査研究について 7回 資料の整理と保存 8回 資料の取り扱い1 絵画・書を中心に 9回 資料の取り扱い2 陶磁器を中心に 10回 資料の取り扱い3 漆工芸を中心に 11回 展示計画および展示リストの作成 12回 展示の方法について 13回 「小論」その構成と展開 14回 「資料」調査カード、基本カードの作成および各種台帳の紹介 15回 評価試験			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じてその都度、文献資料の紹介と適宜資料コピーを配布。 [参考図書]博物館学講座（全10巻）第5巻 調査・研究と資料の収集 監修古賀忠道他 有山閣出版			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を事前に知らせる。そして必ず質問事項を尋ね、アドバイスする。			

[授業科目名] 博物館実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 3	[開講期] 3年次後期・4年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館の主な活動は、資料収集、展示保管、教育普及であり、それらは専門職としての学芸員の重要な仕事である。ここでは、4年次における学外館務実習を円滑に進めるため、3年次では東海地区の様々な種類の博物館4～5館へ施設見学に出かける。その都度レポートを提出する。4年次では、学芸員の実務を体験する。			
授業の概要 3年次、施設見学の他に、準備室の資料整理、フィルムカメラによる資料写真の撮影を行う。 4年次の夏休みには学外館務実習があるが、実習先は各自で確保すること。4年次後期には、3年生と合同で実習成果の報告会を行う。			
学生に対する評価の方法 学内での実習に取り組む姿勢、写真のできばえ、レポート、学外館務実習先での実習態度等、総合的に判定する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 3年次後期 第1回 導入。博物館の実務にどのようなものがあるか、実習ではどんなことをしたいのか、施設見学先などアンケート調査。あわせて講義の概要を説明する。 第2回 アンケート結果の講評。見学実習先を選定し、3～4人で一班とし、見学の計画やそれに関する資料作り、反省会、お礼状の作成などを共同して行う。 第3回 スライドを用いて、写真の基礎知識を学ぶ。 第4回 資料整理、写真撮影1。 第5回 施設見学1。 第6回 資料整理、写真撮影2。 第7回 施設見学2。 第8回 資料整理、写真撮影2。 第9回 施設見学3。 第10回 資料整理、写真撮影4。 第11回 施設見学4。 第12回 資料整理、写真撮影5。 第13回 施設見学5。 第14回 撮影した資料写真の合評会。 第15回 4年次の学外館務実習へ向けての抱負発表。 見学施設：総合博物館、美術館、歴史民俗系博物館、動植物園、水族館、理工系博物館などの中から、5館選んで見学する。見学終了後、すみやかにレポートを提出する。 4年次 第1回 各自実習先候補の概要（施設名、実習期間等）や準備状況を報告する。 第2回 実習先の再確認、実習日誌の記入法や、実習に際しての心構えを説明。 第3～14回 班別に準備室の整理作業、資料取り扱いの練習などの学内作業。 第15回 学外館務実習に向けての最終確認。 適宜 各自確保した施設で、主に夏休み中に学外館務をおこなう。夏休み明け、実習成果報告会をする。			
使用教科書 特定の教科書はない。			
自己学習の内容等アドバイス 学外館務実習では、他大学の学生と一緒にになって、博物館の実務をこなすことになる。社会常識をわきまえ、節度あるコミュニケーションがとれなければならない。			

[授業科目名] AD企画論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小谷 恭二
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 広告は時代、社会背景、生活者の志向によって刻々と変化しています。アートディレクターの領域もますます広がる中で、広告制作におけるアートディレクションの重要性を理解する。			
授業の概要 アートディレクターは企業と消費者の媒体作業の（広告制作）の創責任者です。「何を伝えるか」「どんな形で伝えるか」「どうやって創るか」と広告制作の全過程にわたり、的確な判断が求められます、幅広い思考力、想像力、表現力、統合力が必要である。授業では企画事例の検証から学び、ブレインストーミング（集団発想法）等を交えた演習でその能力を養います。			
学生に対する評価の方法 レポート提出と作品評価（コンセプトの企画力、ビジュアルの発想力、全媒体の統一性）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ・アートディレクション（AD）とは？ 第2回 広告におけるADの必要性とその機能。アートディレクターに求められる能力とは 第3回 ・アートディレクションの実作業 第4回 コンセプトの発見からビジョンの発想、制作者とのコミュニケーション 第5回 フィニッシュワークまでの作業内容とその考え方 第6回 ・ADプロセス1. コンセプトの探求 第7回 商品について消費者に何を伝えるか、メッセージの絞り込み 第8回 ・コンセプト立案/テーマ設定し、コンセプトを実際に立案 第9回 プレゼンテーションを行い、学生間で意見交換 第10回 ・ADプロセス 2. ビジュアルの発想/ コンセプトのビジュアル化。説明的な表現を超えた独自の発想 第11回 美しさと時代性を兼ね備えた説得力、熟成した内容でターゲットに驚嘆と共感を与えるディレクションとは 第12回 ・コンセプトのビジュアル化（ポスター用サムネイル制作） 第13回 前授業で立案したコンセプトをビジュアル化。視覚的衝撃をいかに創るか、その方法を探求 第14回 ・ADプロセス3. イメージの統合/アーティストのコーディネートや制作スケジュールの管理 写真、イラスト、コピー、タイポグラフィなどの各アーティストの分担作業の中でコンセプトを基にしたイメージの統合 第15回 ・プレゼンテーション			
使用教科書 参考図書/アートディレクター入門（電通）、アートディレクターの発想・現場・定着（メディアファクトリー） アートディレクションツディ（講談社）			
自己学習の内容等アドバイス 授業内容に対応して日常生活で目にする様々なメディアの広告を制作者の視点で見つめ直すと共に印象的な広告の資料収集			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
広告プランニング		講義	小川 明生
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
<p>広告の機能やマーケティングの基礎知識を学び、マーケティング戦略の立案、コミュニケーション戦略の立案、広告戦略の立案、表現戦略の立案、媒体戦略の立案のプロセスを理解する。</p>			
授業の概要			
<p>ケーススタディ(仮説)をベースにプロセスを学ぶと同時に、課題を作成。 広告の基本は、広告するモノ、何をいかに認知するかということである。さらに社会のウェーブやターゲットの意識などの分析も重要なファクターである。ここでは、企業広告、意見広告といった広告の目的や、イメージ広告、比較広告といった広告の効果などの基本的な広告理論を理解した上でそれらを利用して各企業が開発、商品化しようとする商材をいかに広告としてうランニングするかを学び、その手法を身につける。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>課題提出による理解度及び表現アイデアでの評価 受講態度及びプレゼンテーション能力</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回 広告ビジネスの基礎Ⅰ			
<p>広告の役割、企業活動領域の拡大、企業活動戦略と広告、消費者から生活者へ視点の転換、 広告環境の変化(グローバル化、デジタル化、ブランド重視)について学ぶ</p>			
第2回 広告ビジネスの基礎Ⅱ			
<p>広告メディアの種類、広告目的とメディア、目標設定と効果について学ぶ</p>			
第3回 広告の戦略立案Ⅰ			
<p>マーケティングと広告、マーケティング戦略から立案プロセスについて学ぶ</p>			
第4回 広告の戦略立案Ⅱ			
<p>市場の把握と課題の発見、仮説の設定から調査へ、調査の立案と実務について学ぶ</p>			
第5回 広告戦略の基本方針(ターゲット、ポジショニング、コンセプト)について学ぶ			
第6回 表現戦略とプランニング			
<p>広告表現戦略の立案、制作作業の流れ、表現のポイントについて学ぶ</p>			
第7回 マスメディア戦略とプランニング			
<p>メディア戦略の立案と位置付けプランニング、クロスメディアの考え方、テレビ、ラジオ、新聞・ 雑誌広告・Webの概況と種類、特性について学ぶ</p>			
第8回 広告物の制作Ⅰ(テレビCMのコンテ製作、新聞広告、雑誌広告、交通広告などのプランニング)			
<p>プランニングシートの書き方</p>			
第9回 広告物の制作Ⅱ(コンセプト・キャッチフレーズの創出)			
第10回 広告物の制作Ⅲ(ヴィジュアル・アイディアの創出)			
第11回 広告物の制作Ⅳ(プランニングデザインのスケッチ)			
第12回 広告物の制作Ⅴ(プランニングデザインのスケッチ)			
第13回 課題1の発表と講評/課題2のオリエンテーション			
第14回 課題2の発表と講評/課題3のオリエンテーション			
第15回 課題3の発表と講評			
使用教科書			
<p>参考図書/広告の基本(日本事業出版社)/広告・宣伝入門(日本能率協会マネジメントセンター)/広告 のことが面白いほどわかる本(中経出版)</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>私たちの身のまわりには、広告で溢れています。その中から自身が“心を動かされるもの” “情報が美しく 整理されたもの” その気になる何かを、常に問題意識を持って考えること。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
DTP		講義	岡本 洋介
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次前・後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ グラフィックデザイン媒体の大半は印刷により完成品となる。今日ではそれがDTPシステムで進められている。デザインから印刷まで一貫してデジタルワークスで進めるDTPを各プロセスごとに理解し、DTPの流れを把握する。			
授業の概要 DTP制作現場において頻りに制作されるデータ制作方法を検証し、ワークフローについての理解を深める。グラフィックソフトによる実例も制作する。			
学生に対する評価の方法 授業の参画、提出する作品等で総合的に実施する。なお、この授業は再評価を実施しない。 授業の参画・レポート提出・操作解説の記録・製作過程のデータから評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 タイトルを大きく活かしたDM制作の基礎知識（Ⅰ） ・Sale DMの制作 ・基本サイズの設定 第2回 タイトルを大きく活かしたDM制作の基礎知識（Ⅱ） ・Sale DMの制作 ・タイトルおよび文字組からレイアウト 第3回 タイトルを大きく活かしたDM制作の基礎知識（Ⅲ） ・ビジュアルイメージ制作から完成 第4回 パースを応用したDM制作の基礎知識（Ⅰ） ・基本サイズの設定 第5回 パースを応用したDM制作の基礎知識（Ⅱ） ・ビジュアルイメージ制作 ・カラーバリエーションの研究 第6回 パースを応用したDM制作の基礎知識（Ⅲ） ・タイトルおよび文字組からレイアウト ・ビジュアルイメージ制作から完成 第7回 ピクトグラムを応用した異動制作の基礎知識（Ⅰ） ・ピクトグラム制作 第8回 ピクトグラムを応用した異動制作の基礎知識（Ⅱ） ・マップ制作の基礎知識 ・タイトルおよび文字組からレイアウト 第9回 ピクトグラムを応用した異動制作の基礎知識（Ⅲ） ・ビジュアルイメージ制作から完成 第10回 キッチン雑貨をモチーフとした開店案内の制作（Ⅰ） ・モチーフのイメージ化 ・イラストレーターでの描画バリエーション研究 第11回 キッチン雑貨をモチーフとした開店案内の制作（Ⅱ） ・タイトルおよび文字組からレイアウト 第12回 キッチン雑貨をモチーフとした開店案内の制作（Ⅲ） ・ビジュアルイメージ制作から完成 第13回 提出用データ課題の最終調整 第14回 制作データ提出 ・USBで指定フォルダに各自コピー 第15回 提出データ採点			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 指示されたフォーマット制作以外にも多様なデザインバリエーション展開を目指す。			

[授業科目名] 印刷論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 末廣 裕文
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 印刷技術の理解と印刷表現の実際を把握する 1) 印刷および印刷に関連する基礎知識の習得 2) グラフィックデザインとの関連性の理解			
授業の概要 1) 印刷の基礎知識 (版式、画像表現、加工、特殊印刷、特殊インキ、印刷用紙) 2) 印刷の歴史 (印刷コミュニケーションの果たした役割) 3) グラフィックデザインの変遷 (ポスターに見る印刷表現の変化)			
学生に対する評価の方法 受講態度、考課試験、レポート提出などで評価			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 印刷の概要 ・印刷とは (印刷の役割と定義) ・印刷の4大版式について 第2回 印刷の歴史1 (印刷の誕生からカラー印刷のはじまり) ・活版印刷術の誕生による印刷文化のはじまり 第3回 印刷の歴史2 (デジタル時代の印刷) ・CEPS、DTP、DDCP、CTP 第4回 画像表現のしくみ ・色再現、階調再現の方法 (網点、スクリーン、解像度) ・カラーマネージメント 第5回 グラフィックデザインの変遷 (絵師の時代からデジタルデザインまで) 第6回 印刷用紙の基礎知識1 ・紙の歴史 ・印刷用紙の分類 第7回 印刷用紙の基礎知識2 ・印刷用紙の特性 ・印刷用紙の選び方 第8回 加工表現 ・折加工 ・製本 (種類と綴じ方) ・表面加工 第9回 特殊印刷、特殊インキ、印刷技術の応用 第10回 日本のポスター史 (1945年～) 第11回 欧米のポスター史 (1945年～) 第12回 印刷用語の解説とまとめ 第13・14回 学外研修 (印刷、製版会社見学) 第15回 考課試験			
使用教科書 適宜資料配布 特に教科書は定めない			
自己学習の内容等アドバイス DTPと印刷のしくみを知る。			

[授業科目名] ビジュアルコミュニケーション デザイン I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷・富安・尹・伊藤(美) 上鶴瀬・加藤(純)・小島(徳) 新家・服部・山内(瞬)・渡邊(勝)
[単位数] 6	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、ビジュアル・コミュニケーションに関するオリエンテーションを行ったうえで、その領域、視点のなかから学生自身が最も興味を持っているデザインの表現、歴史、ひと、デザイン運動、デザイン理論などを学ぶことから始める。これは各自が今後ビジュアル・コミュニケーションの各専門領域に進もうとするときの核になることが望まれる。ビジュアル・コミュニケーションの構成とは、自らの日常的な経験に基づいてその経験を記録し、形に変換し、編集し表現することのプロセス全体を指しています。また、それらを表現するための考え方＝ロジックを見い出すことが表現につなげる重要なポイントである。 デザイナーが目的に応じてコミュニケーションをつくり出す為には、まずはビジュアルコミュニケーションデザインに関わる内容の歴史や成り立ち、性質をより深く理解することが求められる。そして同時にそれらを自由にコントロールし、駆使する為の基本的な原理と表現技術を学ぶ必要がある。ただ単に好きだからものを作るということに止まらず、作られたものとそれが意味するものとの関係を感性と論理双方においてしっかり理解することが求められる。			
授業の概要 この前提として、文字・図像・映像などを多面的に扱い、情報を収集する方法や、表現し整理する方法を学習する。その上で、並行して学習する様々なビジュアルコミュニケーションデザイン授業の経験を踏まえ、各自の手法で表現する。ビジュアルコミュニケーションデザインでの扱う情報の内容とは、タイポグラフィ、ダイアグラム(ピクトグラム、アイソタイプを含め)、イラストレーション、写真、パッケージ、ポスターなどなどの従来のグラフィックデザインに包含される要素に加え、映像、アニメーション、音といった時間軸をもった要素、またサインや色彩など日常生活における空間や都市環境の中に存在するもの、あるいはインターネットなど電子空間に存在するインタラクティブな要素など多様なものがある。 デザインを成り立たせているこれらの要素は(単独でというよりもしばしば複合されたかたちをとっています)各々に視覚言語としての意味と構造を持っており、ここでは、その内容を融合するデザインをプロジェクト的内容として、またソーシャルデザインとしてのビジュアルコミュニケーションデザインを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 作品評価(授業に対するテーマの内容、独自性、表現の充実さ、作品、目標達成度)			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 視覚伝達デザインのオリエンテーション/課題の研究領域に関する説明/関連資料紹介 第2回 テーマの検討:各自提案・発表及びディスカッション、質疑応答 第3回 テーマの検討:各自提案・各自提案・発表及びディスカッション、質疑応答/個別指導 第4回 テーマの考察:視覚伝達デザイン領域別の提案・個別指導 第5回 制作/表現コンセプトを決定・表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第6回 制作/表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第7回 制作/表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第8回 中間プレゼンテーション 第9回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第10回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第11回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第12回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第13回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第14回 まとめ 第15回 最終プレゼンテーション			

使用教科書

参考文献や作品事例は授業を通して適宜提示、配付する。

主なものは「POWERS OF TEN (チャールズ・イームズ)」「都市のイメージ (ケヴィンリンチ)」「杉浦康平の大地図・日本列島時間軸変形地図」「ケルムスコット・プレスおよび19世紀末の絵本 (モリスほか)」「イタリア未来派によるグラフィック・ワーク」「リッツキーなどのロシア・アヴァンギャルドのグラフィック・ワーク」「バウハウスのグラフィック・ワーク」「ワールド・ジオグラフィック・アトラス (ハーバート・バイヤー)」「アイソタイプ、ピクトグラム (オットー・ノイラートなど)」など。

自己学習の内容等アドバイス

授業内容は各先生によって進行や各授業の性格やテーマによって授業計画は多少異なる場合もある。

授業の基本的な説明期間(5週目まで)は、欠席や遅刻はしないこと。

事前に予測して計画を徹底的に行い実行すること。

資料などをまとめるためのファイルは必ず持参すること。

[授業科目名] ビジュアルコミュニケーション デザインⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷・富安・尹・伊藤(美) 上鶴瀬・加藤(純)・小島(徳) 新家・服部・山内(瞬)・渡邊(勝)
[単位数] 6	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、前期のビジュアルコミュニケーションデザインⅠとの複合授業であり、前期で学んだ内容を基によりビジュアルコミュニケーションデザインの専門的な内容を学ぶ。3年次は社会的視点に立った個の自立を意識したデザインの考察と表現を4年次になる前にきちんと検証しなければならない。 デザイナーは目的に応じてコミュニケーション表現をつくり出す為には、デザインの性質、成り立ちを深く理解し、学習の段階でのシミュレーションをきちんと行い、自由にコントロールし駆使する為の基本的な原理と表現技術を習得することが必要である。第三者に向かって内容を視覚化し伝達するためには各々の目的やメディアにおける様々な編集、情報構成の手法や考え方があることを学ぶ事は重要である。どんなに素晴らしい要素であっても単独であればそれらはいわば単語に過ぎない。単語が目的をもって構成されて文章ができるように様々な要素が的確に構成され相手に伝わるように意味の構造をつくり出すことをここで学ぶ。			
授業の概要 ビジュアルコミュニケーションの専門的に展開させる様々なデザインを学ぶ。前期からさらに展開されたビジュアルコミュニケーションデザイン全般を考えるプロジェクトをはじめ、アドバタイジングデザインからポスター・カレンダー・パッケージなどと言ったマーケティングコミュニケーションデザインを、タイポグラフィデザインと編集デザイン、公共コミュニケーションとして環境グラフィック・ブランディングコミュニケーション、イラストレーション、キャラクター、映像デザイン(モーションイメージ)、情報システムデザイン...など様々な角度で試みる。			
学生に対する評価の方法 作品評価 (授業に対するテーマの内容、独自性、表現の充実さ、作品、目標達成度)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 視覚伝達デザインのオリエンテーション/課題の研究領域に関する説明/関連資料紹介 第2回 テーマの検討: 各自提案・発表及びディスカッション、質疑応答 第3回 テーマの検討: 各自提案・各自提案・発表及びディスカッション、質疑応答/個別指導 第4回 テーマの考察: 視覚伝達デザイン領域別の提案・個別指導 第5回 制作/表現コンセプトを決定・表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第6回 制作/表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第7回 制作/表現方法についてのディスカッション及び演習、個別指導 第8回 中間プレゼンテーション 第9回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第10回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第11回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第12回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第13回 制作/進行状況のプレゼンテーション、個別指導 第14回 まとめ 第15回 最終プレゼンテーション			

使用教科書

参考文献や作品事例は授業を通して適宜提示、配付する。

主なものは「POWERS OF TEN (チャールズ・イームズ)」「都市のイメージ (ケヴィンリンチ)」「杉浦康平の犬地図・日本列島時間軸変形地図」「ケルムスコット・プレスおよび19世紀末の絵本 (モリスほか)」「イタリア未来派によるグラフィック・ワーク」「リシツキーなどのロシア・アヴァンギャルドのグラフィック・ワーク」「バウハウスのグラフィック・ワーク」「ワールド・ジオグラフィック・アトラス (ハーバート・バイヤー)」「アイソタイプ、ピクトグラム (オットー・ノイラートなど)」など。

自己学習の内容等アドバイス

授業内容は各先生によって進行や各授業の性格やテーマによって授業計画は多少異なる場合もある。

授業の基本的な説明期間(5週目まで)は、欠席や遅刻はしないこと。

事前に予測して計画を徹底的に行い実行すること。

資料などをまとめるためのファイルは必ず持参すること。

[授業科目名] デジタルデザイン I (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 祥子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ HTML 言語と CSS (XHTML+CSS による WEB 標準) を理解する。 Photoshop や Dreamweaver でのサイト制作を習得する。			
授業の概要 サイト構築の初期段階の企画から、デザイン、コーディングに取り組む。 サイトのユーザビリティ、アクセシビリティ、WEB 標準を学ぶ。前半は、過去の資産であるハイブリッドレイアウトからピュアな CSS レイアウトまでを学習。 後半は各自のサイト制作をする。			
学生に対する評価の方法 作品評価 (デジタル技術力、表現力)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ウェブサイトの仕組み/最近のウェブサイトの動向と可能性について 第2回 WEB 画像とコーディング ・WEB 画像/WEB カラー ・HTML コーディング 第3回 ウェブサイト制作のワークフロー ・コンセプトシート/フローチャート (サイトマップ) /ペルソナ/ワイヤーフレーム 第4回 カンプデザイン、Web 用画像の制作 第5回 CSS (カスケーディングスタイルシート) 第6回 ハイブリッドレイアウト (HTML と CSS) 第7回 web 標準レイアウト (XHTML と CSS) 第8回 オーサリングソフトによるコーディング ・Dreamweaver によるコーディングと JavaScript 第9回 ウェブサイト設計 ・コンセプトシート/サイトマップ制作 第10~11回 サイトデザイン ・デザイン制作 第12~14回 サイトコーディング ・HTML コーディング 第15回 まとめ			
使用教科書 なし 教材はデータで配布			
自己学習の内容等アドバイス 様々なサイトを訪れる事。 様々な企画、デザインに触れる事は、独自の企画やデザインザインの手助けになりえる。			

[授業科目名] デジタルデザインⅠ (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 坂野 弘
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ウェブ制作の総合的な学習を修得する。『HTML+CSS 制作方法の習得』『簡単な FLASH 制作方法の習得』『ウェブデザインにおける PHOTOSHOP、DREAMWAVER での制作方法の習得』『フリー JAVASCRIPT 導入の習得』 また、ホームページはマーケティング手段であることから、マーケティングの一部手法を修得する。			
授業の概要 ホームページ制作は、多くの要素の集まったものであり、技術的な進歩も、マーケティングツールとしての利用手段も発展している。ホームページの基礎的制作手法を知り、その中にマーケティングの手段となる来訪者の目的、動きを考えたサイト『人の心を動かすホームページ』構築を行う。 制作課題は『自分の個人デザイン事務所ホームページを制作』（自分の今までの作品等を利用） ウェブ制作の制作基礎をしっかりと行うことで、自分の力で最後まで作品を完成に導く。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・対象者の心を動かすホームページ制作作品完成度 ・作品のコーディング、要素の完成度 ・企画書の完成度 ・授業に対する積極的な姿勢 ・分岐点での発表に対する姿勢 			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 『ウェブ総合学習』 ウェブ制作に必要な内容を理解する。ウェブの制作工程を知り、どのようなスキルが必要かを理解する。今回の学習要素として JavaScript (Lightbox, GooglemapAPI) を紹介する。『ウェブデザイン要素の確認1』 デザイン事務所ホームページのデザインにおいて、多くのホームページを調べ、そのホームページの対象者と目的、良さ等を確認する。今回の制作課題ホームページの訴求対象者に対するウェブの切り口を見出だす。</p> <p>第2～3回 『ウェブデザイン要素の確認2』 1回の続き及び、導き出した切り口から、簡易デザインラフスケッチと具体的な構成サイトマップを制作する。また、イラストレータで企画書を制作する (PDF化)。</p> <p>第4回 【企画書の発表】 (PDF 提出含)</p> <p>第4～6回 『ウェブデザイン』 ウェブデザインにおける PHOTOSHOP の使い方を学ぶ。その後、個々での PHOTOSHOP によるウェブデザイン制作。(FLASH 画像素材・Lightbox の画像素材の制作も行う)</p> <p>第7回 【ウェブデザインの発表】</p> <p>第7～8回 『FLASH 制作』 LOADING 制作・画像が移り変わる簡易な FLASH の制作を覚える。自分の作品用の FLASH を制作する。</p> <p>第9回 【FLASH の発表】</p> <p>『HTML+CSS コーディング学習』 DREAMWAVER を用いて HTML+CSS でのホームページ制作の方法を覚える。</p> <p>第10回 『Javascript 利用学習』ギャラリースクリプト Lightbox2 での制作、Googlemap の導入方法を覚える。</p> <p>第10～14回 『ホームページの制作』 自分のサイトを HTML+CSS コーディング等の制作を行う。</p> <p>第14回 『発表前のグループ内討論』4名程度のグループに分け、各グループごとに個々の作品を見せ合い、それについて来訪者の気持ちで意見を出す。(良い面・悪い面すべてを言い、制作者は反論をしないでメモをする。)</p> <p>第15回 【総合発表】14回の討論を元に、各個人で発表を行い、その際に意見内容を発表する。</p>			
使用教科書 必要に応じて、プリント配布、ウェブ内データ配布			
自己学習の内容等アドバイス 第1回目の授業後、多くのウェブを来訪者の目となって訪れることで、ウェブクリエイターのスキルは格段に上がる。そのサイトが持つ対象者への目的、手段、来訪者の心の動きを考えることで、企画・デザイン・技術手段の方向性も見出せる。			

[授業科目名] デジタルデザインⅡ (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 祥子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ WEB サイト設計からユーザーに使いやすいサイトとは何かを考える。			
授業の概要 企画、設計を中心にサイト制作を学ぶ。 ペルソナをつかったサイトの企画、情報のグループ化、ユーザビリティ、アクセシビリティから「ユーザー視点のサイト」、「ユーザーの問題を解決するサイト」とは何かを考える。			
学生に対する評価の方法 作品評価（デジタル技術力、表現力）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ウェブサイトの仕組みと歴史 第2回 最近のウェブサイトの動向と可能性について <ul style="list-style-type: none"> ・ AR、ソーシャルメディア、クラウドコンピューティング、パイラルムービーなどを使ったマーケティングを考える ・ HTML5 と CSS3 による次世代 WEB 第3回 【サイトの企画】 そのWEB サイトを見るのは誰か？ <ul style="list-style-type: none"> ・ 伝えたい「事」と伝えたい「人」を考える 第4回 【サイトの企画】 検索エンジン最適化 (SEO) <ul style="list-style-type: none"> ・ WEB サイトへの誘導について考える 第5回 【サイトの企画】 ペルソナを考えたコンセプト <ul style="list-style-type: none"> ・ ペルソナを使用したコンセプトシートの制作 第6～7回 【サイトマップ制作】 見守り、導くナビゲーション <ul style="list-style-type: none"> ・ 人が迷うサイトと迷わないサイトを考える 第8～10回 【ワイヤーフレーム/デザイン制作】 WEB サイト配色の最新の動向 <ul style="list-style-type: none"> ・ ロジックから旬な配色を考える 第11～14回 【コーディング】 web 標準レイアウト (XHTML と CSS) <ul style="list-style-type: none"> ・ XHTML と CSS2 による web 標準レイアウト 第15回 【プレゼンテーション】 まとめ			
使用教科書 なし 教材はデータで配布			
自己学習の内容等アドバイス 様々なサイトを訪れる事。 様々な企画、デザインに触れる事は、独自の企画やデザインザインの手助けになりえる。			

[授業科目名] デジタルデザインⅡ (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 坂野 弘
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ウェブ制作の企画立案～制作の総合的な学習を修得する。特に企画デザインに重きを置く。前期の学習を踏まえ、生徒自身で企画構成し構築した自分のプロジェクトを制作する。基本命題は、『人をまきこむ movement (予定)』。ただし、1人で行うよりも少数名でグループになって企画立案を行う (予定)。			
授業の概要 ホームページ制作において、お客様の言いなりになって制作もできるが、ユーザーの立場になって、お客様へのアドバイスも大変重要となる。また、自分で企画を行い、持ち込みも考えられる。そう言った中で、生徒自身で企画立案できる能力を養う。特に作品の完成度よりも訴求性等を重視したい。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・企画立案シート ・作品の訴求力 ・プレゼンテーション時の表現力 ・授業に対する積極的な姿勢 ・分岐点での発表に対する姿勢 			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 『基礎学習』 ウェブ企画において、何が必要か。 基本題材・ターゲットの考え方・キーワード・キャッチコピー・素材・ユーザー意見・サイトマップ・ユーザビリティ・・・ 第2回 (チーム分け・リーダー決定) 『基本題材の検討』 何を企画するかを決める。【基本題材の発表】 第3～5回 『企画立案・サイト構成ラフデザイン』 基礎学習に基づいて、基本題材の企画書を制作する。サイトの流れをラフデザインで全ページ表現する。ターゲットユーザーの理想的な流れを考慮する。 第6回 『ユーザーテスト』 他の人にサイト構成ラフデザインで、自分の目的を達することができるかをテストする。 第6～10回 『企画構成修正・サイトデザイン』 ユーザーテストに基づいて、構成再構築する。また最終デザインを制作開始する。 第10回 【デザインの発表】 第10～14回 『コーディング制作開始』 第15回 【総合発表】			
使用教科書 必要に応じて、プリント配布、ウェブ内データ配布			
自己学習の内容等アドバイス ユーザーの導線を考え、企画構築できる能力を求めするため、特に3～5回は日々の生活の中で課題を頭に入れて、「おっ!」と思ったとき(ひらめいた時・素材を見つけた時など)に、すぐに記録してほしい。コーディングでわからない場合、ウェブで調べるか、本を探しに行くなど、自己解決できる能力を身につけることも大切なので、まずは、自分で動くように期待する。			

[授業科目名] 建築論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 川地 正数
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「建築は各時代の総合文化である。」と言われるが、現代を含めて優れた建築事例を提示しながら、それらの建築を生み出した時代精神や美意識を学ぶことを目標とする。			
授業の概要 上記の目標を達成する為に、歴史的建築や建築と環境の係り、また建築デザインの最近の動向等、優れた建築事例を出来るだけビジュアルな方法で提示しながら解説すると同時に、学生の理解度を確認する為に3回に渡りレポートを提出させる。			
学生に対する評価の方法 授業態度及び授業への参加態度：10% レポート3回提出：30%×3=90%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス、 建築とは（1）－建築の定義と建築の起源、建築の様式について 第2回 建築とは（2）－モダニズム建築について 第3回 建築とは（3）－建築の今日的課題・地球環境と建築1 第4回 建築とは（4）－建築の今日的課題・地球環境と建築2 第1回レポート課題提示 第5回 建築デザイン（1）－建築デザイン&建築計画学とは 第6回 建築デザイン（2）－モジュールとプロポーション 第7回 建築デザイン（3）－インテリアデザイン・光と色彩 第8回 建築デザイン（4）－建築とマテリアル（素材） 第9回 建築デザイン（5）－都市計画&ランドスケープデザイン 第2回レポート課題提示 第10回 住空間について－日本の住空間の変遷と今日の様々な住空間の型 第11回 最近の話題の建築（1）－国内事例 第12回 最近の話題の建築（2）－海外事例 第13回 木質構造の未来（1）－木は未来材料 第14回 木質構造の未来（2）－木の建築の可能性 第3回レポート課題提示 第15回 まとめ			
使用教科書 特に無し			
自己学習の内容等アドバイス 百聞は一見に如かずで、優れた建築事例を、時代を問わず、なるだけ自分の目で確かめることで、講義内容の理解がより深まる。			

[授業科目名] 空間演出論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 平光 無門
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 空間デザインをする上で必要な、図面（空間の形態をしめすもの）、仕上げ材・照明効果（空間の印象と質をきめるもの）などを決定するための判断がある程度できるようになることを到達目標とする。			
授業の概要 人間を取りまく空間を「住空間」「建築」「都市空間」に分類。それぞれの環境をいかに美しく快適に演出していくかについて学ぶ。住空間におけるインテリアデザイン、商空間におけるディスプレイ・照明効果を中心に、空間を演出する方法や要素について学ぶ。建築物や都市などの映像をみて、空間体験をする。			
学生に対する評価の方法 授業態度と提出レポート			
授業計画（回数ごとの内容等） ガイダンス 第1回 トゥーゲントハット邸の空間機能と近代建築材料 住空間 第2回 1.現代家具（おもに椅子）の形態と構造・素材の関係 第3回 2.インテリアのトレンド1：世界の家具・インテリア材料の展示会から 第4回 3.インテリアのトレンド2：世界の家具・インテリア材料の展示会から 第5回 3.色彩と色材：日本の伝統的な顔料・染料について 第6回 4.照明と北欧： 建築空間 第7回 1.自然環境と住宅空間 第8回 2.日本の名建築：日本建築匠の技、桂離宮の建築に使われている植物など 第9回 3.日本とアジアの名建築：三大仏教遺跡、日本建築の組み物（斗・肘木）など 第10回 4.ヨーロッパの名建築：近代の鉄とガラスの構造など 第11回 5.ヨーロッパ・中東・アフリカの名建築：キリスト教イスラム教、民家（地中海周辺の白い街並み） 都市空間 第12回 都市空間について1：ローマの都市の特徴 第13回 都市空間について2：パリの都市の特徴 第14回 都市空間について3：ベネチアの都市空間 第15回 試験またはレポート作成			
使用教科書 参考資料を配付			
自己学習の内容等アドバイス レポートが作成できるように、興味ある空間事例に対して調査しまとめておくと良い。			

[授業科目名] 材料学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男・金 昌郁
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 工業デザイン建築・環境のデザインを目的として、材料の特性について学ぶ。まずは木材・土・紙など一般的に材料とされているものについて構造・仕上げの両面から学び、次に木質材料・樹脂・アクリルなど様々な材料とその使い方について、使用実例を取り上げながら、材料選択の理由と材料表現の可能性とを探索。			
授業の概要 各テーマに沿って材料の使い方を講義、体験して工業デザイン建築・環境デザインの表現の幅を広げる。			
学生に対する評価の方法 授業態度、提出レポートの評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 木：使い方の実例を上げながら見て、触って考える。 第3回 木：フィールドワークからの写真を基に六つの感性を探索。 第4回 紙：使い方の実例を上げながら見て、触って考える。 第5回 土：使い方の実例を上げながら見て、触って考える。 第6回 樹脂：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第7回 樹脂：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第8回 アクリル：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第9回 ガラス：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第10回 コンクリート：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第11回 塗料：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第12回 塗料：実習 第13回 タイル：使い方の実例を上げながら、見て触って考える。 第14回 タイル：実習 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス メモ用のノートを持参し資料をファイルに保管すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
環境論		講義	小島 篤
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 環境の概念を持つためには、関係性のデザインを認識する必要がある。例えば建物が中心の「建築」、道路や樹が中心の「土木」、両者が出会う「景観」という概念がこの場合の関係性のデザインといえる。この授業では関係性の美しさをテーマに環境を捉えてみる。「都市環境」「社会環境」「自然環境」の3つのフィルターで環境を捉え、人と人の関係である社会、人と自然の関係などの多様な切り口から、美しい関係性を実現した世界の環境・空間を例に分析してみる			
授業の概要 ①授業計画に合ったテキストを毎回用意し、テーマ別の授業を行う。 ②都市環境という身近なテーマから、社会と環境、自然環境へとステップアップする内容とする。 ③質疑・応答を行ったり、現地取材を行い、レポートをまとめながら実例として理解する。			
学生に対する評価の方法 授業態度、提出レポートの評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 はじめに。環境論の成り立ちと現在の状況。 第2回 環境の始まり。地球の始まり。宇宙の始まり。すべて始まりから考えてみる。 第3回 都市環境Ⅰ 建築物から見た都市環境。建築物が作り出した都市環境はどう変化し現在にいたったのか。 第4回 都市環境Ⅱ インフラから見た都市環境 インフラは都市環境をどう変化させたか。今後の都市環境はどのようなインフラを必要とするのか。 第5回 都市環境Ⅲ 人間から見た都市環境。世界から見た都市環境。都市環境は人にどのような影響を与えるのか。世界の都市環境の実際。 第6回 都市環境Ⅳ 歴史から見た都市環境とこれからの都市環境。古来より都市を造り続けてきた人間は、今後よりよい都市環境を造ることができるのか。 第7回 社会環境Ⅰ 社会環境の今日までの歴史。人はどのように助け合い関係を結び、社会環境を構成してきたか。 第8回 社会環境Ⅱ 気候風土のもたらす社会環境。人種のもたらす社会環境。世界の地域の中で、自然環境の中で社会環境はどう造られたのか。 第9回 社会環境Ⅲ 宗教、思想のもたらす社会環境、精神世界の創り出す社会環境と現代社会の関わり合いを考える。 第10回 社会環境Ⅳ 人の創り出す社会環境。これから創り出す健全な社会環境のあり方を見つけ出す。 第11回 自然環境Ⅰ 古代、中世、近代における自然環境と人々との関わりを見る。自然環境が創り出す人間社会を考える。 第12回 自然環境Ⅱ 現代の自然環境と人々の関わりを世界規模で見る。人間が創り出した環境と自然が創り出した環境の接点を探る。 第13回 自然環境Ⅲ これからの世界と自然環境の関わり方を考える。人と自然の共生、関わり合いを考える。現状の様々な環境技術を把握する。 第14回 自然環境Ⅳ 未来における自然環境と人間の関わり方の新しい形の提案を行う。共に生き、共に成長する持続可能な未来を見る。 第15回 環境論のまとめ。レポートの提出			
使用教科書 ●テキストとして A3サイズ2～3ページ組みを配布			
自己学習の内容等アドバイス ●講義の内容だけにとどまらず、街や自然の中に自ら見つけ出すことを主要テーマとするため、実践的な実例学習を行う。			

[授業科目名] デザイン製図		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河村 暢夫・黄 ロビン
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間が住んでいる空間には色々な物体が存在する。デザインをしようとする平面や立体も含めて、紙の上に立体図形や平面図形として定着する必要がある。簡単な日用品の実測から数値を求めて三面図に置き換え製図する。ヘルメットについては3次元測定器を使用してデータを計測してPCにて図面処理をする。			
授業の概要 この授業ではデザインの表現に欠かせない図面の演習に重きを置き、製図台を使用して分かりやすく実践形式で進めていく。 また、3次元測定器を使用し3次元データをPCに入力して線図表現を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度と提出作品（製図）により習熟度を評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションと図学概論：製図用具と使い方の説明。 第2回 製図規格と線・文字の練習：JIS、ISO様式について解説する。正しい線の引き方と製図文字の練習。 第3回 図面の表記：寸法記入法、図の配置、断面図示、材料記号、特別な図示方法など 第4回 実測製図（小箱） 第5回 実測製図（小箱） 第6回 実測製図（立体物） 第8回 実測製図（立体物） 第9回 実測製図（立体物） 第10回 実測製図（立体物） 第11回 実測作業（ヘルメット）5名の班に別れて三次元測定器を使用して測定する。 第12回 線図作業（ヘルメット）データを整理してコンピュータで作図する。 第13回 線図作業（ヘルメット）データを整理してコンピュータで作図する。 第14回 線図作業（ヘルメット）プリントアウトして図面として完成する。 第15回 総合講評会 15回の成果物を講評する。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 手描きによる図面の練習を行うため自宅で反復練習を行うことが望ましい。			

[授業科目名] 工芸産業史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 伝統的工芸の伝承、産業としての工芸、職人の役割等、時代背景、地理的条件と製品の関わりを考え、工芸の知識を深めることをテーマとして、現代における工芸の目的、役割を考えながら、ものづくりの役割とこれからの方向を考えることを到達目標とする。			
授業の概要 最初に現代の工芸産業の現状や課題について述べ、ついで、各論として陶磁器、漆芸、金工などについてその技法や歴史について解説する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度とレポートによる			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 工芸とは何か 第2回 手づくりと機械化 第3回 工芸が成立する条件 第4回 工芸各論Ⅰ（陶磁器1：技法） 第5回 工芸各論Ⅱ（陶磁器2：歴史） 第6回 工芸各論Ⅲ（漆芸1：技法） 第7回 工芸各論Ⅳ（漆芸2：歴史） 第8回 工芸各論Ⅴ（金工1：技法） 第9回 工芸各論Ⅵ（金工2：歴史） 第10回 工芸各論Ⅶ（竹木工：技法と歴史） 第11回 工芸各論Ⅷ（ガラス：技法と歴史） 第12回 工芸各論Ⅸ（染織：技法と歴史） 第13回 工芸の振興 第14回 現代に置ける工芸の意義と役割 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 常に身の回りや店頭などにある工芸品を注目し、眺め、手を触れて親しい存在として意識すること。			

[授業科目名] 製品生産論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄 ロビン
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標：製品の生産体系とデザインの関わりを学ぶ。 テーマ：過去から現在まで人類の生産体系を鳥瞰してから、現代社会に対してデザインの在り方を論述・解説する。多変量分析などの科学ツールに基づき、これからのデザイン範囲拡大の可能性を探求する。			
授業の概要 デザインと産業生産体系との関わりを、産品、商品と用品の3つの側面から概述し、理解を深める。産業に依存するデザインでは、商品企画の立案から製造生産、販売使用まで一連の段階に起こる問題点を考えなければならぬ。そこで、ケーススタディや工場見学を通じて、歴史的考察並びに最新の産業事情を交えながら講述する。一方、立体空間デザイン演習課題の進行と同時に、実戦的なデザイン手法を紹介する。			
学生に対する評価の方法 提出レポート、学期末テストおよび授業への参画態度を評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 商品企画と製品デザイン／形態学分析法 2回 製品計画の段階でユーザ像を調査・把握する／5W1H法 3回 デザイン・開発のプロセス／イメージスケール分析法 4回 産業におけるデザイン作業とデザイン組織の位置づけ／イメージボード法 5回 産業におけるデザイン管理／KJ法 6回 材料計画／Hierarchy Chart 7回 包装計画／Rank Order Matrix 8回 生産技術概説／Interaction Factors Matrix 9回 歴史的考察：生産手段・体系の変遷／Interaction Network 10回 近代化以降、生産体系における職能分化の変遷と確立／調査票設計 11回 市場学概説1：マーケティング／アンケート調査 12回 市場学概説2：消費者行動／Conjoint分析 13回 エコデザイン概説 14回 ユニバーサルデザイン概説 15回 期末テスト			
使用教科書 プロダクトデザイン（日本インダストリアルデザイナー協会編）			
自己学習の内容等アドバイス 担当教員のHPや配布するプリント、指定教科書などを用い、予習と復習すること。			

[授業科目名] ヒューマンエンジニアリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 川原 啓嗣
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 授業で得た人間とその周囲の人工物（artifact）や生活環境（built environment）との関係性への理解および洞察をもとに、受講者が自発的に問題意識を持ち、人間中心のデザイン（設計）について考える力を養うことを到達目標とする。			
授業の概要 米国で生まれたヒューマンエンジニアリング（Human Engineering, Human Factors Engineering）は、わが国では一般に人間工学と訳されており、欧州では、エルゴノミクス（Ergonomics）と呼ばれている。本科目においては、人間とその周囲の人工物や生活環境の関係性において、「人間にとっての使いやすさ」の観点から、デザインに必要な知識を、工学、及び心理学、生理学、人類学等の学問的体系から修得・考察することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(30%)と、授業の10週目以降に行なうレポート提出により各授業項目の理解度(70%)を判定し、総合的に評価を行う。授業中の積極的な質疑応答も高く評価する。試験は行なわない。レポートの未提出は評価困難となるので要注意。また、所定の評価基準に達しない場合、レポートの再提出を求めることがある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ヒューマンエンジニアリングとは何か？（イントロダクション、授業の進め方、及び授業概要） 第2回 マン・マシン・インターフェイス（人間の情報処理の仕組み、機械の情報処理の仕組み、ほか） 第3回 人間の身体機能特性（視覚、聴覚、触覚、上肢、下肢、その他） 第4回 感覚と運動 第5回 作業と姿勢 第6回 人間と環境 第7回 人体とモジュール 第8回 人間生活工学と人間中心設計 第9回 問題分析および評価手法 第10回 アクセシビリティとユーザビリティ 第11回 製品開発プロセスにおけるユーザビリティ評価 第12回 ISO/IEC ガイド 71 第13回 UD マトリックス（商品開発・製品デザインのツールとしての活用） 第14回 ユニバーサルデザイン（超高齢社会へ向けて） 第15回 ヒューマンエンジニアリング総括（まとめ）			
使用教科書 【教科書】 「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」。ほか、適宜、適切な資料・文献を配付する。 【参考図書】 「人間工学概論」（光生館）、「おはなし人間工学」（日本規格協会）			
自己学習の内容等アドバイス 授業の中で適宜、テーマに即した参考図書を紹介する。それらを熟読の上、次週の授業へ備えてほしい。なお、授業中の積極的な質疑応答は高く評価する。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅠ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・金 昌郁・安藤 清 井垣 理史・野田 理吉・小島 篤
[単位数] 6	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 インテリア計画、クラフト雑貨
授業の到達目標及びテーマ デザインの手法と考え方を習得することを目標とする。 市場調査やすぐれたデザインの分析を通して、立体空間デザインの状況と目的を知る。デザインと設計におけるコンセプトの建て方、的確なデザイン提案、空間の認識などを大切にしながら、図面・模型・パースといった計画表現方法またはモデリング・試作製品の制作などのプレゼンテーション方法を学び、作品を制作する。			
授業の概要 立体空間デザインの領域はたいへん広く、対象物のスケールと用途によって、デザインの考え方も異なってくる。このシラバスでは環境空間とプロダクトとクリエイトのデザイン領域のうち、環境空間とクリエイトの領域の授業についてのものである。住空間、ディスプレイ、家具、環境用具のデザインをテーマにしたデザイン実習をおこなう。			
学生に対する評価の方法 日常の受講態度と、提出レポートや制作作品の内容および表現方法で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 立体空間デザインⅠには多くのジャンルのデザイン課題が含まれている。この中でゼミ的授業の「インテリア計画」（環境空間領域）、「クラフト雑貨」（クリエイト領域）のいずれかを選択し、他の課題的授業を2～3選択する。ゼミ的授業は後期の立体空間デザインⅡでも同じものを選択すること。 「インテリア計画」（ゼミ的授業） （平光） 第1～10回 インテリア講義と個別研究テーマの面談 第1回 家具デザインと建築家・デザイナー 第2回 風土と歴史における住まい 第3回 住宅の洋風化と集住化 第4回 現代の住まいとライフスタイル 第5回 住宅の構法と構造 第6回 住宅の外周部位（屋根・壁・開口部）の構造 第7回 住宅の内装部位（仕上・造作・建具）の構成 第8回 光・熱・空気など室内環境の計画 第9回 人間工学とバリアフリー 第10回 電気・空調・照明・給排水・衛星などの設備・機器 第11～15回 インテリア施工図の製図と個別研究テーマの面談 第11・12回 製図、平面図（照明器具配置などの天井伏図を含む） 第13回 製図、透視図 第14回 製図、家具施工図 第15回 内装仕上げ一覧表 「クラフト雑貨」（ゼミ的授業） （金） 第1～7回 特定のテーマ（ex. こども、健康など）に対して、各自のデザイン表現による制作調査・展開 第8～15回 家具（スツール）の研究、学生出展イベント（東京デザイナーズウィーク）の作品デザイン。授業期間内ではデザインまで。出展者は夏期休暇中に実制作。			

「建築空間のデザイン」

(野田)

- 第1～4回 個人を想定した部屋（最小単位空間）のデザイン
- 第5～7回 形をイメージした空間（ex. 細長い空間）のデザイン
- 第8～15回 機能空間（ex. 食空間など）のデザイン

「商空間のデザイン」

(安藤・井垣)

店舗のデザイン：飲食店の計画

- 第1回 課題説明、調査
- 第2回 飲食店の研究
- 第3～4回 調査発表、イメージシート作成、基礎技術習得（透視図法）
- 第5～6回 イメージシート発表、プラン作成、基礎技術習得（透視図法）
- 第7～8回 デザインプラン等発表、デザイン決定、基礎技術習得（透視図法）
- 第9～14回 制作（プラン・模型等）、個別チェック
- 第15回 講評会

「公共空間のデザイン」

(小島)

モニュメントのデザイン：まちの公園内のモニュメント（記念碑）

- 第1回 課題説明（用途地域等についての講義等）、資料収集
- 第2回 現地調査（撮影・測量等）
- 第3～6回 課題・アイデア、エスキース作成（植栽・施設の配置計画を含む）
- 第7回 講評会

ストリートファニチャーのデザイン：テーマ性のある街路や、個性のある街並みまたは公園に設置

- 第8回 課題説明（案内サイン・照明・ベンチ・車止め・バスストップを必須）
- 第9回 アイデアスケッチ
- 第10回 ワークショップ
- 第11～14回 プレゼン作業
- 第15回 講評会

いずれの課題も講義や個別相談をくりかえし、製図・パース・模型・実制作品などを制作してプレゼンテーションを行い、講評や審査をする。

使用教科書

「住まいとインテリアデザイン」彰国社刊

自己学習の内容等アドバイス

日常的に環境空間デザインの情報に関心を持ち、トレンドを知るように。

[授業科目名] 立体空間デザインⅠ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 木村 一男・河村 暢夫 黄 ロビン・阿萬 芳和
[単位数] 6	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ID
授業の到達目標及びテーマ 目標：プロダクトデザインの基本姿勢とプロセスを学ぶ。機能と形態との関わりに重点を置く。 テーマ：インダストリアルデザイン（ID）は社会関心を中心に課題を取り組み問題解決につなぐ。 クラフトは物づくりの基本から学ぶ、素材と加工法を研究して用途に応じたデザインを展開する。 雑貨は感性要素を加え、生活に潤いをもたらすプロダクトデザインを追求する。			
授業の概要 身の回りの生活用品を課題として取り上げ、個人の使用経験に基づく問題点を抽出・記述して、競合商品を分析・研究し、望ましい機能をまとめて形態に反映するデザインを演習する。 なお、機械製図やレンダリング、モデリングなどの表現技法も演習中に説明する。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の資質、および授業への参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 第一課題、オリエンテーション 2回 デザイン調査：材料選定、材料計画 3回 アイデア展開 4回 コンセプト作成 5回 デザイン展開 Sketch 6回 検討用模型の試作 7回 企画パネル作成、検討用模型の試作 8回 プレゼンテーション及び評価 9回 第二課題、オリエンテーション 10回 デザイン調査：材料選定、材料計画 11回 アイデア展開 12回 コンセプト作成 13回 検討用模型の試作 14回 企画パネル作成、検討用模型の試作 15回 プレゼンテーション及び講評			
使用教科書 参考図書： プロダクトデザイン（日本インダストリアルデザイナー協会編）、 アイデア&プロセスの法則 プロダクトデザイン（毎日コミュニケーションズ）			
自己学習の内容等アドバイス 課題進行中にはよく教員とコミュニケーションをとること。特に、構想展開や制作の段階には。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫・木村 一男・黄 ロビン 阿萬 芳和・片田 善衛・江口 倫郎
[単位数] 6	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標：前期まで習得したプロダクトデザインの基本能力に基づき、更に人間工学や生産技術等工学的要素を取り組む専門的なデザイン展開を追求する。 テーマ：●インダストリアルデザイン（ID）は、ユニバーサルデザインやエコデザインなどの概念を意識しながら、公共デザインなどを学ぶ。 ●クラフトデザインは量産を前提とする作品を制作し、道具を美しくする感性力を養う。 ●雑貨デザインはユーザビリティを重点に置きながら、実践的なデザイン手法を身につける。			
授業の概要 基本的に、三つのゼミに分けて各担当教員が中心になって各自の課題で指導を行う。 一方、調査・分析能力、表現技法、プレゼンテーション力などデザインテクニックを向上するために、ゼミを越えて「学食」を課題として並行に進行し、高いレベルの技法を習得する。 社会・産業からの評価をもらうために、全ての作品をポートフォリオに纏めて、進級展（Contact 展）に出展することを義務付けている。なお、最終発表会には合同で教員が評価する。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の資質、および授業の出席状況を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 第一課題、オリエンテーション 2回 デザイン調査：材料選定、材料計画 3回 アイデア展開 4回 コンセプト作成 5回 デザイン展開 Sketch 6回 検討用模型の試作 7回 企画パネル作成、検討用模型の試作 8回 プレゼンテーション及び評価 9回 第二課題、オリエンテーション 10回 デザイン調査：材料選定、材料計画 11回 アイデア展開 12回 コンセプト作成 13回 検討用模型の試作 14回 企画パネル作成、検討用模型の試作 15回 合同プレゼンテーション及び講評			
使用教科書 レジユメなどで必要の都度に配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 課題進行中にはよく教員とコミュニケーションをとること。特に、構想展開や制作の段階には。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・金 昌郁・安藤 清 井垣 理史・野田 理吉・小島 篤
[単位数] 6	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 環境空間デザインの考え方を習得することを目標とする。 市場調査やすぐれたデザインの分析を通して、立体空間デザインの状況と目的を知る。デザインと設計におけるコンセプトの建て方、的確なデザイン提案、空間の認識などを大切にしながら、図面・模型・パースといった計画表現方法またはモデリング・試作製品の制作などのプレゼンテーション方法を学び、作品を制作する。			
授業の概要 立体空間デザインの領域はたいへん広く、対象物のスケールと用途によって、デザインの考え方も異なってくる。このシラバスでは環境空間とプロダクトとクリエイトのデザイン領域のうち、環境空間とクリエイトの領域の授業についてのものである。建築空間、インテリア、照明のデザインをテーマにしたデザイン実習をおこなう。デザインの手法と考え方を習得することを目標とする。 フィールドワークとして、環境デザインを目的とした、環境調査や市民参加の都市づくりの活動などの研究をおこなう。			
学生に対する評価の方法 日常の受講態度と、提出レポートおよび制作作品の内容と表現方法で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 立体空間デザインⅠには多くのジャンルのデザイン課題が含まれている。この中でゼミ的授業の「インテリア計画」（環境空間領域）、「家具」（クリエイト領域）のいずれかを選択し、他の課題的授業を2～3選択する。ゼミ的授業は後期の立体空間デザインⅡでも同じものを選択すること。 「インテリア計画」（ゼミ的授業） （平光） 第1～15回 個別研究テーマの面談 前期の立体空間デザインⅠにて取り上げた個別研究テーマを大別してグループをつくり、グループ単位での面談を続ける。面談は前回以降の報告と教員よりの助言を個別に行う。面談中以外の学生は各自のテーマに対する調査・分析や制作・まとめの作業を進める。 参考として、前年度のグループは「住宅・都市の研究」「インテリア・照明表現」の2グループで、個別研究テーマの例としては、「住宅の木組」「循環型住宅」「LRT交通」「都市再開発」「セットデザイン」などがあつた。 面談の中で、ポートフォリオの制作指導も行う。 「家具」（ゼミ的授業） （金） 第1～8回 家具雑貨のデザイン 第11～15回 クラフトデザインの研究テーマの調査			

「住空間のデザイン」

(野田)

第1～11回 敷地を想定した住宅のデザイン。

第1回 即日課題

第2回 即日課題

第3・4回 個別相談

第5回 中間講評会

第6・7回 個別相談

第8回 最終講評会

第9～14回 照明のデザイン表現：「灯り」のテーマに対して、照明器具、照明効果、照明計画など各自のデザイン表現による制作。調査・展開・計画・制作

第15回 講評会

「都市空間のデザイン」

(小島)

都市再生のキーワード研究：納屋橋地区周辺の再生プロジェクト

- ・市街地にある貴重な堀川を再評価
- ・歴史の記憶と共に、堀川の水辺そのものの魅力の再生

第1回 現地調査（測量・撮影）、課題を見つける

第2・3回 グループ分け、第1回ワークショップ：課題のまとめ

第4・5回 第2回ワークショップ：課題から提案

第6回 第3回ワークショップ：提案のまとめ

第7回 最終提案に向けてプレゼンの作業

第8回 土台（スケール決め）

第9回 ワーキング

第10回 グループ別プレゼン用パネルの完成

第11回 模型の仕上げ、パネルの仕上げ

第12回 グループ別プレゼン、講評

第13～15回 展示準備（制作作品を納屋橋のギャラリーに展示、行政または地域にプレゼンテーション）

「商空間のデザイン」

(安藤・井垣)

店舗のデザイン：ヘアサロン施設の計画

第1回 課題説明、調査

第2回 物販店の研究

第3回 商業施設、ディスプレイの研究（確認～許可等の法令の基準など）

第9回 調査発表、イメージシート作成、基礎技術習得（透視図法）

第10回 イメージシート発表、イメージシート作成、基礎技術習得（透視図法）

第11回 イメージシート発表、プラン・コンセプト作成、基礎技術習得（透視図法）

第12回 デザインプラン等発表、デザイン・コンセプト決定、基礎技術習得（透視図法）

第13・14回 制作（プラン・模型等）、個別チェック

第15回 講評会

使用教科書

特になし

自己学習の内容等アドバイス

日常的に環境空間デザインの情報に関心を持ち、トレンドを知るように。

[授業科目名] デジタルデザイン I (立体空間)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平尾 正俊
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 インテリア計画、クラフト雑貨
授業の到達目標及びテーマ CADは、デザインプロセスにおけるシミュレーションや各種図面の作成・編集に欠かせない道具となっている。本授業では、CADによる2D図形作成と3Dモデリングの仕組みを理解し、その操作方法と表現方法を学ぶ。			
授業の概要 2D/3D CAD の基本操作とその応用として、Vector Works による各種図面作成や家具などの3D パース作成を行い、2D と 3D による図面を編集して効果的なプレゼンテーションを行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度、プレゼンテーションおよび提出作品による目標達成度			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 設計製図の目的と図法、CAD の概要と Vector Works の基本操作 第2回 2D オブジェクトの編集と加工 第3回 各種機能の使い方とデータ管理の方法 第4回 住宅の平面図 第5回 住宅の平面図 第6回 住宅の立面図、断面図 第7回 課題/飲食店の平面図 第8回 課題/飲食店の平面図 第9回 3D CAD の基本操作とモデリング 第10回 レンダリング (Render Works) の方法と光源などの各種設定 第11回 画像編集、文字組み、レイアウトなどプレゼンテーションの表現技法 第12回 課題/家具の三面図 第13回 課題/家具の3Dパース 第14回 課題/家具の3Dパース 第15回 作品講評会、まとめ			
使用教科書 適宜必要に応じてプリント配布			
自己学習の内容等アドバイス CAD を習得するには建築製図の図法表現等の基礎知識が必要であることから、2年次ベーシックデザインの教科書で製図法関連の項目をしっかりと理解しておくこと。			

[授業科目名] デジタルデザイン I (立体空間)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 修作
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ID
授業の到達目標及びテーマ デザイン表現のベースを形成するスキルであるデジタル表現において 2D、3DCAD ソフトによる立体の表現技術を習得する。 課題や、ポートフォリオ制作、コンペなどにおいて、またさらには就職活動における自己アピールスキルとして、「仕事で通用する」スキル習得を目指す。			
授業の概要 まず 2D 表現 (イラストレータ、フォトショップ) による形状、色彩、テクスチャ、立体に見せるための陰影表現方法を学び、ついで 3DCAD (ライノセラス) を用いて自由に形状が表現できるよう基本から学ぶ。			
学生に対する評価の方法 1.課題提出及びその習熟度 2.課題に対する取り組みの姿勢 などを元に総合的に判断			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 授業概要、スケジュール、評価方法、の説明 ・ 立体表現とは ・ ペンツールの練習 ・ 陰影表現の基礎 第 2 回 イラストレータ課題 1_1 (筆記具) 第 3 回 イラストレータ課題 1_2 (筆記具) 第 4 回 イラストレータ課題 2_1 (家具) 第 5 回 イラストレータ課題 2_2 (家具) 第 6 回 イラストレータ課題 2_3 (家具) 第 7 回 ライノセラスの解説、概要、オペレーション基礎 第 8 回 ライノセラス基礎 第 9 回 ライノセラス課題 1_1 (マウス) 第 10 回 ライノセラス課題 1_2 (マウス) 第 11 回 ライノセラス課題 1_3 (マウス) 第 12 回 ライノセラス課題 1_4 (マウス) 第 13 回 ライノセラス課題 2_1 (家具) 第 14 回 ライノセラス課題 2_2 (家具) 第 15 回 ライノセラス課題 2_3 (家具)			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 出来る限り復習を行い、かつ他の課題でのデザインを表現してみること。			

[授業科目名] デジタルデザインⅡ（立体空間）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中山 則和
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ CADの操作方法から企画立案の方法、各種図面やパースができるようになる。			
授業の概要 空間クリエイターとして必要なスキルや効果的なプレゼンテーションの表現方法を習得する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度、作品、目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 インテリアパース（3D）の概要 第2回 企画立案の方法論 1 第3回 企画立案の方法論 2 第4回 企画立案演習1 第5回 企画立案演習2 第6回 企画立案演習3 第7回 3Dパースの作成-1 第8回 3Dパースの作成-2 第9回 3Dパースの作成-3 第10回 3Dパースの作成-4 第11回 3Dパースの作成-5 第12回 3Dパースの作成-6 第13回 3Dパースの作成7 第14回 3Dパースの作成-8 第15回 まとめ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 建物やお店を空間クリエイターの眼で見してみる。			

[授業科目名] デジタルデザインⅡ（立体空間）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 修作
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザイン表現のベースとなるデジタル表現において 3DCAD ソフトライノセラスの表現技術をさらに高いレベルで習得する。 就職活動また企業における実戦の中で十分に使いこなせ、自分の武器となるレベルを目指す。			
授業の概要 基礎教程を終えた段階として、いくつかのツールを組み合わせることで複雑な形状を仕上げていくことを学ぶ。またそのモノ単体だけでなく置かれているシーンなども制作し、より説得力あるプレゼンテーションのための方法も学ぶ			
学生に対する評価の方法 1.課題提出及びその習熟度 2.課題に対する取り組みの姿勢 などを元に総合的に判断			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 第1課題（2つのサーフェイスからなるマウスのモデリング） 第2回 第1課題-2（2つのサーフェイスからなるマウスのモデリング） 第3回 第1課題-3（2つのサーフェイスからなるマウスのモデリング） 第4回 第1課題-4（2つのサーフェイスからなるマウスのモデリング）提出 第5回 第2課題（シェーバー） 第6回 第2課題-2（シェーバー） 第7回 第2課題-3（シェーバー） 第8回 第2課題-4（シェーバー）提出 第9回 第3課題（ドアハンドル） 第10回 第3課題-2（ドアハンドル） 第11回 第3課題-3（ドアハンドル）提出 第12回 第4課題（Yチェア） 第13回 第4課題-1（Yチェア） 第14回 第4課題-2（Yチェア） 第15回 第4課題-3（Yチェア）提出			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の復習。店頭や雑誌、カタログなどで製品を見たとき、これほどの様に 3D 化するのか考える習慣を持つ。自分のデザインの表現手法として実際に活用する。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デザイン調査方法論		講義	森本 健
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ			
この授業では、市場の動向やユーザーのニーズをどのように調査するか、またこれらの情報をどのように分析するか、そして商品や製品の開発にどのように反映させていけば良いか、企画提案書作りのワークショップを交えデザインの調査手法や商品企画の視点、手法などについて学ぶ。			
授業の概要			
実社会に出てデザインをおこなう上で、調査・分析を行うことは大変重要である。デザインはひとつの作品ではあるが、その目的には「用」が含まれている。デザインはデザイナーのニーズで作られるのではなく、本来、ユーザーのニーズに合わせて作られるべきものである。実社会で使用されているマーケティングリサーチの代表的手法や理論を解説し、調査手法の知識習得に努める。企画提案書作りのワークショップにより、実践的な商品企画、デザイン開発を体験させる。			
学生に対する評価の方法			
企画提案書の作成、発表に対する評価と考査試験による評価			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回1回 商品企画における重要な視点とニーズの構造 何のためにデザインをするのか？誰のためにするのか？ 商品企画における大切な視点を考察 2回 私たちを取り巻く生活用品市場の動向とニーズの分析。宿題/学生の気になる商品をレポート 時代が変わることにより変化した商品。生活関連用品（衣料、生活雑貨、食料品）と消費者ニーズの相 関関係を考察。価格か、機能か、流行か。学生の気になる商品を発表 3回 これまでの売れ筋商品、ヒット商品から見た市場の動向とニーズの分析 大型生活用品（家具、家庭電器製品） 車輛（自動車、自転車、オートバイ）、住宅（一戸住宅、マンション）と消費者 ニーズの相関関係を考察。 4回 商品企画の基本プロセスとロングセラー商品の要件。ヒット商品やロングセラー商品の背景を考察 宿題/G マーク商品についてレポート 5回 マーケティングリサーチのプロセス 調査の手法と特性、マーケティングリサーチの課題について考察。G マーク商品についてレポート発表。 6回 企画提案書の作成演習① 企画書づくりの重要な視点について解説。選択テーマに基づきグループを構成して企画書づくりをする。 7回 企画提案書の発表 商品企画テーマの選定、現状と問題点について、今後の方向性について、新規の企画提案について発表。 8回 模範的なプレゼンテーションボード（企画書）について 模範的企画書の事例紹介 9回 ブランドとブランド戦略について ブランドの必要性とその本質、プライベートブランドとナショナルブランドについて 10回 企画提案書の作成演習② グループを構成してテーマを協議し新規企画提案書の作成について検討を行なう。 11回 企画提案書の発表② だ1回企画提案書の調査・発表から進化した企画書を作成し、発表する。 12回 企画提案書の作成・発表についての総括。 企画提案書のテーマ選択と現状と問題点について考察し、今後の方向性、新企画提案について解説。 13回 マーケティング戦略、製品戦略、価格戦略、流通戦略、プロモーション戦略、広告戦略について各戦 略手法の総合的なまとめ。 14回 デザイン調査方法論のまとめ。 15回 考査試験			
使用教科書			
参考図書 わかる!図解マーケティング ダイアモンド社（編者・刊） ビジネス企画書の作成技法 日本経済新聞社刊 他			
自己学習の内容等アドバイス			
毎回講義終了時に次回発表課題(宿題)として、学生に調査テーマを与えてレポート化して提出させる。次の週の講義に内容を見て学生に発表させる。レポート内容について評価し作成ポイントや効果的な発表についてアドバイスする。企画提案書の作成においては、複数の学生でテーマについて分析することにより広い視点で物事を捉えるよう指導し、調査、発表における自己の役割分担について認識させる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
商品企画論		講義	加藤 純
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 成熟市場において新たな価値を担う商品やサービスの企画は現代の企業活動において最も重要な取り組みである。商品企画は企業のマーケティング活動の一環であり、社会に価値提供ができる優れたデザインはそうした一連の取り組みの下で生み出される。デザインを通じた価値創出にはマーケティングの視点や知識が必要不可欠であり、中核を成す商品企画の要件を学び、デザインに展開する手法を身につける。			
授業の概要 商品企画のベースとなるマーケティングの知識を学びながら、学生が個別に精通した情報フィールドを明らかにし、これに基づいた現実性の高い商品企画立案スキルを身につける。			
学生に対する評価の方法 毎回配布し回収するワークシートの作成内容のレベルを評価する。 授業を通じて学生自身が個別に作成する商品企画内容の完成度を評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 企業の存在と目的についての理解 第2回 社会構造の変化と企業家精神についての理解 4つの指標による自己分析の実施 第3回 社会標準となった商品開発事例2題の分析を通じた商品企画視点の理解 第4回 戦略立案の基本についての理解 自己の情報環境について分析 第5回 購買者心理の基本についての理解 消費や商品の情報について自己の得意領域の確認 第6回 購買行動の基本についての理解 得意領域の商品やサービス提供企業の戦略分析 第7回 イノベーター理論についての理解 価値観クラスターについての自己分析 第8回 ターゲティングとポジショニング手法の基本についての理解 第9回 個別の商品企画ジャンル決定に基づくポジショニング手法の実践 第10回 商品企画基本項目に基づく個別の商品企画の具体化手法についての理解 第11回 戦略視点と各分析ツールを踏まえた個別の商品企画シートの作成 第12回 商品企画の内容構成の個別指導 ポジショニングマップの詳細分析 第13回 商品企画の内容構成の個別指導 ターゲティング適正の詳細分析 第14回 企画プレゼンテーションメソッドの基本についての理解 第15回 商品企画プレゼンテーションの実施			
使用教科書 「絵でみるマーケティングのしくみ」日本能率協会マネージメントセンター			
自己学習の内容等アドバイス 毎回配布のワークシートに沿って課題内容を行い、次週の授業にて発表し提出する。			

[授業科目名] 人間・生態学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 川原 啓嗣
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 授業で得た人間の生態と環境（地球環境、生活環境、社会環境等）との関係性への理解および洞察をもとに、受講者が自発的に問題意識を持ち、人と地球の未来のために持続可能な共生社会を創造するにはどうしたらよいかを考える力を養うことを到達目標とする。			
授業の概要 生物学の一分野である生態学（Ecology）は、近年、地球環境保全の観点から急速に注目を集めている学問体系だが、生物の頂点に立つ人類（人間）との関係性を抜きにしては語れないのが事実である。本科目では、人間の生態と環境（地球環境、生活環境、社会環境等）の関わりにおいて、デザイン（設計）に必要な知識を、社会学、及び生物学、認知心理学、文化人類学等の学問的体系から修得・考察することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(30%)と、授業の10週目以降に行なうレポート提出により各授業項目の理解度(70%)を判定し、総合的に評価を行う。授業中の積極的な質疑応答も高く評価する。試験は行なわない。レポートの未提出は評価困難となるので要注意。また、所定の評価基準に達しない場合、レポートの再提出を求めることがある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 人間・生態学とは何か？（イントロダクション、授業の進め方、及び授業概要） 第2回 生態学における多様性 第3回 人間の行動（人の行動様式、群集心理、ほか） 第4回 人間と社会（個人と群れとの関係、家族やコミュニティの概念、帰属意識、ほか） 第5回 エコロジー（生態系保全） 第6回 人間と環境（技術の進歩が引き起こした環境汚染・公害） 第7回 人間と文化（文化人類学からのアプローチ） 第8回 アフォーダンス（認知心理学からのアプローチ） 第9回 成長の限界（資源の枯渇） 第10回 人口爆発と食料危機 第11回 地球温暖化（人間の生産活動と地球気候との関係） 第12回 サステイナブルデザイン 第13回 ソーシャルマーケティング 第14回 ソーシャルデザインマネジメント 第15回 人と地球のためのデザイン（まとめ）			
使用教科書 教科書としては特に定めない。適宜、適切な資料・文献を配付する。 【参考図書】 「かくれた次元」（みすず書房）、「誰のためのデザイン？」（新曜社）「成長の限界」（ダイヤモンド社）			
自己学習の内容等アドバイス 授業の中で適宜、テーマに即した参考図書を紹介する。それらを熟読の上、次週の授業へ備えてほしい。なお、授業中の積極的な質疑応答は高く評価する。			

[授業科目名] ビジュアルコミュニケーション デザインⅢ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷 恭二・尹 成齊・加藤 純 新家 春二・森本 健・山内 瞬葉
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デザイナーとしての社会での役割、大切さを認識すると共にポートフォリオの充実を図る			
授業の概要 視覚伝達デザインは媒体を通し、情報を伝え、人や社会の行動を喚起する。実社会を目前にした4学年に公共広告の制作を通し、デザイナーの社会での役割、大切さを認識すると共に、制作現場と同様にグループで役割分担をして制作することで協調性を養う。また、ポスターコンペ、産学共同事業なども積極的に取り入れるとともにポートフォリオ制作も行う。			
学生に対する評価の方法 作品評価（コンセプトの企画力、ビジュアルの発想力、全媒体の統一性）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ・公共広告の役割と必要性（社会問題へのデザインからのアプローチ） ※コンペ等が発生した場合テーマ変更を行います。 第2回 リサーチ、分析（問題の現状把握と発生要員の究明） 第3回 ・キャンペーンテーマの設定（問題の現状把握と発生要員の究明） コンセプト立案（訴求ポイントの明確化） 第4回 ・広告計画立案（キャンペーン展開方法、媒体の選択） 第5回 ・企画案のプレゼンテーション（社会への提案性、到達力、問題解決の方向性） 第6回 ・ビジュアル計画（スローガン、キービジュアルの検討） 第7回 ・制作 1.（デザイン、コピー、イラスト、写真などの役割分担） 第8回 ・制作 2.（各エレメントの統合、レイアウト） 第9回 ・制作 3.（各媒体のフィニッシュ） 第10回 ・プレゼンテーション 第11回 ・ポートフォリオ制作 1.（各作品内容クオリティの見直し、形態の独自性、他） 第12回 ・ポートフォリオ制作 2. 第13回 ・ポートフォリオ制作 3. 第14回 ・ポートフォリオ制作 4. 第15回 ・ポートフォリオ制作 5.			
使用教科書 参考図書／アートディレクター入門（電通）、アートディレクターの発想・現場・定着（メディアファクトリー） アートディレクションツディ（講談社）			
自己学習の内容等アドバイス 研究内容、テーマ設定の状況に応じて授業外にて各自資料収集			

[授業科目名] ビジュアルコミュニケーション デザインⅣ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷 恭二・小川 明生・加藤 純 丹羽 哲男・小島 徳太郎・本間 誠久 服部 行晴・渡邊 勝則
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ コンピュータの発達によりますます進化し、多様化してきているビジュアルコミュニケーションデザインの領域において、実社会に出てデザイン活動を持続の上で必要なデザイン知識とスキルを習得する。企業のブランディング、パッケージデザイン、広告のためのイラストレーション、販促としてのキャラクターデザイン等について学ぶ。			
授業の概要 実社会における商品開発、販売促進計画を想定して、企画から実施にいたるデザインプロセスを、企画書作成から始めて最終のデザインツールの制作までを一貫して行う。企画書作成やデザイン制作において、中間プレゼンテーションを行うことで段階的なデザインチェックが出来る。これにより完成度の高い企画書、販売促進計画書、最終デザインの作成を目指し指導する。			
学生に対する評価の方法 企画提案書(論理的構成力、分析能力、実現性)とデザイン作品(新規性・独創性、表現力、技術力、訴求力、)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 テーマ選択と条件設定 第2回 テーマにかかる現状についてデザインの視点から調査。 第3回 現状のデザインの問題点について抽出 第4回 デザイン提案の方向性を検討する。 第5回 企画提案書としてまとめる。 第6回 中間プレゼンテーションとチェック 第7回 中間プレゼンテーションに出されたデザイン課題を修正して最終企画提案書にまとめる。 第8回 具体的なデザイン制作 第9回 具体的なデザイン制作 第10回 第2回中間プレゼンテーションとチェック 第11回 中間プレゼンテーション時における課題と問題点をチェックしデザイン制作 第12回 具体的なデザイン制作 第13回 具体的なデザイン制作 第14回 具体的なデザイン制作 第15回 最終プレゼンテーションと課題提出			
使用教科書 参考図書/JAGDA 教科書(VISUAL DESIGN 1～5)			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業において、前回の授業並びに授業外の時間でどのぐらい進化したかについてチェックを受けられるよう準備する。授業開始時のチェックを受けることを義務化し予習、復習の徹底を図る。			

[授業科目名] デジタルデザインⅢ (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 柴田 知司・杉浦 孝明
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 今日におけるデジタルデザイン表現は、コンピュータのデザイン力とネットワークの通信力の発展に伴い、全体・個体で発信+表現できる情報が多様化し、コミュニケーションの手段や技術もより複雑に変化してきました。本授業では、情報をどのように企画・設計・加工し、デザインとしてどのような手段で伝播するのかを考えるにあたり、人とモノゴトの関係性を深く掘り下げ、生活の中に溢れる情報郡を整理し、平面的なメディア表現を超えた「視覚への変換」を図るとともに、対象者に分かりやすくメッセージを提示する方法を探ります。			
授業の概要 モーショングラフィックデザイン、インタラクティブ(双方向) デザインを主なキーワードに、テキスト・グラフィック・サウンド・ムービー・アニメーションを組み合わせるコンテンツを制作するソフトウェアのプログラミングの基本から応用・発展までの操作・制作技術を修得します。また、後期から本格的に始動する卒業制作に向けて、プレゼンテーションの手法やデジタル機器の利用法を学ぶとともに、デジタルメディアを利用した作品制作の企画・発案を可能とし、表現に至る際に生じる技術的な問題やプロセスの指導も実施します。			
学生に対する評価の方法 授業態度・修得度・作品評価 ※操作演習を中心に進行するため、欠席や遅刻は控えるようにして下さい。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 全体オリエンテーション：席決め/リテラシー調査/授業概要説明 第01回 デジタルデザインレクチャー01：概念・背景/コンテンツ/ハードウェア・ソフトウェア 第02回 ソフトウェアプログラミング01[導入]：Adobe Flash について/概要・機能/パネル・ツール 第01回 ソフトウェアプログラミング02[基礎]：テキスト/オブジェクト・シンボル 第03回 ソフトウェアプログラミング03[基礎]：モーショントウイーン・イーディング 第01回 ソフトウェアプログラミング04[応用]：イメージ・ムービー・サウンド 第04回 ソフトウェアプログラミング05[応用]：フレームアニメーション 第01回 ソフトウェアプログラミング06[基礎]：Action Script 概要・機能 第05回 ソフトウェアプログラミング07[基礎]：Action Script プログラミング 第01回 ソフトウェアプログラミング08[基礎]：Action Script アクション 第06回 ソフトウェアプログラミング09[応用]：Action Script アニメーション 第01回 ソフトウェアプログラミング10[応用]：Action Script インタラクティブムービー 第07回 課題オリエンテーション[説明]：「情報デザイン：視覚への変換」(概要説明/作品紹介/進行法) 第01回 課題レクチャー01[手法]：動的な表現(動き・プロセスのデザイン) 第08回 課題レクチャー02[手法]：情報の取得(情報の分析・整理) 第01回 課題レクチャー03[手法]：情報の変換(情報の視覚化) 第09回 デジタルデザインレクチャー02：卒業制作作品の発想+表現指導/プレゼンテーションの方法 第01回 デジタルデザインレクチャー03：課題企画発案+素材収集/プレゼンテーションツールの作成 第10回 中間プレゼンテーション[発表]：「情報デザイン：視覚への変換」(テーマ/コンセプト/手法) 第11回 課題プロダクション01[制作]：「情報デザイン：視覚への変換」(素材収集/プロセスの組立) 第12回 課題プロダクション02[制作]：「情報デザイン：視覚への変換」(制作作業/進行状況チェック) 第13回 課題プロダクション03[制作]：「情報デザイン：視覚への変換」(編集作業/ブラッシュアップ) 第14回 最終プレゼンテーション[発表]：「情報デザイン：視覚への変換」(テーマ/コンセプト/手法) 第15回 デジタルデザインレクチャー04：卒業制作作品の技術+プロセス指導(デジタル機器の利用法)			
使用教科書 演習プリント・参考文献・作品例は授業内において適宜配付・提示・紹介します。 ※第02週目以降はプリントを挟む用のA4ファイルとデータ保存用のUSBフラッシュメモリを持参下さい。			
自己学習の内容等アドバイス 操作演習に関しては授業内容をよく理解し、修得に至るまで繰り返し復習を実施するようにして下さい。 課題制作に関しては興味のある身の回りのモノ・コト・環境に付随する多種多様な情報に着眼し、いつもとは違う視点・観点で対象を捉えて思考を巡らせるとともに、それらを主観的・客観的に分析しつつ、視覚表現としてどのようなコミュニケーションシステムを設計する事ができるのかをまとめるようにして下さい。			

[授業科目名] 卒業制作 I (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷 恭二・尹 成齊・森本 健 服部 行晴・山内 瞬葉
[単位数] 3	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 学内外に対し自己の主張、社会への提案を展開する事で4年間の学習の集大成として視覚伝達デザインの領域から適切なメディアを制作すると共に実社会へ踏み出す架け橋とする。			
授業の概要 これまでに学習した視覚伝達デザインの領域から各自テーマを設定し、視覚伝達デザイン表現と様々なメディアと表現技術、展示計画までを反映した作品を制作する。最終提出までに数回の基本姿勢、制作状況をプレゼンテーションして最終審査で発表する。			
学生に対する評価の方法 作品を総合的に評価。 (テーマの理解と深み、主張・提案の明確度、訴求力、作品の完成度と全体構成、表現技術力、独自性)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 テーマの設定 (リサーチ/資料収集、現場観察、取材、アンケート実施など) 第2回 評価、分析 (現状の把握、課題の洗い直し) 第3回 研究 (課題へのアプローチの方法の検討、訴求ポイントの検討) 第4回 企画・立案 (コンセプト立案、訴求方法の全体構成と展開内容) 第5回 企画案プレゼンテーション (テーマの探求度、課題の把握度、コンセプトの明確化) 第6回 制作 1. (制作プロセスの明確化) 第7回 制作 2. 第8回 制作 3. (表現の適正の確認) 第9回 制作 4. 第10回 制作 5. 第11回 中間プレゼンテーション (表現の適正、進行度) 第12回 制作 6. 第13回 制作 7. 第14回 最終審査 第15回 卒業制作発表・講評			
使用教科書 使用教科書/なし 参考図書/随時必要図書を選択			
自己学習の内容等アドバイス 研究内容、テーマ設定、作品制作に状況に応じて、授業外にて各自資料収集、視察、取材に対応する。 授業開始時のチェックを義務化し、予習、復習の徹底を図る。			

[授業科目名] 卒業制作Ⅱ (ビジュアルコミュニケーション)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小谷・小川(明)・加藤(純)・新家 杉浦・丹羽・小島(徳)・本間・渡邊
[単位数] 3	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業制作Ⅰの内容に準じて、ブランディング、CI、VI、パッケージデザイン、イラストレーション、キャラクターデザイン等について研究しデザイン制作を進める。今後、社会に出てデザイン制作する上で必要なデザイン知識とスキルを習得する。			
授業の概要 卒業制作Ⅰの内容に準じて授業を行う。卒業制作テーマの設定から見たデザイン制作上の技術的課題や表現方法について、本授業において補完し、卒業制作Ⅰのスキルアップにつなげる。卒業制作課題の企画から制作にいたる一連のデザインプロセスの中で、卒業制作Ⅰで重視しなければならない事項(表現技術、パッケージデザイン、企画構成力)について重点課題として捉え制作指導を行う。中間プレゼンテーションを行うことでデザインチェックを行い、より完成度の高い卒業作品の制作を目指し指導する。			
学生に対する評価の方法 重点課題の取り組みに見る表現力、技術力、訴求力、論理性、新規性・独創性、			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 卒業制作テーマ選択にいたった経緯と制作内容について検証 第2回 卒業制作テーマから見た制作上の技術的課題の抽出。 第3回 技術的課題の克服に向けた取り組みメニューの作成 第4回 課題制作 第5回 課題制作 第6回 中間プレゼンテーションとチェック 第7回 中間プレゼンテーションに出された事項の修正。 第8回 具体的なデザイン制作 第9回 具体的なデザイン制作 第10回 第2回中間プレゼンテーションとチェック 第11回 中間プレゼンテーション時における技術的課題と問題点のチェック 第12回 具体的なデザイン制作 第13回 具体的なデザイン制作 第14回 具体的なデザイン制作 第15回 卒業制作作品に反映できたかどうか検証。			
使用教科書 JAGDA 教科書(VISUAL DESIGN 1～5)			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業において、前回の授業成果からどのくらい進展したかについてチェックする。授業成果を挙げるため準備と指摘事項の修正を図ることを徹底する。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅢ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 木村 一男
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 最終学年次の課題として、メカニズムと量産を前提とした課題を一貫して展開、完成させることをテーマとする。その調査、分析からコンセプト設定、デザインの展開、完成まで、デザインの全プロセスを完全にマスターすることを到達目標とする。			
授業の概要 第1課題（第1週～第7週）と第2課題（第8週～第15週）を、デザインの展開プロセスにしたがって、展開、完成させる。			
学生に対する評価の方法 課題の取り組み姿勢および提出された作品による評価。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 第1課題：オリエンテーション、プロジェクト設定 第2回 デザイン調査、分析 第3回 コンセプト設定、発表 第4回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第5回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第6回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第7回 発表 第8回 第2課題：オリエンテーション、プロジェクト設定 第9回 デザイン調査、分析 第10回 コンセプト設定、発表 第11回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第12回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第13回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第14回 デザイン展開（スケッチ、レンダリング、モデル、図面） 第15回 講評会			
使用教科書 参考図書：プロダクトデザイン（日本インダストリアルデザイナー協会編）			
自己学習の内容等アドバイス プロジェクトに関連した資料を常に関心を持って収集すること。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅢ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 素材の知識と加工方法の習得と新しい生活様式のデザイン提案			
授業の概要 [クラフト]では種々の素材と加工法を研究して用途に応じた用具に仕上げる。主に陶磁による食器や遊具、装飾性のあるオブジェクトをデザインする。樹脂成形によるスツールや真空成形による時計や生活雑貨なども制作する機会があります。卒業制作のプレデザインとして自主的な制作を奨励します。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢や意欲と提出作品の資質を総合評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 第一課題、オリエンテーション 2回 デザイン調査：材料選定、材料計画 3回 アイディア展開 4回 コンセプト作成 5回 デザイン展開 Sketch 6回 検討用模型の試作 7回 企画パネル作成、検討用模型の試作 8回 プレゼンテーション及び評価 9回 第二課題、オリエンテーション 10回 デザイン調査：材料選定、材料計画 11回 アイディア展開 12回 コンセプト作成 13回 検討用模型の試作 14回 企画パネル作成、検討用模型の試作 15回 プレゼンテーション及び評価			
使用教科書 特に定めない			
自己学習の内容等アドバイス 焼成にはプロパンガスや高電圧の電気を使用しています。十分な注意事項を理解すること。釉薬や粘土を使用するので整理整頓や管理を指示通りに行うこと。環境の清潔を自主的に保つこと。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅢ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黄 ロビン
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標：商品企画から製品のパッケージまで、総合的にトータルデザインを学ぶ。 テーマ：確実な調査から、的確の分析、コンセプトメイキング、構想展開、設計検討、ブランディング、そして商品包装まで、デザイン提案の妥当性と整合性が求められる。			
授業の概要 新規生活用品の演習を行う。まず、ライフスタイルの観察から、問題を提起してニーズを発見する。市場調査によって需要性を確認してから、コンセプトを作成し、企画案を成り立つ。構想展開しながら、モニター調査などにより、構想を詳細に検討・修正していく。商品化を前提としてデザイン提案を作成する。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の資質、および授業の出席状況を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション 2回 背景調査：使用者ライフスタイル考察、市場調査、消費者アンケートなど 3回 分析解析：Image Scale マッピング、Conjoint 分析など 4回 商品企画1：コンセプト作成、検討 5回 商品企画2：企画案作成 6回 構想展開：スケッチでアイデア展開 7回 構想検討1：検討用模型の試作、検討 8回 構想検討2：検討用模型の修正、再検討 9回 材料計画：材料選定、加工法検討 10回 提案準備：図面制作、CAD など 11回 中間提案：発表、検討 12回 模型制作1：Mockup 制作など 13回 模型制作2：Logo デザイン、Package 制作など 14回 発表準備：模型撮影、パネル作成など 15回 プレゼンテーション及び講評会			
使用教科書 レジユメなどで必要の都度に配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 課題進行中にはよく教員とコミュニケーションをとること。特に、構想展開や制作の段階には、			

[授業科目名] 立体空間デザインⅢ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・金 昌郁
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標として卒業制作レポートを作成する。また、後期の卒業制作の進行計画、制作準備としてのエスキース模型を制作する。			
授業の概要 環境空間に関する各自のテーマにそった卒業制作のテーマの選定や制作方法について、またデザインコンセプトの的確さやアイデア提案との整合性など、教員の十分な指導のもとに進める。			
学生に対する評価の方法 日常の受講態度と、提出レポートおよび制作作品の内容と表現方法で採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～5回 卒業制作フィールドワーク テーマに関するするヒアリング ワンデーワーク演習 第1回 コンセプトメイキング 第2回 建築空間表現 第3回 家具の設計 第4回 街路の計画 第6～7回 卒業制作フィールドワーク 関係資料と情報の収集 資料に基づきコンセプトを作成。評価と進め方の指導。スケジュールを作る。 コンセプトにそってテーマの研究、分析、考察 第8～9回 卒業制作レポート レポート作成 第10回 卒業制作レポート発表 第11～14回 エスキース模型制作 第15回 エスキース模型プレゼンテーション			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス プレゼンテーションの方法について専門家や他大学の作品を見るように。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅣ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 江口 倫郎・片田 善衛
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ これまでに修得した知識と技術を生かして、プロジェクトの企画から、最後のモデル作りに至る工業デザインの全プロセスを実践することで、社会へ出てから要求されるプロフェッショナル能力を構築する。			
授業の概要 [生活用品のデザイン] 化粧品、生活用/自動車等のケミカル商品など ブランド/商品企画/パッケージ (ID/クラフト/雑貨の共通授業) 対象ユーザーを明確にし、商品を企画し、ブランド (ロゴ)、パッケージ等 各人 (各専攻) の目的に合った方向でモックアップ作製を含めて総合的なデザイン手法を研究する。 テーマに沿って授業の到達目標に達するよう、実習形式で毎回スケジュールに応じた個人指導を行う。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の資質、および授業の参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 オリエンテーションと課題内容、目的、到達目標説明 2回 コンセプト立案、アイデア展開、デザイン調査 3回 調査報告書の作成、コンセプトチェック 4回 デザイン展開Sketch 5回 デザイン展開Sketch、商品/ブランド企画 6回 デザイン展開Sketch、商品/ブランド企画 7回 デザイン展開Sketch 8回 デザインチェック 9回 検討用模型の試作 10回 検討と修正案作成、Rendering、図面 11回 模型制作 12回 模型制作 13回 模型制作、説明パネルデザインと制作 14回 模型制作、説明パネルデザインと制作 15回 プレゼンテーション及び講評会			
使用教科書 プリントなどで必要の都度、配布する。			
自己学習の内容等アドバイス どの分野でも、かけた時間に比例して成果が現れる。とにかく授業時間内も時間外も課題の事に専念することが、結局一番効率的であることを体験して欲しい。			

[授業科目名] 立体空間デザインⅣ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 川地 正数・小島 篤
[単位数] 3	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標として卒業制作レポートを作成する。また、後期の卒業制作の進行計画、制作準備としてのエスキース模型を制作する。			
授業の概要 環境空間に関する各自のテーマにそった卒業制作のテーマの選定や制作方法について、またデザインコンセプトの的確さやアイデア提案との整合性など、教員の十分な指導のもとに進める。			
学生に対する評価の方法 日常の受講態度と、提出レポートおよび制作作品の内容と表現方法で採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） ワンデーワーク演習（川地） 第1回 大学キャンパス内に木で創る FOLLY（モニュメント） 第2・3回 学生1人が生活出来る最小限住居の計画 第4・5回 仮設ミュージアムの計画 ワンデーワーク演習：都市公園内のトイレ（小島） 第1回 ネーミング：キーワード抽出、分類化 第2回 作図：平面図、立面図、着色スケッチ 第3回 模型：S.1/50 第4・5回 卒業制作フィールドワーク テーマに関するするヒアリング 第6～7回 卒業制作フィールドワーク 関係資料と情報の収集 資料に基づきコンセプトを作成。評価と進め方の指導。スケジュールを作る。 コンセプトにそってテーマの研究、分析、考察 第8～9回 卒業制作レポート レポート作成 第10回 卒業制作レポート発表 第11～14回 エスキース模型制作 第15回 エスキース模型プレゼンテーション			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス プレゼンテーションの方法について専門家や他大学の作品を見るように。			

[授業科目名] デジタルデザインⅢ（立体空間）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平尾 正俊
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 設計製図や3Dパース制作におけるCAD技術について実践に即した形で学び、画像・図面などのデータを自由に組み合わせることで効率的に活用し、卒業制作につながる多様なプレゼンテーション能力を養う。			
授業の概要 各テーマの設計案をCADで検討し、様々なアプリケーションソフトを組み合わせることでより高度な表現方法を試み、総合的な応用として卒業制作の基本計画を作成する。			
学生に対する評価の方法 受講態度、プレゼンテーションおよび提出作品による目標達成度			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 自然環境のモデリング、添景などの作成 第2回 建築物と周囲の環境が調和した風景全体の検討 第3回 3Dモデリングデータの応用による総合的シミュレーション 第4回 ウォークスルーによる3Dアニメーションの作成 第5回 効果的な平面計画図の作成 第6回 Photoshopによるスケッチ描画方法 第7回 模型などの撮影と画像補正、加工方法 第8回 卒業制作企画書作成 A4/10ページ程度 第9回 卒業制作企画書作成 A4/10ページ程度 第10回 PowerPointによるプレゼンテーション資料作成 第11回 第1回卒業制作発表 第12回 卒業制作基本計画の作成（平面計画図、三面図、スケッチなど） 第13回 卒業制作基本計画の作成（平面計画図、三面図、スケッチなど） 第14回 卒業制作基本計画の作成（平面計画図、三面図、スケッチなど） 第15回 第2回卒業制作発表			
使用教科書 適宜必要に応じてプリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 卒業制作の基本計画を作成するため、関連資料の収集や現地調査など積極的に取り組むこと。			

[授業科目名] デジタルデザインⅢ（立体空間）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黄 ロビン
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標：デジタルモデリングの技術を習得する。 テーマ：三次元造形の測定技術、二次元・三次元造形の切削加工技術、並びにデジタルフィギュアの生成技術を上達に操作する能力が求められる。			
授業の概要 CAD/CAM ソフトを用いてデジタルモデリング技術の習得とデジタルフィギュアソフトの基本操作を目的とする。本授業では引き続き 3 次元 CAD ソフトを学ぶと共に、それと連携して三次元入力測定機と三次元出力切削加工機、二次元出力切削加工機のレーザーカッターを使い、模型までまとめ上げる力を養う。			
学生に対する評価の方法 課題の進行段階と完成提出作品、授業への参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、CAM の概説 2回 デジタルモデリング基本データ制作（illustrator を使用） 3回 切削加工用データへの転換（illustrator から書き出し） 4回 二次元切削加工演習（レーザーカッターを使用） 5回 デジタルモデリング基本データ制作（Rhinceros を使用） 6回 デジタルモデリング基本データ制作（Rhinceros を使用） 7回 切削加工用データへの転換（Rhinceros から書き出し） 8回 三次元切削加工機演習（MODELA を使用） 9回 三次元切削加工機演習（MODELA を使用） 10回 三次元切削加工機演習（MODELA を使用） 11回 デジタルフィギュアの概説（Poser を使用） 12回 デジタルフィギュアの基本操作（Poser を使用） 13回 デジタルフィギュアの演習（Poser を使用） 14回 デジタルフィギュアの演習（Poser を使用） 15回 プレゼンテーション			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 担当教員の HP や配布するプリントを参考しながらよく練習すること。			

[授業科目名] 卒業制作 I (立体空間)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 平光 無門・金 昌郁・平尾 正俊
[単位数] 3	[開講期] 4 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマの選定や制作方法について、またデザインコンセプトの的確さやアイデア提案との整合性など、教員の十分な指導のもとに進め、現場のデザイナーやアートディレクターにせまる総合的なデザインを目標とし、学外での制作も可能とする。作品の発表の場として、公開の卒業制作展を実施する。			
授業の概要 4年間の集大成として、環境空間に関する各自のテーマにそった卒業作品制作、または卒業研究論文としてまとめ、発表をする。			
学生に対する評価の方法 日常の授業への参画態度や受講態度と、提出レポートおよび制作作品の内容と表現方法で採点する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1～11 回 卒業制作 アイデアスケッチまたはパース制作 研究または作品制作 12 回 卒業制作 中間プレゼンテーションおよび講評会 13 回 卒業制作 プレゼンテーションおよび講評会。 14 回 卒業制作 卒業制作展搬入準備。会場レイアウト作成。 15 回 卒業制作 卒業制作展出品。会場にて講評会。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 他大学や過去の卒業制作作品をみて、表現方法等の幅を広げておく。			

[授業科目名] 卒業制作 I (立体空間)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 河村 暢夫・黄 ロビン 木村 一男・吉田 修作
[単位数] 3	[開講期] 4 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標：四年間の総決算として、「卒業研究」の名に値する総合的なデザイン制作を行う。 テーマ：デザインに対する「新発見」か「新見解」かが求められる。そして、外部の社会からの評価をもらうために、卒業制作展に公表する			
授業の概要 卒業制作は 4 年間の集大成である。テーマは担当教員ゼミに属して制作を行う。提出物は論文・模型・説明用パネル等である。作品の締め切りまでに 3～4 回中間発表を行う。 制作プロセスは統一しないで各自の力量に任されるが、計画表は必ず提出すること。また、立体模型に関わる材料については事前に研究室に報告すること。 ◎夏休み期間中に製作のテーマについて予備調査を進め、新学期において発表することを義務付けている。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出作品の資質、および授業の出席状況を加えた総合評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 オリエンテーション 2回 テーマの設定と状況説明 3回 デザイン調査：現場調査 4回 デザイン調査：現場調査：中間発表 1 5回 デザイン調査：現場調査 6回 問題点の分析 7回 問題の構造化：中間発表 2 8回 概念の設定：コンセプト作成 9回 システム・イメージ：イメージ・スケッチ 10回 システム・イメージ：イメージ・スケッチ：中間発表 3 11回 デザイン作業：図面 12回 デザイン作業：簡易モデル・検討 13回 デザイン作業：モデルメイキング 14回 プレゼンテーションパネル制作：中間発表 4 15回 プレゼンテーション及び作品合評会／卒業制作展の準備			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 課題進行中にはよく教員とコミュニケーションをとること。特に、構想展開や制作の段階には。			

[授業科目名] 卒業制作Ⅱ（立体空間）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 川地 正数・小島 篤
[単位数] 3	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ プロのデザイナーやアートディレクターに匹敵するような高次元のデザインを目標とする。作品の発表の場として、公開の卒業制作展を実施する。			
授業の概要 卒業制作Ⅰ（立体空間）の内容に準じてさらに、より高いレベルを求めるとあたり、教員による深い指導のもとに制作活動を進める。大学の枠を意識せず自由な創作活動として、学外での制作も可能とする。			
学生に対する評価の方法 日常の授業への参画態度や受講態度と、提出レポートおよび制作作品の内容と表現方法で採点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1～11回 卒業制作 アイデアスケッチまたはパース制作 研究または作品制作 12回 卒業制作 中間プレゼンテーションおよび講評会 13回 卒業制作 プレゼンテーションおよび講評会。 14回 卒業制作 卒業制作展搬入準備。会場レイアウト作成。 15回 卒業制作 卒業制作展出品。会場にて講評会。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 他大学や過去の卒業制作作品をみて、表現方法等の幅を広げておく。			

[授業科目名] 卒業制作Ⅱ（立体空間）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 片田 善衛・阿萬 芳和
[単位数] 3	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ [授業の到達目標] 各自の卒業制作テーマに応じて社会状況やそこに内包される問題点などをよく調査・分析し、形状や機能だけでなく、その提案が社会や人の心に及ぼす影響までもよく考察して提案とする。 [テーマ] テーマは各自で考える。（4年間の集大成にふさわしいものとする）			
授業の概要 テーマに沿って授業の到達目標に達するよう、演習形式で毎回スケジュールに応じた個人指導を行う。デザイン制作を単なる「表現する」手段としてだけでなく、「調査する」「考える」「表現する」「作る」「伝える」までのデザイン・プロセスを踏みながら、デザイン制作を実践し卒業制作として完成させる。			
学生に対する評価の方法 課題への取組み姿勢と提出物（モデル、パネル、プレゼンテーションなど）の資質、および授業への参画態度を加えた総合評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーションと課題内容、目的、到達目標説明 2回 テーマの設定と状況説明 3回 デザイン調査：現場調査 4回 デザイン調査：現場調査：中間発表1 5回 デザイン調査：現場調査 6回 問題点の分析 7回 問題の構造化：中間発表2 8回 概念の設定：コンセプト作成 9回 システム・イメージ：イメージ・スケッチ 10回 システム・イメージ：イメージ・スケッチ：中間発表3 11回 デザイン作業：図面 12回 デザイン作業：簡易モデル・検討 13回 デザイン作業：モデルメイキング 14回 プレゼンテーションパネル制作：中間発表4 15回 プレゼンテーション及び作品講評会／卒業制作展の準備			
使用教科書 プリント等、必要に応じて配布する			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> 授業時間は自分のアイデアやコンセプト、デザインを担当講師とともに確認、検討の場とできるよう、事前スケジュールに応じてアイデアやコンセプトの整理、デザインスケッチ等を行っておくとよい。 テーマは特に重要となるため、夏休み中に先行して自分なりに考えをまとめておくこと。 			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
デザイン産業論		講義	河村 暢夫 他
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	4年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 日本の産業の発展の中でデザインの果たした役割を検証しながら、歴史的なデザインの変遷を考察していく。また現代の革新的な企業を取り上げて分析と今後の産業を展望する。			
授業の概要 生活用具を中心に機械文明から情報化の時代にいたるモノ作り変革がどのように展開していくかを具体的な事例を鳥瞰しながら、産業の起源やそれに伴う社会の変化を時系列に授業を計画している。デザイナーの教養としてモノ作りの方法や素材の変革を正しく理解させて、現代社会の抱える問題点を認識することが基本的な到達目標としている。5回は企業のデザイナーを招く。			
学生に対する評価の方法 随時レポートを課して自主的に企業の歴史や現状を研究させて評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 デザイン産業論の概説 第2回 中世のモノ作りから：生活様式の考察 第3回 江戸時代の産業と市民生活 第4回 アールヌーボとアールデコ様式の変革 第5回 産業革命と社会の変革 万国博覧会「ロンドン博」等 第6回 ◆ [自動車産業]林テレンプ 第7回 アメリカの機械文明 第8回 ◆ [台所のデザイン]トーヨーキッチン 第9回 情報化時代の産業[無印良品][ユニクロ] 第10回 ◆ [化粧品]の昨今[資生堂] 第11回 ニッポンのプロダクト 第12回 ◆ [トイレット談義]INAX 第13回 アジアの産業：(中国・インド等) 第14回 ◆ [ユニバーサルデザインと産業]トヨタ紡織 第15回 デザイン産業論の総括とレポート提出 ◆＝非常勤講師予定			
使用教科書 アートアンドクラフトムーブメント／産業革命／機械文明／T型フォード／バウハウス／自動車産業／産業公害／情報化社会／ユニバーサルデザイン／デザイン材料／地球環境／ニッポンのプロダクト等々に関わる参考文献を資料として講義する。			
自己学習の内容等アドバイス 関連する図書を紹介して読書を奨励する。			

[授業科目名] 科学技術論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 天野 武弘
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・科学および技術を歴史的に見ることの大切さを理解する。 ・デザイナーの教養としてモノ作りの方法や素材についての歴史的変革を正しく理解する。 ・現代社会の抱える問題点および将来の方向性を認識し、科学、技術を学ぶことの重要性を理解する。 			
授業の概要 <p>科学や技術の発展が今日の社会を築いているといってもよい。とくに科学や技術の歴史的に主要な事例を取り上げ、また産業の興りなど具体的な事例を挙げながら、モノづくりやその考え方、それに伴う社会の変革を含め、時系列に授業を計画する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>授業への参加姿勢および随時ミニレポートを課して自主的に科学技術の歴史や現状を研究させて評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 科学技術論概説 第2回 近代科学の成立 第3回 江戸の科学 第4回 産業革命と技術 第5回 日本の古代技術（大仏鑄造の謎） 第6回 たたら製鉄と日本刀の美 第7回 江戸の技術ポテンシャル（からくりの世界） 第8回 近代科学技術の受容と日本の近代化 第9回 一世を風靡した近代技術（蒸気機関と鉄道） 第10回 近代化を支えた独自の繊維技術 第11回 鋼の時代の幕開け 第12回 都市基盤の整備と技術（電気・水道・港湾） 第13回 科学技術の継承と産業遺産 第14回 量産化技術と地球環境 第15回 科学技術論のまとめ</p>			
使用教科書 <p>科学史、技術史および産業遺産に関わる参考文献を資料として講義。拙著『歴史を飾った機械技術』も適宜参考資料として講義。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>参考文献等を紹介し、事前の予習を促すようにする。</p>			

[授業科目名] 卒業研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 木村 一男・小谷 恭二
[単位数] 3	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業研究としてデザインに関連したテーマを取り上げ、それを調査、分析、研究した成果を卒業研究論文としてまとめる。あわせて発表展のため、概要をまとめたパネルを制作する。			
授業の概要 テーマの設定から、その調査、研究展開および論文執筆まで随時細かく指導、アドバイスを与える。			
学生に対する評価の方法 論文の内容を評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 テーマの設定、研究の方向付け 第2回 調査の展開、分析、評価 第3回 研究の展開1 第4回 研究の展開1 第5回 研究の展開1 第6回 研究の展開1 第7回 中間チェック 第8回 研究の展開2 第9回 研究の展開2 第10回 論文の執筆 第11回 論文の執筆 第13回 論文の執筆 第14回 まとめ、パネル制作 第15回 講評			
使用教科書 研究テーマに関する図書を随時選択。			
自己学習の内容等アドバイス 夏休み以前に研究テーマを設定し、出来るだけ早く調査、研究の展開に入ることが望ましい。			

[授業科目名] 教職入門		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：教職の意義、教師の仕事、必要とされる資質・能力を理解し、教師としての資質・能力を身に付ける。一般社会生活の中にあっても、リーダーとして尊敬される人材であること。 テーマ ：①教員の使命・職務・責任・教育的愛情の理解、②社会人・教員としての対人間関係を理解、③生徒理解と学級経営法理解、④自己の教員としての適性を知る。			
授業の概要 教職の意義は何か、教師とはどんな職業か、自分は教師としての適性や資質があるか、社会人としての教師の在り方は何か。教師になるなら、何をどの時期にどのように身に付けたら良いか等を知る。これらを概念的に捉えたあと、子どもの実態把握から学校の管理・運営にいたるまで、項目別に体系的に掘り下げて教職の意義を理解する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観 (知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度) に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容 (約 30%)、定期考査 (約 70%) で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 子供の生活実態－1 : 教職課程で学ぶ概要、最近の子供の一日の過ごし方、心と体の変化などを把握する。 2回 子供の生活実態－2、教師の仕事－1 : 学校での実態 (授業、部活動、いじめ、など)、学習指導と教育課程の意味 3回 教師の仕事－2 : 教育課程の構成原理、新学習指導要領の特色、学習指導の考え方と方法 (指導法と形態、レディネス、動機付け) 4回 生徒指導・教育相談・進路指導 : 生徒理解、生徒指導 (意義、組織、計画、運営、指導の実例)、教育相談 (意義、基本原理)、進路指導 (意義と計画、進路相談) 5回 学級経営－1 : 学級と学級経営 (経営の基本とあり方、学校経営との係わり)、道徳教育 (目標と内容、実践の仕方)、学級経営と特別活動 (目標と内容)、学級担任の心構え 6回 教師に求められる資質と能力－1 : 戦前・戦後における教師像、現在の教師に求められるもの (中教審答申・教育職員養成審議会答申の求めるもの) 7回 教師に求められる資質と能力－2 教員の養成と採用－1 : 学ぶものの姿勢、教えるものの姿勢、戦前・戦後における教員養成制度の比較 8回 中間考査を実施する 9回 教員の養成と採用－2 : 教職課程の仕組みと内容 (教育職員免許法、教職課程で学ぶ科目と単位数、免許状の種類)、教員の選考と採用 10回 教員の養成と採用－3 教員の地位と身分－1 : 教員の採用 (教職員定数、教職員の構成、教員採用選考の変遷、私立学校での採用)、教員の地位と身分 (身分とは、国・公立学校教員の身分、私立学校教員の身分、教職の専門性) 11回 教員の地位と身分－2 : 待遇と勤務条件 (給与、勤務、人事、福利厚生)、研修 (初任者研修、校内研修、長期・短期研修) 12回 学校の管理・運営－1 : 学校制度 (1 条校、専修および各種学校等、文部科学省所管外の学校、わが国の学校制度の変遷) 13回 学校の管理・運営－2 : 管理・運営体制 (教育課程、教職員、生徒、施設・設備)、経営と組織 (職員会議、学校評議員)、管理職の役割 14回 学校の管理・運営－3 : 校務分掌 (分掌とは、校務の範囲、編成上の配慮、分掌組織図と分掌業務の概要、公立学校の学校経営案の構成) 15回 最終考査を実施する			
使用教科書 教職入門 (教師への道)「2009年改訂版」 吉田 辰雄、大森 正 編著 図書文化			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを理解することである。理解のためには予習 3 割・復習 7 割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 教育原論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 「教育とは」「学校とは」「教師とは」「生徒指導とは」等、教育の本質、学校の歴史、社会教育、教育改革の現状など、今日の教育課題について学習し、実践的な課題解決能力・指導力を養うことを目的とする。			
授業の概要 本授業は、教職を志す学生にとって必要な教育に関する基礎的・基本的事項を学習することを通して、少子高齢化の進行、価値観の多様化など、急激に変貌する社会の中にあつて、教育に関する新たな課題を家庭や地域社会との連携のもとで解決していくために必要な知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、教育推進の基本的方向 教職課程の意義、生涯学習のねらいと概念規定、自己実現力の育成 2回 人間の発達と教育 人間の発達と環境の関係、人間の成長と発達環境、家庭の教育機能の充実に向けて 3回 教育方法の基礎 教育の方法原理、授業の言語と準備、学習の形態、その他の教育手法 4回 教育課程 1 わが国の教育課程編成の基本的視点、教育課程編成の基礎としての学習指導要領 5回 教育課程 2 学文における教育課程編成の過程、教育課程改訂の動向 6回 進路指導と生徒指導 進路指導の基本的とらえ方、生徒指導の基本的とらえ方、進路指導と生徒指導の推進体制 7回 特別活動 特別活動の目標、特別活動の内容とその基本的性格、特別活動の指導画と評価 8回 教師の職務と責任 教師としての職業、教師の養成、教師教育、教師の採用と構成 9回 学級運営 学級運営と学文、学級運営の組織、学級運営の過程、学文の危機管理・安全管理 10回 学文制度とその特色 学文制度の形成と教育学会の発展、初等学文制度とその動向、中等学文制度とその動向 11回 社会教育 社会教育とは、生涯期の社会教育、現代社会教育とその充実 12回 教育政 1 憲法、教育基本法、教育政の基本原理、国の教育政制度 13回 教育政 2 全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）、地方の教育政制度 14回 新しい教育課題 選択と学文、環境の重視、保護される情報、「ゆとり教育」の見直し 15回 定期試験			
使用教科書 「新しい教育の原理」 田代直人・佐々木司 編著（ミネルヴァ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 橘 春菜
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的な学習過程、発達過程を理解し、児童生徒（障がいのある児童生徒を含む）の心身発達に応じた教育のあり方について考えを深める。			
授業の概要 効果的に学習を促すには、学習者の発達における心理的特性を理解し、発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では、発達、学習、人格などの観点から人間の基本的な理解を深めたうえで、学級集団の指導、子どもたちへの心理教育的援助、教育評価などについて学ぶ。受講者は授業を通じてこれからの学校教育のあり方に関して積極的に考え、自分の意見を持つように心がけてほしい。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度および授業中の提出物（50%）、最終に実施する試験（50%）により総合的に評価する。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要、履修上の注意）・教育心理学とは 第2回 学習理論 学習成立のメカニズム 第3回 学習過程の理解 知識獲得と学習の転移 第4回 学習意欲 動機づけと原因帰属 第5回 授業における教授・学習過程 第6回 発達過程の理解1 人格の形成 第7回 発達過程の理解2 子どもの思考の発達 第8回 発達過程の理解3 対人関係の発達 第9回 発達過程の理解4 教育と発達 第10回 学級集団 教師と児童生徒関係 第11回 適応と障害1 学校臨床 第12回 適応と障害2 障がいのある児童生徒への理解 第13回 知能と学力 知的発達と学力の測定 第14回 教育評価 教育評価の機能、方法、解釈 第15回 まとめと筆記試験			
使用教科書 必要な資料をその都度配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 事後学習により、講義内容をよく理解し、自分の考えを整理しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 教育行政学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 文部科学省行政、教育委員会制度など21世紀の初等中等教育行政及び社会教育行政等を全般にわたって学習し、教育行政の意義と目的、基本原理等を具体的に理解することを目的とする。			
授業の概要 教育行政とは、教育を対象として、教育政策の実現、教育のための条件整備、憲法・教育基本法に示されている学習権の実現を図るための行政である。本授業では、わが国の公教育制度、教育行政の概念等を学習し、教職に携わる者に必要な教育行政に関する知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、わが国の公教育制度 1 教職課程を学ぶ意義、公教育の概念とその制度的原理 2回 わが国の公教育制度 2 わが国の学校体系 3回 わが国の公教育制度 3 現代の学校制度の課題 4回 教育法制の構造と機能 1 教育法規の体系、教育権の構造 5回 教育法制の構造と機能 2 憲法、教育基本法 6回 教育行政の概念と基本理念 1 教育行政の成立と展開、教育行政の概念 7回 教育行政の概念と基本理念 2 教育行政の構造と一般原則、今後の課題 8回 教育行政の構造と機能 文部科学省、教育委員会制度 9回 教育行政の諸領域 1 学校経営 10回 教育行政の諸領域 2 教育課程行政、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト） 11回 教育行政の諸領域 3 教職員の職務と人事考課 12回 教育行政の諸領域 4 社会教育行政、教育財政 13回 諸外国の教育行政制度 アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア など 14回 わが国教育行政の課題 学校評議員制度、学校運営協議会制度、学校評価制度、教員人事評価制度、「民間人校長」登用 15回 まとめと定期試験			
使用教科書 教育行政学 河野和清 編著（ミネレガ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育課程		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 学習指導要領に基づく各教科・教科外の教育課程編成法及び特質が理解できること。「評価の観点」に配慮した授業計画、学習指導案が書けること。基本的学習指導法にしたがった授業実践ができること。 テーマ： 教育課程及び指導法に関する学修。教育課程の基礎理論の理解。教育基本法等の法律やこれに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた指導法の習得。			
授業の概要 教育課程の基礎理論とその類型を学ぶ。教育の法治主義に基づく教育基本法をはじめとする法律や、これに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた教育課程の編成及び教育の内容・方法に関連する事項を系統的・体系的に学ぶ。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1、2回 教育課程論 ― 教育課程の基本原則 教育課程の概念、カリキュラムの類型、カリキュラムと教育課程の包含関係 3回 学習指導要領 教育課程に関する法規、学習指導要領の性格、歴史的変遷、新学習指導要領の特質 4回 教育課程と学習内容 人間形成と教育内容の関わり、教材の役割、教科書の教材化、生きる力と個性伸長の関連 5回 学習指導要領が定める学校教育活動の構成 各教科と特別活動・道徳教育の関連、道徳教育・特別活動の意義 6回 教育方法論 ― 学習指導の原理 問題解決学習と系統学習、発見学習と動機付け、初等・中等教育時代の自己の体験発表と協議 7回 学習指導案の役割： 学習指導から学習支援への推移、授業の三角形と教材・発問、授業計画と学習指導案の作成、マルチメディアの活用 8回 中間考査を実施 9回 道徳教育の理念と実践： 道徳教育の理念、道徳教育の指導法、実践例の研究と協議 10回 特別活動の指導法 学級活動（ホームルーム活動）の指導法、児童会（生徒会）活動の指導法、学校行事の指導法 11回 教育評価 学力論の変遷、新学力観、観点別評価、指導と評価の一体化、指導要録の内容、通知票の意義と内容 12回 教育実践論 ― 授業実践の例示 問題解決学習型の例、系統学習型の例、例について研究と討議 13回 総合的な学習の時間について 創設の意義、学習の内容、実践例の研究と協議、学習指導案の課題提示 14回 教育実践 観点別評価に配慮した学習指導案の作成、研究と討議 グループ別に研究と討議をした後、全体発表 15回 まとめと最終考査を実施			
使用教科書 実践に活かす 教育課程論・教育方法論 山口 満、唐澤 勇 監修 学事出版			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを常に考えることである。理解のためには予習3割・復習7割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 美術科教育法 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2 年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育は人間教育 到達目標：発達各段階における造形の意味の理解 ① 発達段階によって表現が異なることの意味の理解 ② 各発達段階における表現の特徴と課題の理解 ③ 発達段階ごとにおける教育の方針の理解			
授業の概要 美術科教育は、芸術家育成教育ではなく、幼児期から生涯を通じて、一貫して持続されていく人間教育の重要な教育領域であることを、幼児期から思春期にかけての造形発達を事例を確認しながら理解する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「講義のオリエンテーション」 美術科教育 I～IVの概要説明 講師紹介、受講生アンケート等 第2回：「幼児の造形体験」 幼児画を模写することによって、幼児の造形について体験的にアプローチする。 第3回：「発達ということ①」 人間成長を発達という視点から捉え、発達の概念を理解する 第4回：「発達ということ②」 造形における発達を「美術による教育 (ピクター・ローエンフェルト)」などの著作を資料として概説する 第5回：「造形発達① 幼児期の平面造形 1」 幼児期の造形についての説明 幼児期全体の位置づけ 第6回：「造形発達② 幼児期の平面造形 2」 幼児期の造形についての説明 幼児期における描画の特徴説明 (発達段階的、環境的に特徴のある幼児の描画を教材に、描画の特徴を理解する) 第7回：「造形発達③ 幼児期の立体造形」 幼児期の立体表現の事例を通して、造形的認識を理解する。 第8回：「造形発達④ 児童期の造形 1」 児童期 (小学生) の造形の特徴についての説明 幼児期における描画との違いを、両段階の描画を比較対照することによって明確化する 第9回：「造形発達⑤ 児童期の造形 2」 児童期における全体的発達に関する知見をもとに、児童期における造形の意義と課題を示す。 第10回：「造形発達⑥ 児童期の造形 3」 児童期における造形教育のあり方について、基本方針と手法を理解する。 第11回：「思春期の造形 1」 思春期 (中学生) の造形の特徴についての説明 前、二段階の描画等との違いを、それぞれの描画等の特徴差から理解する。 第12回：「思春期の造形 2」 思春期の発達課題についての概説から、思春期における描画と発達の関係を理解する。 第13回：「思春期の造形 3」 思春期における美術教育の意義とそのあり方についての基本概念を理解する。 第14回：「造形発達と美術教育 1」 前講までの内容をまとめ、造形の発達についての全体理解を確認する。 第15回：「造形発達と美術教育 2」 全員参加の討議によって美術教育と造形発達の関係について理解を深めるとともに、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と教育方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の法的理解 ③ 関連法律（日本国憲法、教育基本法、学校教育法）の概要理解 ④ 美術科教育の領域、工芸・デザインの理解 ③ 学習指導要領の理解			
授業の概要 前講（Ⅰ）における美術科教育の目的理解を前提に、美術教育を構成する各領域における目的と教育内容について理解する。			
学生に対する評価の方法 5. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度（20%） 6. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度（20%） 7. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度（20%） 8. 試験における成績（40%） ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「法律と美術科教育①」 日本国憲法・教育基本法と美術科教育の関係理解。 第2回：「法律と美術科教育②」 学校教育法、学習指導要領と美術科教育の関係理解。学習指導要領については、美術科教育の構成を理解。 第3回：「法律と美術科教育③」 学習指導要領の詳細理解。 第4回：「美術科教育の領域①」 工芸・デザイン、立体・平面の違いについてのディスカッションと領域設定内容の理解。 第5回：「美術科教育の領域②」 鑑賞領域の意義 鑑賞の視点と価値共有の意義 第6回：「美術科教育の領域③」 デザインの歴史的理解と今日的意義の理解（消費者視点からの教育） 第7回：「美術科教育の領域④」 デザイン教育と学習指導要領 第8回：「美術科教育の領域⑤」 デザイン領域の基礎知識演習 学習すべき内容の概説と、知識の確認 第9回：「美術科教育の領域⑥」 デザイン領域の基礎知識演習 回転落下体作成によるプロセスの確認。 第10回：「美術科教育の領域⑦」 工芸領域の歴史的理解 第11回：「美術科教育の領域⑧」 工芸領域と環境問題との関連から工芸領域の今日的意義を理解。 第12回：「美術科教育の領域⑨」 工芸領域と学習指導要領。 第13回：「美術科教育の領域⑩」 工芸領域の基礎知識演習 工芸領域教育で必要となる基礎知識の概説。 第14回：「美術科教育法Ⅱのまとめ」 美術科教育法Ⅱの内容を整理し、学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題について討論。 第15回：「美術科教育法Ⅱのまとめと確認」 学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題についてとりまとめを行い、本講の学習成果の確認（「択一問題」「論述問題」による達成度確認）を行う。（試験会場への資料ノートの持込は禁止する）			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と学習指導方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の基本的手法の理解 ⑤ 美術科教育の領域、平面・立体の理解 ⑥ 授業計画手法の理解 ③ 評価の意義と手法の理解			
授業の概要 前講(Ⅱ)に引き続き、領域別学習を行うとともに、学校教育で広く用いられている「授業計画」の手法を示し、その作成の基礎を学ぶ。また、美術教育における評価の意義について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 9. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 10. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 11. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 12. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回：「美術科教育の領域①」 平面領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第2回：「美術科教育の領域②」 平面領域と学習指導要領の理解。 第3回：「美術科教育の領域③」 平面領域の基礎知識演習。 第4回：「美術科教育の領域④」 立体領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第5回：「美術科教育の領域⑤」 立体領域と学習指導要領の理解。 第6回：「美術科教育の領域⑥」 立体領域の基礎知識演習 第7回：「授業計画①」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第8回：「授業計画②」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第9回：「授業計画策定の目的と方法」 教育成果を上げるための手法としての計画作成の意義と、計画作成の手法について理解。 第10回：「授業計画③」 授業計画基礎演習 授業計画を簡略化して作成し、策定のポイントを理解する。 第11回：「美術科教育の評価①」 教育における評価の対象、目的について理解する。 第12回：「美術科教育の評価②」 教育における評価の手法について理解する。 第13回：「美術科教育の評価③」 美術科教育の特殊性に配慮した評価の方法について基本的な理解を得る。 第14回：「美術科教育の領域と評価のまとめ」 前講の内容も含め、領域の意味と評価のあり方について内容を整理する。 第15回：試験による本講の学習成果の確認 今年度の講義全体のとりまとめを行い、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅳ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術科教育の方法と目的 到達目標：人間教育としての美術科教育の重要性を認識し、自らの問題意識に立脚した目的概念をもつ ⑦ 美術科教育の人間教育としての重要性認識の共有 ⑧ 授業計画手法の基本的作成能力の獲得 ③ 自らの視点からの美術科教育観の確立			
授業の概要 学習指導計画の策定を通して、美術科教育法Ⅰ～Ⅲの内容を学生諸子の中で再構築するとともに、美術科教育の目的についての合意形成と個別の認識深化を行う。			
学生に対する評価の方法 1 3. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 1 4. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 1 5. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 1 6. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「学習指導計画立案①」 年間計画の確認、学習指導計画の再確認 グループ編成 第2回：「学習指導計画立案②」 学習指導計画のテーマ設定 対象生徒のシチュエーションづくり。 第3回：「学習指導計画立案③」 目標および全体計画の策定の情報収集 第4回：「学習指導計画立案④」 全体計画策定チェック① 第5回：「学習指導計画立案⑤」 全体計画策定情報収集 第6回：「学習指導計画立案⑥」 全体計画策定チェック② 第7回：「学習指導計画立案⑦」 全体計画の発表① 第8回：「学習指導計画立案⑧」 全体計画の発表② 第9回：「学習指導計画立案⑨」 本時の計画の策定方法 第10回：「学習指導計画立案⑩」 本時の計画の策定チェック① 第11回：「学習指導計画立案⑪」 本時の計画の策定 第12回：「学習指導計画立案⑫」 本字の計画の策定チェック② 第13回：「学習指導計画立案⑬」 本字の計画の発表① 第14回：「学習指導計画立案⑭」 本時の計画の発表② 第15回：学習指導計画策定をテーマにした小論文(評価テスト) および学習指導計画案の製本・提出。			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 指導案作成に当たっては、インターネット情報等を含め、周辺関連情報の収集を十分に行うこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報科教育法 I		講義	黒澤 宣輝
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3 年次前期	選択 (教職必修・情報)	
授業の到達目標及びテーマ 到達目標：高等学校の教科「情報」で使用する教科書の内容を確実に消化し、生徒の力に応じた授業法を学ぶ。 また、生涯にわたり社会教育等においても情報科教育を推進する指導者としての素養を身につける テーマ：教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 情報のデジタル化及び情報通信ネットワークの特性を高校生にどのように理解させるか。その特性を活かした表現法やコミュニケーションはどのように教えたら高校生に定着させられるか。 情報化が社会に及ぼす光と影をどのように教えるか。情報社会に参加する態度はどのようなものでなければならないか。その理由を考えさせる授業法は何か。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 教科「情報」の構成：教科「情報」新設の経緯と趣旨、普通教科「情報」が扱う内容、 2回 専門教科「情報」が扱う内容、高校での情報教育について 3回 情報のデジタル化の仕組み：文字、数値、画像、音などのデジタル化について 4回 情報機器の種類と特性：家庭、学校、企業、社会で扱う情報機器について 5回 多種の情報機器を活用した表現方法 多様な形態の情報を統合する情報機器による表現 6回 情報通信ネットワークの仕組み：仕組みとセキュリティ確保について 7回 情報通信の効率的な方法：通信速度や容量、正確な伝達法について 8回 コミュニケーションにおける情報通信ネットワークの活用 電子メールや電子会議などの効果的な活用法について 9回 情報の公開・保護と個人の責任 情報の保護の必要性、収集・発信に伴う問題と個人の責任について 10回 情報通信ネットワークを活用した情報の収集・発信 情報を適切に収集・分析・発信する方法について 11回 社会で利用されている情報システム 種類と特性、システムの信頼性向上について 12回 情報化が社会に及ぼす影響：多面的に影響を認識し、望ましい情報社会の在り方を考える 13回 観点別評価の内容と指導と評価の一体化について 14回 13回の考えを基礎とした学習指導案の作成 指導計画の例、学習指導案の例を提示し、作成上の留意点を説明し50分授業の学習指導案を作る。 この指導案を使って、別講座「教育実習指導」で50分の模擬授業を行う。 15回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書（情報c）。参考資料：高等学校学習指導要領（情報）			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 情報科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・情報)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 「基本情報技術者」国家試験問題レベルの学習を行い、教科書の内容をより深く理解できる力をつける。学校における情報システム全般につき、ある程度維持・管理に携われる力をつける。 テーマ： 教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 2進数を中心とした情報の基礎理論。コンピュータの動作原理と論理回路、主記憶装置や補助記憶装置、ICなどハードウェアの構成。 OSやプログラム言語などのソフトウェアについて。ネットワークシステムの原理とメンテナンスについて。システム開発法について。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観(知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度)に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容(約30%)、定期考査(約70%)で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 情報の基礎理論—1 : 奇数変換、2進数の加減算、固定小数点と浮動小数点 2回 情報の基礎理論—2 精度と誤差、10進数と2進数表現、文字データの2進コード化 3回 ハードウェア—1 : コンピュータの動作原理、プログラムの構成とアドレス指定方式、高速化技術 4回 ハードウェア—2 論理演算と論理回路、加算回路と順序回路、半導体素子と集積回路 5回 ハードウェア—3 : 主記憶装置と補助記憶装置の種類・特性 6回 ソフトウェア—1 : オペレーティングシステム、ジョブ管理とタスク管理 7回 ソフトウェア—2 プログラム言語、言語処理プログラム、流れ図の書き方とBASICによるプログラミング練習 8回 ファイルとデータベース : ファイル構造、ディレクトリ構造、データベース 9回 通信の仕組み : 通信機器と通信回線、データ伝送の仕組み、回線接続方式と通信方式、誤り制御 10回 ネットワークシステム—1 ネットワークアーキテクチャ、LANの構成と接続方式、LANの標準化 11回 ネットワークシステム—2 LANのアクセス制御方式、インターネットの機能と応用利用 12回 システム開発—1 システム開発手順、プログラム設計、プログラミング、プログラムテスト 13回 システム開発—2 : 保守と作業管理 14回 情報システムと社会 セキュリティと標準化、企業の情報化と経営、流通システム、品質管理法、経営分析法 15回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書(情報C) 参考書 : 基本情報技術者試験問題解説書			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 道徳教育の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育の果たす大きな役割は人格教育であり、道徳教育はその中核をなすものである。良き社会人、市民を育成するために、道徳教育の充実を目指して実践的指導法を身に付けることを到達目標とする。さらに、指導者としての道徳的な資質を高めることも目標とする。			
授業の概要 この講座では、学校・家庭・社会が協働して道徳教育を充実させるために、学習指導要領や具体的な実践事例などをもとに研究を進める。特に、児童生徒や青少年および大人の現状や実態を把握し、自己統制力と規範意識の育成にもふれながら、具体的な実践事例を多く取り入れた授業を行う。また、具体的な指導方法についてのプレゼンテーション・ロールプレイを行い、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲(約20%)、課題・発表(約30%)、試験の結果(50%)などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 ガイダンス(授業の進め方、青少年の規範意識と道徳観、教育改革) 2回 家庭における道徳教育 家庭環境の変化と課題、家庭教育の機能 3回 学校における道徳教育 生徒のモラル意識、日米比較でみる道徳教育の現状 4回 社会における道徳教育 学校再生のための道徳教育、社会における道徳、学校と地域社会との協働 5回 教育の概念と道徳教育(道徳とは、道徳律と道徳性、道徳的価値) 6回 道徳性の発達 道徳的価値、道徳的実践力、道徳性発達理論と道徳教育の今日的課題 7回 道徳性の一般的な発達段階 乳幼児期、幼児期、児童期、思春期、青年期 8回 戦後日本の道徳教育のあゆみ 先人に学ぶ道徳、道徳教育年表 9回 「学習指導要領」のなかの道徳教育 学習指導要領の改訂と特設「道徳の時間」 10回 道徳教育の指導法の具体的な考察 道徳の時間、総合的な学習の時間等 11回 「道徳の時間」の学習指導案の作成 主題・授業資料の選定、内容の学校・学年段階の設定 12回 「道徳指導」の実践のための研究① 13回 「道徳指導」の実践のための研究② 14回 「道徳教育の研究」のまとめとテスト 15回 道徳教育の研究及び授業実践の課題とまとめ			
使用教科書 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 東洋館出版社			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 特別活動の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育においては、児童・生徒の個性の伸長と心豊かな人間性ならびに在り方生き方の育成が重要な課題である。そのため、これらの課題に応える基礎的な知識・技能の修得をテーマとし、それに基づき各自の教育に対する考え方、あるいは生徒指導上の諸問題を主体的に考え、判断し、解決する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 「特別活動の意義」、「学級会活動（ホームルーム活動）」、「児童会活動（生徒会活動）」、「学校行事」を中心に実践例を挙げながら講義を進める。また、各自の体験発表、討論等を通して理論と実践の深化を図るとともに、生徒指導上の諸課題を解決する力や実践力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業の内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校教育と特別活動の意義（今後の学校教育の目標、特別活動の役割、児童・生徒の生活実態、人間としての生き方教育） 第2回 特別活動の変遷（戦前の課外活動、戦後の特別活動、昭和期における特別活動、平成期に入ってから特別活動） 第3回 特別活動の特質と目標・内容（学習指導要領のうたう目標、特質と指導法、内容と特質、生徒指導、総合的学習との関連） 第4回 指導計画・指導案の作成（学校の教育計画との調和、3領域ごとの指導計画と指導法、指導案の役割と指導案の作り方） 第5回 学級（ホームルーム）活動（目標と性格及び問題点、活動の内容、指導計画の作成と指導方法） 第6回 児童会（生徒会）活動（目標と性格及び問題点、活動内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第7回 クラブ活動・部活動の指導①（目標と教育的意義、実態と指導及び課題） 第8回 クラブ活動・部活動の指導②（指導計画の作成と評価）・中間試験日 第9回 学校行事の指導（目標と性格及び問題点、内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第10回 特別活動の評価（意義と観点、評価の方法と事例、人間としての在り方生き方教育） 第11回 特別活動と学級・学年・学校経営（特別活動の組織・運営、特別活動と学校事故、学級経営の内容、学級・学年・学校経営との関連） 第12回 完全学校週5日制時代の学校・家庭・地域の関わり（学校・家庭での対応上の留意点、地域の教育力への期待、学校・家庭・地域の協力、地域での特別活動） 第13回 これからの特別活動の展望と課題（在り方についての組織図、社会教育との関連、教育課題との関連、国・地方教育団体との関係） 第14回 試験日 第15回 事例研究：県立学校経営案に見る特別活動の位置づけと活動内容（事例を見て研究協議をする）			
使用教科書 現代の特別活動 ―理論と実践― <第2版> 中野目直明・小川一郎編 酒井書店・育英堂			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育実践学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校における教育活動は、各学校において工夫をこらし計画的に組織されている。内容は、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等である。それらを教授するのは教師であり、学習するのは児童生徒である。 本講座では、実際の教育活動に活かす指導方法について研究し、具体的な学習指導方法を学び、教師に必要とされる実践力の基礎を身に付けることを到達目標とする。また、研究成果の実戦への還元を確認する。			
授業の概要 この講座では、内容プリントを配布し授業を進める。学習指導の実際については実習的な内容で授業を行う。学習指導要領が目指す人間像・学力観・教育方法観を概観しながら教育の方法・技術を通して教育活動を構築する。教授メディアの効果的な活用も図る。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・発表（約30%）、試験の結果（50%）などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・教育実践学を学ぶ意義・教育実践学に必要な理論) 第2回 教育実践学の構造（学習指導要領との関連・教育実践学の領域及びその内容と方法） 第3回 教育実践学と学習指導要領（幼稚園教育要領）の理念との関連（趣旨の実現のための実践・要領の変遷・生涯学習の理念と施策） 第4回 教育における理論と実践との関わり（実践体験による教育実践学の構築） 第5回 授業設計の方法論(体験活動等の活動を中心とした学習指導形態) 第6回 授業設計の方法論(一斉・小人数・習熟度・グループ活動等の学習指導形態) 第7回 教科教育実践方法の具体例の研究（教材研究と教材開発・補助教材づくりの教育実践事例研究） 第8回 教科外教育実践方法の具体例の研究（特別教育活動・道徳・総合的な学習の時間の教育実践事例研究） 第9回 教育実践の学習方法（情報機器及び教材の活用・マルチメディアと授業構成・シミュレーション・ディベート等と授業構成） 第10回 教育方法と教育評価（指導と評価の一体化・相対評価と絶対評価）・P-D-C-Aサイクル) 第11回 観点別評価・学習指導案・評価（考査）問題の作成法 第12回 観点別評価の内容と模擬授業（観点別評価を組み込んだ学習指導案・補助教材・考査問題づくり） 第13回 学習する立場と教授する立場のロールプレイング（模擬授業の実践） 第14回 教育実践学のまとめ及びテスト（理論・資質能力・実践力の評価） 第15回 教育実践学の課題とまとめ			
使用教科書 必要に応じてそのつどレジュメを配付する。(参考書 実践に活かす「教育課程論・教育方法論」学事出版)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 生徒及び進路指導		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 生徒指導及び進路指導は特定の教師のみが行うのではなく、すべての教師が学校教育全体を通じて行うものである。そのため、生徒指導及び進路指導について教育的な概念や教育方法について、基礎的な知識・基本的な理論、技能の修得をテーマとし、児童・生徒が学校を含めた社会の中で自己を生かした活動ができるよう成長するのを援助する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 生徒指導では、「生徒指導の意義」、「学業指導」、「適応指導」、「社会性の指導」、「自己を生かす指導」を中心に事例を挙げながら講義を進める。また、進路指導では、生徒が主体的に進路選択や社会に適応するための能力の伸長を図るよう教育する方法を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生徒指導・進路指導の意義と課題（生徒指導とは、生徒指導の実践原理と課題） 第2回 生徒指導の原理と理論（生徒指導・実践の原理、生徒指導と領域） 第3回 児童・生徒理解の進め方（児童・生徒理解の意義と目的、理解の方法、支援・指導につなぐ児童・生徒理解、児童・生徒理解を左右する教師の見方） 第4回 学級経営の進め方（生徒指導からみた学級経営の意味、学級集団の力学、学級経営の方法） 第5回 教科指導と生徒指導（生徒指導と教科指導の関係、実践例の研究、生徒指導からみた教科指導の課題と解決策） 第6回 生徒指導実践における教師像と研修（生徒指導の実践上必要となる教師の資質と技能、生徒指導の実践力を育成するための研修のあり方） 第7回 学校の指導体制と家庭・地域との連携①（学校の生徒指導実践における課題・指導体制の確立） 第8回 学校の指導体制と家庭・地域との連携②（生徒指導における学校・家庭・地域社会の連携） 中間試験日 第9回 進路指導の意義と課題（進路指導の教育的意義と目的、課題、進路指導理論） 第10回 自己発見と自我同一性の確立（自己の発達、同一性の確立、自己理解と進路指導） 第11回 就労観・職業観の形成と変容（現代青年の就労観・職業観、就労観・職業観の形成と変容、就労観・職業観の形成を促す進路指導のあり方） 第12回 進路指導実践の学校体制（学校教育における新指導の位置づけ、体制づくり） 第13回 学校教育における進路指導の実践展開（「学校の教育活動全体を通じて」の進路指導、進路指導における「ガイダンス機能の充実」） 第14回 試験日 第15回 現実の高校における進路指導の手引きの研究・協議（事例を見て研究・協議をする）			
使用教科書 生徒指導・進路指導 高橋 超・石井眞治・熊谷信順 編著 ミネルブア書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育相談とカウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。			
授業の概要 不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況（15%）、レポート（20%）、試験の結果（65%）等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割 第4回 コンサルテーション 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 不登校 第9回 いじめ 第10回 ノイローゼ等病的事例 第11回 特別支援教育 第12回 クライシスセオリー 第13回 思春期の理解 第14回 教育相談を行うときの注意事項 第15回 まとめと試験			
使用教科書 『親面接のポイント』 加藤純一著 ほんの森出版 [参考図書] 『学校教育相談学 ハンドブック』ほんの森出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。			

[授業科目名] 総合演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 立川 義政・小笠原 昭夫
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 DVDを活用
授業の到達目標及びテーマ 二つのテーマ、「国際理解教育」及び「生活環境」について、前半・後半に分かれて実施する。 「国際理解教育」の目標は、総合的な学習の時間（国際理解教育）の具体的な学習活動を、どのように教科・道徳・特別活動等との関連を図りながら構成していくか、そして、いくつかの実践事例をもとに、学習活動をどのように計画し、実践化、評価していくかという一連の手順について学生相互に論じ合うとともに、学習活動案を作成し、それを発表するという授業を通して、学習活動を設定していくための基礎的な能力を養うこととする。 また、「生活環境」については、テーマとして生活環境問題から何か一つを取り上げ、そのテーマに沿って調査・研究を深めた上、いかにまとめ解りやすく発表するか、その手腕の向上を目標とする。			
授業の概要 「国際理解教育」の主たるねらいは、子供たちに、地球上に暮らす様々な文化的背景を有する人々と平和で友好的な関係を形成し、発展させる資質と能力を育成していくことである。そこで、それらを育むための教育活動を設定するには、子どもたちの発達段階を踏まえ、国際比較という観点に立って、どのように教材を構成し、学習活動を構築していくという一連の方法を身につけることが、本授業の概要である。 また、「生活環境」は、環境の時代と言われながら、ともすれば授業の主題から遠ざけられがちな生活環境を身近で切実な問題と捉え、それらを具体的に追及することにより、より健全な人間社会を構築するきっかけを作る。予め小学校低学年・中学生など対象者を設定し、対象者により深く理解してもらうにはどうすればよいか、発表・説明の方法を工夫し実践する。			
学生に対する評価の方法 「国際理解教育」では、授業への態度(30%)、数回実施する小レポート(30%)、国際理解教育に関する学習活動計画案(40%)等で総合的に評価する。 「生活環境」では、授業への参加の積極性(20%)テーマの掘り下げ方と発表にあたっての創意工夫(40%)、発表の成果(30%)小レポート(10%)などで総合的に評価する。本授業は、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教職総合演習として国際理解教育を学ぶにあたっての目的と講義内容、授業の進め方について 第2回 総合学習の歴史、現行学習指導要領に示された総合的な学習の時間と国際理解教育とは・・・ 第3回 国際化への流れと理念・国際理解のための基本姿勢、国際理解教育の実践の目標と内容及び学習方法、国際比較研究（課題研究）について 第4回～5回 国際理解教育の具体的に実践化する手順とは・・・ 国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）別に実践例をもとに研究 ①人間理解のための学習 ②生活や文化に着目した学習 ③世界の現実理解のための学習 第6回～7回 個々に設定した国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）に関し、教育的意義や発達段階を踏まえて発表し、意見交換する。 第8回 個々に設定したテーマ（課題）を具体化した実践活動（総合的な学習）について評価方法を踏まえて発表する。			

ここから「生活環境」

第9回 生活環境に関する話題提供(1)及びグループ分け。

第10回 生活環境に関する話題提供(2)及び研究・発表のテーマ設定並びに良い話し方のヒント。

第11回～14回 グループ発表(毎回2～3グループずつ)。

第15回 全員による反省と討論。小レポート。

使用教科書

参考図書「国際理解教育」(多田孝志著、東洋出版社)

(国際理解教育に関する理論や具体的な実践例等について、資料を配布して授業を進める)

「生活環境」では教科書は使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

「国際理解教育」の授業に臨むにあたり、現在、日本や世界で論点や争点になっていることに関し、日頃から興味関心を持ち、メディアや関連する書物等から情報を得よう努力しておくこと。

「生活環境」の授業については、日頃から新聞・テレビなどで報道される環境問題に注意し、人類を含めた私物の生活環境として、現在の地球がどのような状態にあるのかを考え、勉強する習慣を身につけておく。併せて、アナウンサーや落語家の話し方に注意し、話術の向上を志す。

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2012年前期まで継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 教育実習の効果を上げるための留意点を身につける。生徒を引きつける授業が出来ること。観点別評価・指導と評価の一体化について理解した授業が出来ること。教師としての基本的な生活態度定着化。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を身に付けさせる。			
授業の概要 教育実習全体の概要、教育実習の意義、実習効果を上げるための留意点を知る。観点別評価・指導と評価の一体化について理解し、これに基づいた学習指導案を作成する。この指導案をもとに全員が交代で50分の模擬授業を行い、研究協議する。また、受け入れ校の教職員や生徒に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について協議する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と模擬授業発表者に対する評価の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <3年次後期> 1回 教育実習の意義と課題、教育実習の範囲と実習内容 教員養成課程と教育実習、教育実習の意義、課題および実習生としての自覚 学習指導、学級経営、校務分掌、部活動指導 2回 全般的留意事項、実習過程での留意点 勤務・服務などについて、実習前（事前指導、実習校の決め、実習校との打ち合わせ） 実習中（観察、参加、研究授業）、実習後（反省会への準備、実習校との関連事務、大学との関連事務） 3回 良い授業のための工夫 生徒理解、自作教材、授業参観、教材研究、板書の工夫。観点別評価・指導と評価の一体化。 4回 以降 観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。 各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 この模擬授業は4年生の前期、教育実習に出る直前まで継続して行う。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 全員が交替で発表し研究協議した模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成することを心掛ける。自己の模擬授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2010年度から継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 単元計画から日案作成までを体系化し教育実習直前の総仕上げが出来ること。実習先との綿密な事前打ち合わせが出来ること。実習校での実践結果をまとめ上げ実践の自信を確実にする。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を確かなものにする。			
授業の概要 4年次の前期は、3年次の後期に学んだ内容を教育実習で実践し、教師として理論と実践の融合に必要な力量を磨く。教育実習終了後、実習校の研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして実践結果を発表しあい、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究する。			
学生に対する評価の方法 実習直前の指導、実習校での評価、事後指導結果を総合し、PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <4年次前期> 1回～5回（4月～5月） 3年次後期に引き続いて観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 6回 教育実習に出る直前の指導 3年次後期、1～3回で指導した内容の再確認と総仕上げ。特に勤務・服務、実習生としての心構えを重視。 （6月第1～3週、教育実習） 7回以降 教育実習を終えた後、実習中全日の行動を簡潔にまとめた報告書の作成、この報告書と研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして体験を発表しあい、自己評価、相互評価を通して、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究協議する。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 実習校の指導教官と綿密な打ち合わせを行い、大学での模擬授業学んだ内容を踏まえて、生徒を引きつける自作教材を作る。板書計画と授業のし易い学習指導案を作成する。実習校での研究授業の前に何度も自作教材と指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習 I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ ：教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話 (オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について)、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施 (実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する)、指導者とのティームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみる事。			

[授業科目名] 教育実習Ⅱ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 中学免許も希望する時、実習Ⅰに続けて履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ： 教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			